千葉県文化財センター調査報告第220集

# 小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書

平成３年度

財団法人　千葉県文化財センター

# 小見川町白井大宮台貝塚確認調査報告書

平成３年度

財団法人　千葉県文化財センター

# 序

千葉県には、23,000ヵ所にのぼる多くの遺跡が所在しますが、その中で縄文時代以降の貝塚は647ヵ所確認されています。これらの貝塚は所在数、個々の外見、規模などは周知のところですが、一部の著名な貝塚を除いてはその実態が明らかにされた例は数少ないのが実情です。

このため、千葉県教育委員会では、昭和63年度から国庫補助を受けて、重要遺跡確認調査の一環として、これらの貝塚のうち重要性が高く、かつ開発等の影響を受けるおそれのあるものについて、今後の保護、活用のための資料を得る目的で、測量及び確認調査を実施し、その実態を明らかにしてきました。

今年度は、香取郡小見川町に所在する白井大宮台貝塚の調査を財団法人千葉県文化財センターに委託して実施しました。その結果、従前、3地点の貝層より形成されているものと考えられていた本貝塚は、少なくとも4地点の貝層から成り立っていることがわかり、そのいずれの貝層も縄文時代中期に形成されたものであることが判明しました。また当該期の多量の遺物に加えて、埋葬施設などの遺構が多数確認できました。今回の調査で、特に注目されるのは、多数発見されました埋葬施設のうち、一つの土壙墓からほぼ完全な形で人と犬とイノシシの幼獣の骨が埋葬されているのが発見されたことが上げられます。当該期の人と犬の埋葬例は、千葉県内においても多く発見され、犬が縄文の昔から人と親密な関係にあったことが指摘されているところですが、食糧の対象であったイノシシの埋葬例は、今回の発見例を含めても全国的に非常に貴重な発見であります。このように今回の調査は、貝塚の僅かな部分に当たる調査ではありましたが、予想以上の大きな成果を得ることができました。

このたび、この調査成果を報告書として刊行する運びとなりましたが、本書が学術的資料としてはもとより、文化財の保護、活用の一助として、広く一般の方々にも利用されることを願ってやみません。

終わりに、文化庁を始め、小見川町教育委員会、財団法人千葉県文化財センター、土地所有者を始めとする地元の皆様に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

千葉県教育庁生涯学習部
文化課長　白　石　竹　雄

# 例　言

1．本書は千葉県香取郡小見川町白井161他に所在する白井大宮台貝塚（遺跡コード344-003）の確認調査報告書である。

2．本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて行っている県内主要貝塚確認調査の第4年次であり、調査は財団法人千葉県文化財センターに委託して実施した。

3．調査は、平成3年10月1日から同年10月31日まで実施した。

4．調査及び整理作業・報告書作成は、研究部長　天野　努、部長補佐　渡辺智信の指導のもとに、技師　四柳　隆が担当した。

5．報告書の作成にあたっては、人骨の鑑定を東京慈恵会医科大学第1解剖学教室　加藤　征氏に、脊椎動物の同定を千葉県立中央博物館　小宮　孟氏にお願いした。

6．図版1で使用した航空写真は、京葉測量株式会社の撮影によるものである。

7．本書で使用した地図は、以下のとおりである。

　第2図　国土地理院発行1/25,000地形図（佐原東部・岩部を合成）

　第30図　小見川町発行都市計画図1/2,500

8．調査の実施に当たっては、白井区長　諏訪伝司氏をはじめ所有地を快く貸して下さった大塚　潔、諏訪　孝、諏訪　典、諏訪春男、諏訪悦正、林　政蔵、宮崎寛視の諸氏には多大なる御協力を頂いた。記して感謝の意を表します。

9．現地調査から報告書の作成にいたるまで、下記の諸機関・諸氏より多くの御指導・御協力を賜った。ここに記して感謝の意を表します。（敬称略）

　小見川町教育委員会　　財団法人香取郡市文化財センター

　加藤　征　　小宮　孟　　石橋宏克　　荻　悦久　　宇田川浩一

　相京邦彦　　奥田正彦　　平野　功　　田井知二　　赤塚弘美

# 本文目次

序　文
凡　例

Ⅰ　序　章……1
　1．遺跡の位置と環境……1
　2．過去の調査と研究史……1
　3．周辺の遺跡……3
　4．調査の方法と経過……5
Ⅱ　各トレンチの状況……7
Ⅲ　検出遺構……12
Ⅳ　出土遺物……16
　1．土　器……16
　2．石　器……31
　3．土製品……36
　4．骨角器……36
　5．動物遺存体……36
付章1　白井大宮台貝塚人骨　東京慈恵会医科大学　加藤　征……41
　2　脊椎動物遺存体　千葉県立中央博物館　小宮　孟……45
Ⅴ　まとめ……48
　1．貝層範囲と各地点の呼称及び形成時期……48
　2．台地上の集落……48
　3．SK-01出土のヒトとイヌ及びイノシシの埋葬……48
　4．おわりに……49

# 表目次

第1表　トレンチ杭座標値……6
第2表　出土土器組成表……16
第3表　出土石器組成表……33
第4表　出土石器属性表……34
第5表　動物遺存体種名一覧……37
第6表　貝サンプル一覧……38
第7表　貝類同定結果……39
第8表　貝類計測値分布（1）……39
第9表　貝類計測値分布（2）……40
第10表　人骨観察結果……43
第11表　脊椎動物の調査地点別同定結果…47

# 挿図目次


第１図　西村正衛氏の調査区……2
第２図　周辺の遺跡……4
第３図　１Ｔ……7
第４図　２Ｔ・３Ｔ……8
第５図　６Ｔ……9
第６図　７Ｔ・８Ｔ……10
第７図　９Ｔ……11
第８図　ＳＫ-01 ……12
第９図　ＳＫ-01　出土人骨 ……13
第10図　SK-01　出土イヌ骨……13
第11図　SK-01　出土イノシシ骨……14
第12図　SK-01　出土土器……14
第13図　SK-02及び出土人骨……15
第14図　SK-02　出土土器……15
第15図　出土土器数量比……16
第16図　出土土器拓影図（１）……17
第17図　出土土器拓影図（２）……20
第18図　出土土器実測図（１）……21
第19図　出土土器拓影図（３）……22
第20図　出土土器拓影図（４）……23
第21図　出土土器実測図（２）……24
第22図　出土土器拓影図（５）……25
第23図　出土土器実測図（３）……27
第24図　出土土器拓影図（６）……28
第25図　出土土器拓影図（７）……29
第26図　出土土器拓影図（８）……30
第27図　出土石器実測図（１）……31
第28図　出土石器実測図（２）……32
第29図　出土土製品実測図……35
第30図　周辺の地形……50
第31図　地形測量図……51


# 図版目次


図版１　白井大宮台貝塚周辺航空写真
図版２　(1)遺跡遠景(八本貝塚付近より)
　(2)SK-01人骨・イヌ骨検出状況
図版３　(1)１Ｔ貝層検出状況
　(2)３Ｔ貝層断面
　(3)６Ｔ貝層断面
図版４　(1)７ＴSK-01・02検出状況
　(2)SK-01土層断面
　(3)SK-01イヌ骨・イノシシ骨検出状況
図版５　(1)SK-01イノシシ四肢骨近影
　(2)SK-01イノシシ頭骨近影
　(3)SK-01イヌ骨近影
図版６　(1)SK-01人骨近影
　(2)SK-02土層断面
　(3)SK-02人骨出土状況
図版７　(1)SK-02人骨近影（１）
　(2)SK-02人骨近影（２）
　(3)９Ｔ貝層断面
図版８　出土土器（１）
図版９　出土土器（２）
図版10　出土土器（３）
図版11　出土土器（４）
図版12　(1)出土土器（５）
　(2)SK-01出土土器
図版14　(1)SK-02出土土器
　(2)出土石器

# Ⅰ　序　　章

## 1．遺跡の位置と環境

白井大宮台貝塚は、小見川町の南西部、ＪＲ成田線小見川駅の南西約４㎞のところに位置し、行政的には香取郡小見川町白井161他に所在する。小見川町は河口より約25㎞上流の利根川右岸に所在し、その中心部を利根川の支流である黒部川が北流し、下総丘陵を開析して広大な沖積平野を形成している。沖積平野は水田として利用されており、広大な水郷地帯となっている。沖積平野の東・南・西の三方は標高40m前後の下総丘陵により取り囲まれており、多くの遺跡が周知されている。特に貝塚が多く存在する地域として知られ、東には阿玉台貝塚や良文貝塚、南には白井大宮台貝塚や内野貝塚、西には城ノ台貝塚や木内明神貝塚等が分布している。

白井大宮台貝塚は、黒部川の支流である清水川によって樹枝状に開析された支谷の最奥部に立地する。この支谷は下総丘陵の奥深くまでかなり複雑に入り込んでおり、遺跡周辺で台地上の平坦面を確認することはかなり困難である。遺跡の所在する台地は通称大宮台（王宮台）と呼ばれており、珍しく広い平坦面を持つ北西へ延びる舌状台地で標高は約40mを測る。台地の北東・北西・西・南には支谷が入り込んでかなりの急斜面となっているが、それぞれの斜面に貝層の堆積が確認できる。従来各貝層は白井大宮台貝塚・白井雷貝塚・白井通路貝塚と字名を用いて呼称されることが多かったが、本来台地上の同一集落により投棄されたひとつの貝塚であることは疑いのないところである。そのため小見川町教育委員会では白井大宮台貝塚A・B・C地点と設定したことがあるが[1]一般化するには至っていない。いずれにしても３地点に分けて呼ばれてきたが、実際には４ヶ所の支谷に面する斜面に貝の投棄が行われていることは先述のとおりであり、本報告では北東斜面より反時計回りにA～D地点と呼称して記述を進めたい。なお、今後もこの名称を用いることが妥当と思われる。

## 2．過去の調査と研究史

白井大宮台貝塚が大変古くから知られていたことは明かであるが、発見・周知の年代についての明確な資料を得られなかった。最初の調査は八木奬三郎・林若吉の両氏によって明治28年12月に実施された[2]。台地西南斜面の貝層を発掘したようで、出土した土器の特徴から現在の五領ケ台式・阿玉台式を検出されたものと思われる。

続いて昭和２年10月、大山柏氏によって南側斜面の調査が行われた[3]。貝層中に加工痕のない石片が多い、獣骨・魚骨は少ない、貝類は鹹水産のものに限られる等の成果を挙げられている。

---

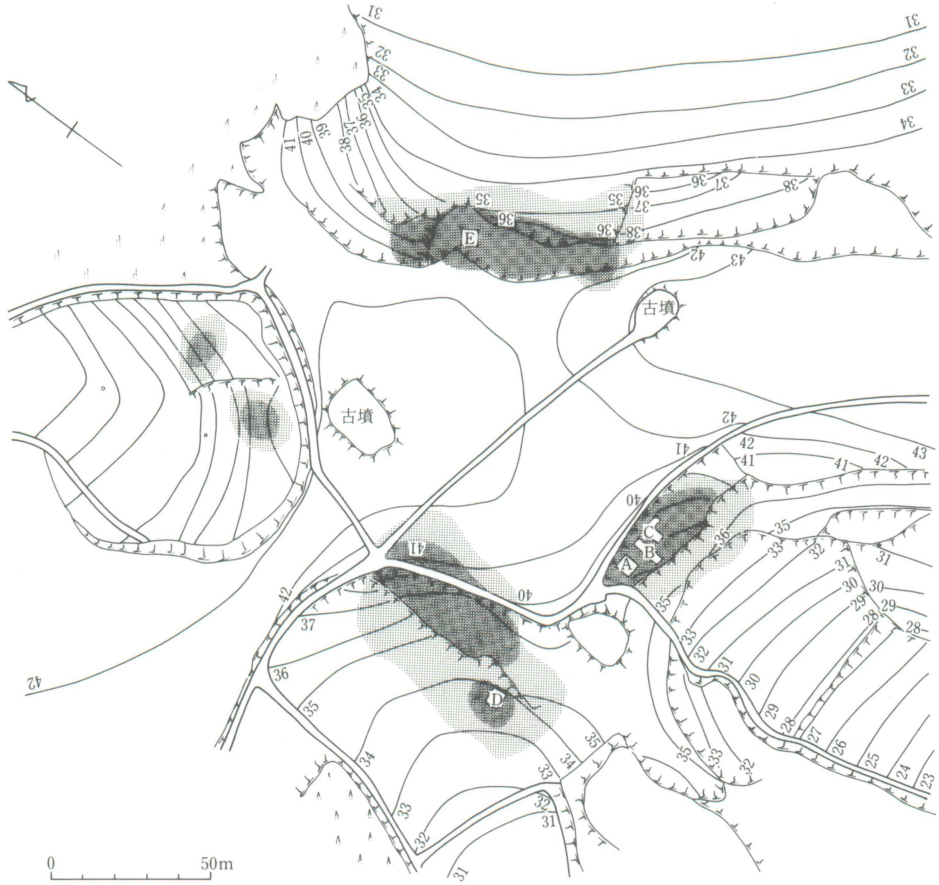
1　小見川町教委『小見川町埋蔵文化財分布地図』　1980

2　八木奬三郎他「下総香取郡白井及貝塚村貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』127　1896

3　大山　柏　「下総香取郡神里村の貝塚」『史前学雑誌』3-5　1931

土器は勝坂式とされているが、これは当時縄文中期諸型式の総称として使用された型式名であり、図版に示された土器は阿玉台式及び加曽利E式に属するものである。

戦後になると西村正衛氏が利根川下流域をフィールドとする縄文文化の地域的研究を開始され、その一環として昭和25・27・28年の3次にわたって調査されている[1]。第1次を白井通路貝塚、2・3次を白井雷貝塚と称して報告がなされているが、これは当報告のC地点・D地点にあたる。その報告の中で貝類の発育が悪いこと、獣骨が比較的少ないこと、下小野式土器（今回は結節文を持つ土器として前期末のものと一括した）は東部関東の地域的な土器であること等多くの成果が提示されている。また、付近の木内明神貝塚、向油田貝塚、阿玉台貝塚等の調査成果と照らして阿玉台式土器の細分案を示され、これが今日の阿玉台式細別型式の基礎となっている。




第1図　西村正衛氏の調査区（昭和25、27、28年）

1　西村正衛　「千葉縣香取郡神里村白井雷貝塚発掘概報」『古代』3　1951
　西村正衛　「千葉縣香取郡白井雷貝塚（第二次・三次調査）」『学術研究』3　1955
　西村正衛　『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』　1984

昭和46年9月7日から8日にかけて千葉県は記録的な集中豪雨にみまわれた。小見川町では総雨量が320㎜に達したという記録が残されており、町役場をはじめ沖積地に建つ家屋はのきなみ床上浸水の被害を受けた。その際白井大宮台貝塚では貝層が崩落・流失したようで、そのために露呈した多くの遺物を昭和48年に斉木勝氏が紹介している[1]。ここでは初めてA地点貝層出土の資料が公に提示され、その中にはそれまであまり知られていなかった加曽利E式土器が多く含まれている。

以後、白井大宮台貝塚の重要性については議論の対象になったものの、まとまった資料紹介や学術調査は行われていない。

### 3．周辺の遺跡

白井大宮台貝塚の周辺には縄文時代から中近世にいたる数多くの遺跡が存在する。特に縄文時代の貝塚の多い地域として古くから知られ、西村正衛氏が実践された地域的研究には絶好のフィールドとなっている。なお、小見川町内だけでも城山古墳群、小見川城跡をはじめ多くの後世の遺跡が知られているが、ここでは縄文時代に限って扱うこととする。また、先土器時代の遺跡はあまり知られていないが、これは調査例の少なさによるものであろう。

周辺の縄文時代の遺跡中最も古いのは、北北東約4㎞にある城ノ台貝塚である。早期沈線文系土器を主体とする貝塚で、北・南の2地点が知られている。昭和20年代に池田次郎氏[2]や吉田格氏[3]によって調査され、沈線文系土器群の型式細分に大きな成果を残している。近年では1989・90年に千葉大学によって調査され、その報告が待たれるところである。城ノ台貝塚の他には佐原市鴇崎貝塚、神崎町西之城貝塚等が著名である。

前期の貝塚は小見川町内では知られておらず、最も近いところでは神崎町植房貝塚が挙げられる。また、霞ヶ浦沿岸になるが茨城県稲敷郡の浮島貝塚、興津貝塚等の標識遺跡も北西15㎞程度とかなり至近距離にある。また、図に示した小塚野遺跡は、貝層は持たないものの縄文前期の大規模な集落と紹介されている[4]。

続く中期は白井大宮台貝塚をはじめ最も多くの貝塚が知られており、貝塚文化の最盛期といえる。北方約3.5㎞にある木内明神貝塚は阿玉台式を主体とする馬蹄形貝塚で、古くは大山柏氏によって白井大宮台貝塚と同日に調査されている。昭和33年には西村正衛氏が調査されている[5]。

---

1　斉木　勝　「千葉県小見川町白井大宮台貝塚」『考古学雑誌』59－1　1973
2　池田次郎　「城ノ台貝塚出土早期縄文式土器の細別」『広島医大論文集』3　1950
3　吉田　格　「千葉県城ノ台貝塚」『石器時代』1　1955
4　山田町教委『山田町の遺跡－千葉県山田町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書－』　1984
5　西村正衛　「千葉県小見川町木内明神貝塚（第1次調査）
－東部関東における縄文中・後期文化の研究－」『学術研究』18　1969

第２図　周辺の遺跡 (1：50,000)

西方約２kmには向油田貝塚がある。行政的には山田町に属するが、白井大宮台貝塚と同一支谷の下流の斜面に立地しており、阿玉台式土器を主体とする。篠遠喜彦、ジェラード・グロードら日本考古学研究所の諸氏によって調査され[1]、昭和26年には西村正衛氏によっても調査されている[2]。白井大宮台貝塚の南方約500mには加曽利Ｅ式を主体とする八本貝塚がある。これは昭和58年、道路工事の際に発見されたものである。西方約1.5kmにある天神後遺跡は平成元年度まで数次にわたって当センターで調査しているが、五領ケ台式を中心とする良好な資料が得られている。天神後遺跡の僅かに西方には阿玉台式を主体とする斜面貝塚の内野貝塚が所在する[3]。東方の台地に目を移してみると、標識遺跡として著名な阿玉台貝塚がある[4]。こちらの台地も非常に複雑な地形を呈しており、斜面に数地点にわたって貝層の堆積が見られる。西村氏による阿玉台式土器の編年研究は、先述の木内明神貝塚、向油田貝塚、白井大宮台貝塚や阿玉台貝塚における層位的事実に基づいてなされている。なお、図の範囲外であるが佐原市下小野貝塚・三郎作貝塚・磯花遺跡・江戸崎町村田貝塚等、当地域には学史上重要な縄文時代中期の遺跡が多数存在する。

後期では、阿玉台貝塚の東方約800mに国指定史跡である良文貝塚がある。古くから知られており八木奨三郎・大山柏らによって調査されている。また白井大宮台貝塚の南方約1.5kmには神生遺跡が所在する。周辺では稀にみる広大な台地上に立地する堀之内～加曽利Ｂ式期の大集落跡で、遺構内貝層と思われる地点貝塚が４地点知られている。木内明神貝塚の南に隣接する台地上には清水堆遺跡があり、堀之内期の斜面貝層と加曽利Ｂ～安行II式を主体とする集落が知られている。

なお晩期を主体とする遺跡は銚子市余山貝塚が知られているが、数的には極端に減少するようである。

### ４．調査の方法と経過

今回の調査は斜面貝塚の堆積範囲の確認及び貝塚を形成した集落の構造の解明というふたつの目的をもって実施した。実際には調査面積が200m²と非常に限られていたため、貝層範囲についてはこれまで余り調査されていないＡ地点貝層を中心に実施することとし、情報の不足する

---

1　ジェラード・グロード、篠遠喜彦他『姥山貝塚』　日本考古学研究所　1952

2　西村正衛　「千葉県山田町向油田貝塚出土の土器
－東部関東における縄文中・後期文化の研究－」『学術研究』21　1972

3　西村正衛　「千葉県香取郡小見川町内野貝塚－縄文中期文化の研究－」　1984

4　下村三四吉「下総香取郡阿玉台貝塚探究報告」『東京人類学会雑誌』９－97　1894
西村正衛　「千葉県小見川町阿玉台貝塚
－東部関東における縄文中・後期文化の研究－」『学術研究』19　1970

分についてはボーリング探査で補うこととした。各トレンチには基準となる杭を2点設置したが、その座標は第1表のとおりである。なお、トレンチ番号は設定した順に付したもので、地点や方角等を意識したものではない。

調査は平成3年10月1日より開始し、1Tより順次掘削を開始した。10月上旬は例年になく雨が多く、作業の進捗に支障をきたした。トレンチの調査と併行して基準点測量及び地形測量を業者に委託して実施し、10月28日までに業務を終了した。また、中旬よりボーリング探査を実施し、まず斜面貝層の堆積範囲の確認、続いて台地上の遺構の有無の確認を行った。10月14日には7Tにおいて土壙2基を検出し、即調査に移行したところSK-01からイヌ骨、SK-02からは幼児人骨を確認したため慎重な調査が要求されることとなった。10月31日、すべての現場作業を終了し、撤収するに至った。

トレンチは合計9ヶ所を設定し総調査面積は200m²である。各トレンチの詳細については次章に譲る。土壙については5基確認したが、そのうち覆土中に貝層を有する2基について調査した。SK-01ではほぼ床面直上から成人骨及びイヌ骨が出土したほか、覆土上層にはイノシシ幼獣が埋葬されていた。これらすべてについて実測・撮影を行ったのちコラムサンプルを採集した。SK-02でも覆土上層に幼児骨が埋葬されていたが、調査期間の関係上これを取り上げた時点で調査を終了し埋め戻した。

ボーリング探査は長さ1mのボーリング棒を用いて2m間隔程度の精度で実施したが、必要に応じて精密に探査した。貝層についてはボーリング棒先端に貝殻の感触を得た範囲を貝層堆積範囲と認定したため、貝層上面が地表下1m以上に存在するところは貝層範囲として捉えられていない可能性が強い。遺構についてはある程度の範囲で地山の落ち込んでいる地点を認定することとした。その結果台地北側では住居跡や土壙と思われる落込みを十数ヶ所確認したが、南側では全く確認することが出来なかった。これは後になって判明したことであるが、台地南側では過去数年に渡ってゴボウ等の根物が耕作されており、その際かなりの遺構が破壊されたためであろうと思われる。

第1表　トレンチ杭座標値

| | X 座 標 | Y 座 標 | | X 座 標 | Y 座 標 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1T－NE | －18886.249 | 67024.282 | 1T－SW | －18892.786 | 67009.693 |
| 2T－NE | －18873.978 | 67056.446 | 2T－SW | －18878.449 | 67048.724 |
| 3T－NE | －18887.848 | 67065.705 | 3T－SW | －18890.940 | 67056.250 |
| 4T－NE | －18894.173 | 67074.566 | 4T－SW | －18897.450 | 67068.418 |
| 5T－NE | －18974.713 | 67059.418 | 5T－SW | －18981.263 | 67054.828 |
| 6T－NE | －18914.107 | 67050.229 | 6T－SW | －18919.182 | 67045.418 |
| 7T－ N | －18923.599 | 67061.012 | 7T－ S | －18933.522 | 67062.086 |
| 8T－ N | －18940.480 | 66997.565 | 8T－ S | －18960.275 | 66994.841 |
| 9T－ E | －18914.896 | 66956.780 | 9T－ W | －18912.722 | 66944.999 |

## II　各トレンチの状況

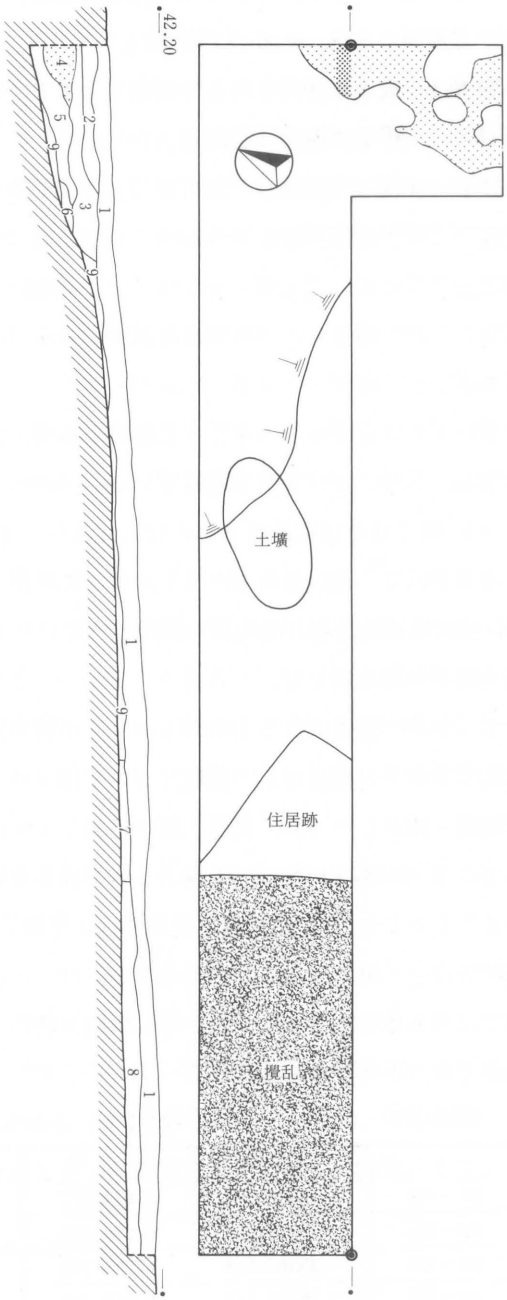
１Ｔ　Ａ地点貝層の上端を確認する目的で台地上面に斜面に直行する形で２×16mを設定した。表土約30cmを介してソフトロームに達していたが、西側約４ｍは耕作により攪乱されていた。東より５ｍ付近に傾斜交換点があり、平坦面で住居跡１軒・土壙１基を確認した。住居跡は奈良・平安期のもので、周辺からは土師器・須恵器も出土している。斜面に入ったトレンチ東南隅からは貝層を確認したため、南へＬ字形に２×２ｍ拡張した。

台地上面ではロームが約30cmと薄く、下位には成田層への漸移層と思われる黄白色砂質粘土を混じる黒色土の堆積がみられた。

貝層はハマグリ主体の黒色土を含む混土貝層で、貝層周辺から出土した土器は五領ケ台式期のものがほとんどであった。貝層の下位には黒色土の堆積がみられた。

２Ｔ　Ａ地点貝層下方には広く貝が散布しているが、貝層本体の堆積範囲を確認するため２×９ｍのトレンチを設定した。第１・２層にも貝が含まれているが、いずれも破砕貝であるうえに層全体のしまりもなく耕作による攪乱や崩落による２次堆積と思われる。

続いてトレンチ西端より3.5m付近までハマグリを主体とする暗褐色混土貝層を検出した。貝層中には土器はあまり含まれず、いずれも小破片であったため形成時期ははっきりしないが、加曽利Ｅ式の包含層（ＥⅠ～ＥⅣ）である第４層の上位に堆積しているため、該期以降のものであることは間違いない。この包含層には多量の土器、石器が包含されている

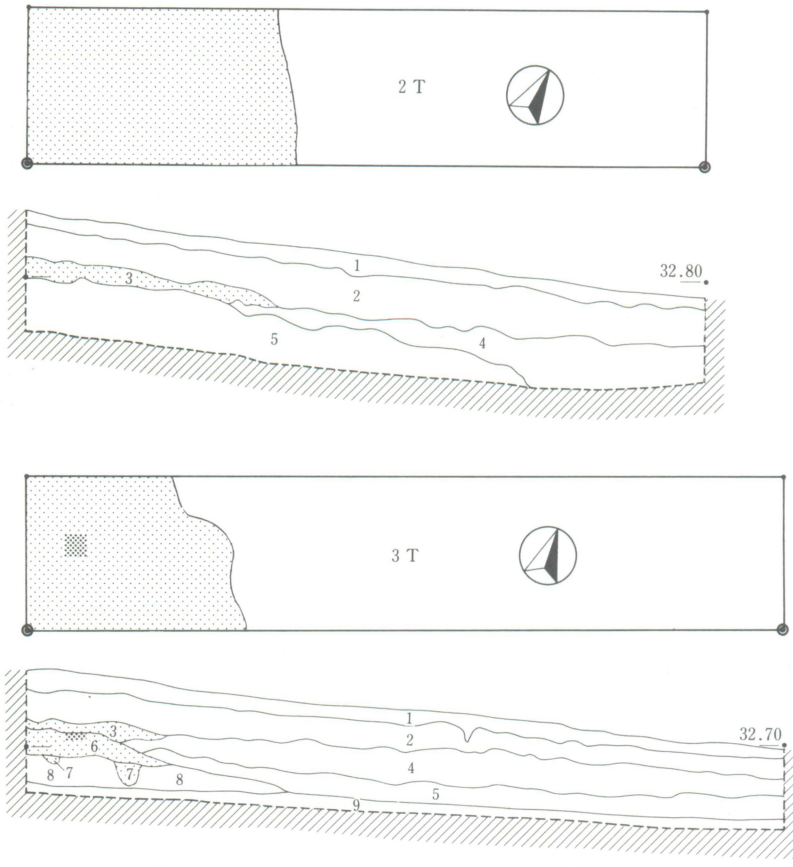



１Ｔ　土層説明
1　耕作土層
2　暗褐色土層　砂粒・ローム粒を少量含む
3　暗褐色土層　ローム粒を含む　２層に比し暗い
4　混土貝層　黒色土を混入する　ハマグリ主体　マガキ・ヤマトシジミも目立つ
5　黒褐色土層　ローム粒を含む　粘性強くしまる
6　褐色土層　ロームブロックを多量含む
7　茶褐色土層　奈良・平安期の住居跡覆土
8　攪乱層
9　ソフトローム層

第３図　１Ｔ（1：100）

が、続く第５層にはほとんど含まれていなかった。２Ｔについては隣接する３Ｔで同様の堆積がみられたことや調査期間の関係で第５層下面まで検出したところで調査を中止した。

３Ｔ　２Ｔの南方約10mのところに２×10mのトレンチを設定した。設定の目的は２Ｔと同様であるが、調査以前から２次堆積の存在が予想されたため、より詳細な貝層堆積範囲を知るためにあえて調査することとした。層位的には第４層までは２Ｔと同様の堆積がみられたが、それ以下はかなり複雑な様相を示していた。茶褐色の加曽利Ｅ式期の包含層（第４層）の下に暗褐色の包含層があり、ここでは加曽利Ｅ式前半期の土器を中心に少量の阿玉台式土器を含ん




２Ｔ　土層説明

1　混貝土層　茶褐色土中に破砕したハマグリ・アカニシ等を含む　斜面の貝層が崩落したものと思われる
2　混貝土層　暗褐色土中に破砕したハマグリ等を含む　全体にしまりが悪い　旧表土と思われる
3　混土貝層　暗褐色土を混入する　ハマグリ(概して小さい)主体　獣骨を少量出土したほかは遺物は少ない
4　茶褐色土層　ローム粒を含む　よくしまる　土器・石器を大量に含む加曽利Ｅ式期の包含層
5　茶褐色土層　４層に比しやや暗い　遺物の量は極端に減少する

３Ｔ　土層説明

1　混貝土層　２Ｔ第１層に対比
2　混貝土層　２Ｔ第２層に対比
3　混土貝層　２Ｔ第３層に対比
4　茶褐色土層　２Ｔ第４層に対比
5　暗褐色土層　加曽利Ｅ式前半・阿玉台式期の包含層
6　混土貝層　暗褐色土を少量混入する　ハマグリ主体　マガキ・アカニシ等も多く見られるがいずれも小さい　獣骨を大量に出土する
7　混土貝層　茶褐色土を混入する　貝は細かく破砕されている　ピット等の遺構の可能性あり
8　茶褐色土層　２Ｔ第５層に対比
9　黒褐色土層　粘土を少量含む　成田層への漸移層か

第４図　２Ｔ・３Ｔ（1：100）

でおり、加曽利E式の後半の土器はほとんどみられなかった。なお第4層には2Tよりもさらに大量の遺物が含まれていた。

続いて第6層とした混土貝層が堆積する。ハマグリ主体で暗褐色土を混入しており第3層(混土貝層）との視覚的分層はやや困難であったが、貝や獣骨の包含量が多いという相違が認められた。また第3層と第6層の間に第4・5層が堆積している様子を観察することができ、貝層の形成に多少の休止期間があったことが窺える。

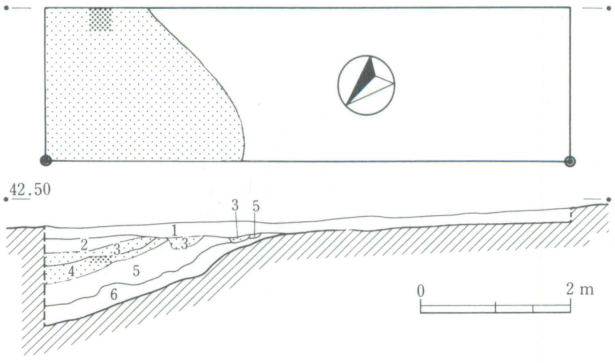
第8層は2Tの第5層と同一層で、中に破砕貝を含むピット状の落込みが認められた。さらに下層には1Tでみられた黄白色砂質粘土を混入する黒褐色土が堆積しており、成田層への漸移層と認定して調査を終了した。なお当層には遺物は全く包含されていなかった。

4T　3Tのさらに南約10mの地点に2×7mのトレンチを設定した。地形的に2・3Tよりも旧地形を残していると思われたため、攪乱を受けていない貝層の範囲及びA地点貝層の南端を確認することを目的に設定したが、台地上面からの自然の排水路になっているようで、10月の長雨のためトレンチの壁から水が涌くような状態が続いたため調査を中止した。

5T　南斜面への肩に近い部分に径6m程の貝散布があり、ボーリング探査でも貝の堆積を認めたため、遺構内貝層と判断して2×8mを設定した。表土層約30cmを除去したところローム層上面を検出したが、そのほとんどはいわゆる根物の耕作によって攪乱されていた。貝も5cm程堆積していたが、表土中に混入したものであることを確認した。

地権者の話では、南斜面に面する畑では過去にゴボウ等の根物の耕作を行っていたそうで、ボーリング探査によっても遺構は確認できなかった。ただし表土中には多量の遺物が含まれており、付近で掘られていたイモ穴の底面付近で炉と思われる焼土の堆積がみられたことから、遺構が存在したのは確実と思われる。

6T　東斜面貝層の台地上南端の堆積範囲の確認を目的に2×7mを設定した。付近の古墳の北東側には貝散布が認められ、台地上まで貝層の堆積が及んでいることが予想された。




6T　土層説明

1　耕作土層
2　暗褐色土層　ローム粒を含む
3　混貝土層　暗褐色土中に破砕した貝を含む
4　混土貝層　暗褐色土を含むが下方ほど黒味が強い傾向が見られる　ハマグリ主体　マガキ・アカニシ等も多く見られる
5　黒褐色土層　ローム粒を含む　粘性強くよくしまる
6　ソフトローム層

第5図　6T (1：100)

表土層は15cm程と薄く、トレンチ北東壁より1.5～３ｍの範囲で暗褐色土層を介して貝層の堆積がみられた。貝層上面は耕作によって削平されているようである。

貝層は大きく２層に分けられ、上部は破砕貝を多く含む暗褐色混貝土層、下部はハマグリ主体の混土貝層となっている。下部貝層では出土した２枚貝の６割強が合弁の状態であった。下部貝層上半は貝が密に詰まって暗褐色土をわずかに混入しており、下半では黒色土を比較的多く混入するという相違がみられたが、境界がはっきりしないため一層として扱うこととした。結節文の土器が多く出土したが、五領ケ台式・阿玉台式も少量含まれていた。

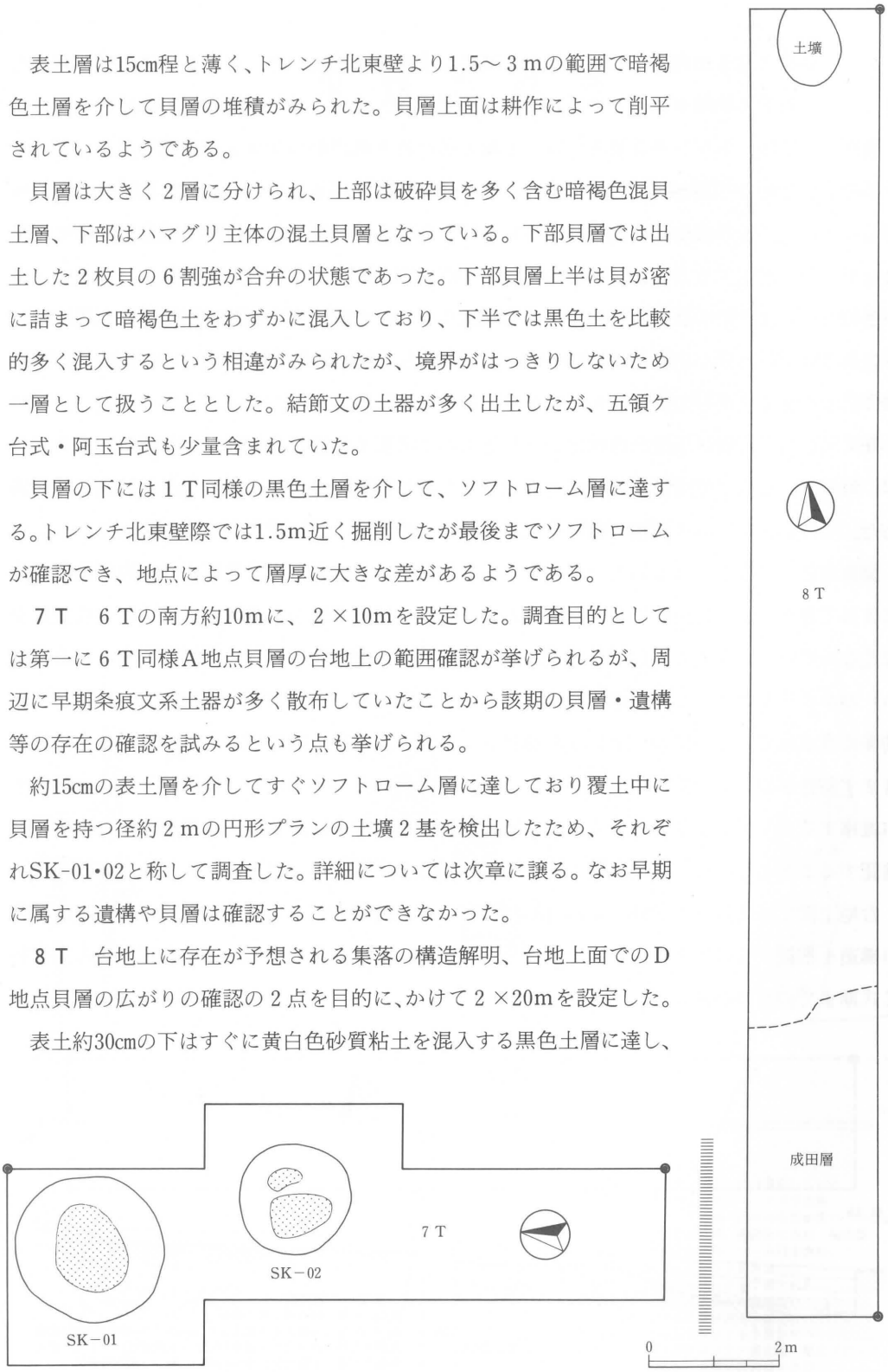
貝層の下には１Ｔ同様の黒色土層を介して、ソフトローム層に達する。トレンチ北東壁際では1.5m近く掘削したが最後までソフトロームが確認でき、地点によって層厚に大きな差があるようである。

７Ｔ　６Ｔの南方約10mに、２×10mを設定した。調査目的としては第一に６Ｔ同様Ａ地点貝層の台地上の範囲確認が挙げられるが、周辺に早期条痕文系土器が多く散布していたことから該期の貝層・遺構等の存在の確認を試みるという点も挙げられる。

約15cmの表土層を介してすぐソフトローム層に達しており覆土中に貝層を持つ径約２ｍの円形プランの土壙２基を検出したため、それぞれSK-01･02と称して調査した。詳細については次章に譲る。なお早期に属する遺構や貝層は確認することができなかった。

８Ｔ　台地上に存在が予想される集落の構造解明、台地上面でのＤ地点貝層の広がりの確認の２点を目的に、かけて２×20mを設定した。

表土約30cmの下はすぐに黄白色砂質粘土を混入する黒色土層に達し、




第６図　７Ｔ・８Ｔ（1：100）

トレンチ南壁より５m程までは表土直下に純粋な成田層を検出した。表土も多量の砂質粘土を含んでおり非常に粘性が強い。貝層は検出できず、これはボーリング探査でも裏付けられた。

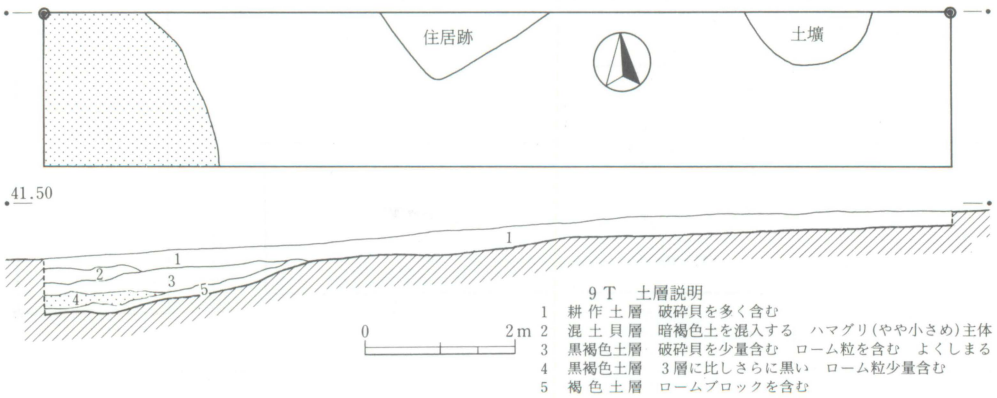
遺構としては、トレンチ北壁際付近で土壙と思われる楕円形のプランを確認したが、ボーリングを試みたところ15cm程で底面に達し、上半部は既に削平されているものと判断して調査は行わなかった。このほかには遺構は検出することができず、台地上の集落の構造については残念ながら全く把握することができなかった。

遺物としては表土中に阿玉台式・加曽利Ｅ式を中心とする土器、石鏃・剝片等の石器がかなり包含されていたほか土師器•須恵器も多くみられた。地表面にも多くの遺物が散布しており、耕作による攪乱や削平の影響をかなり受けているものと思われる。

９Ｔ　Ｃ地点貝層は貝散布の状況から台地上面まで広く堆積していることが確実と思われたが、貝層の上端及び付近の集落構造を確認するために斜面に直行して２×10mを設定して調査した。その結果トレンチ西端で僅かに貝層を確認したため、更に西方へ２m拡張した。

調査直前まで耕作されていたため表土除去は比較的容易であった。層厚約20cmの表土は耕作によって巻き上がった破砕貝を大量に含んでいたが、貝層本体から遠ざかるにつれ包含量は少なくなっていた。表土直下にはＣ地点貝層の上端部分が堆積しており、これはやや小形の（若い）ハマグリを主体とし黒褐色土を混入する混土貝層であった。貝層中には破砕した貝が比較的多く含まれていた。貝層直下には破砕貝を少量含む黒褐色土が堆積し、さらに下位には貝を含まず粘性が強くより黒色味の強い層がみられた。西村氏の報告では、貝層の下位には黒色土が堆積することが指摘されているが、今回の調査では１Ｔ・６Ｔ及び当９Ｔ等でその事実を再確認することとなった。黒色土層の下は僅かな褐色土を介してソフトロームに達していた。

台地上面では奈良・平安期と思われる住居跡１軒、時期不明の土壙１基を検出したが、集落の構造を把握するには乏しい資料であった。遺物としては少量ながら五領ケ台式期から加曽利Ｅ式期までのものが包含されていた。



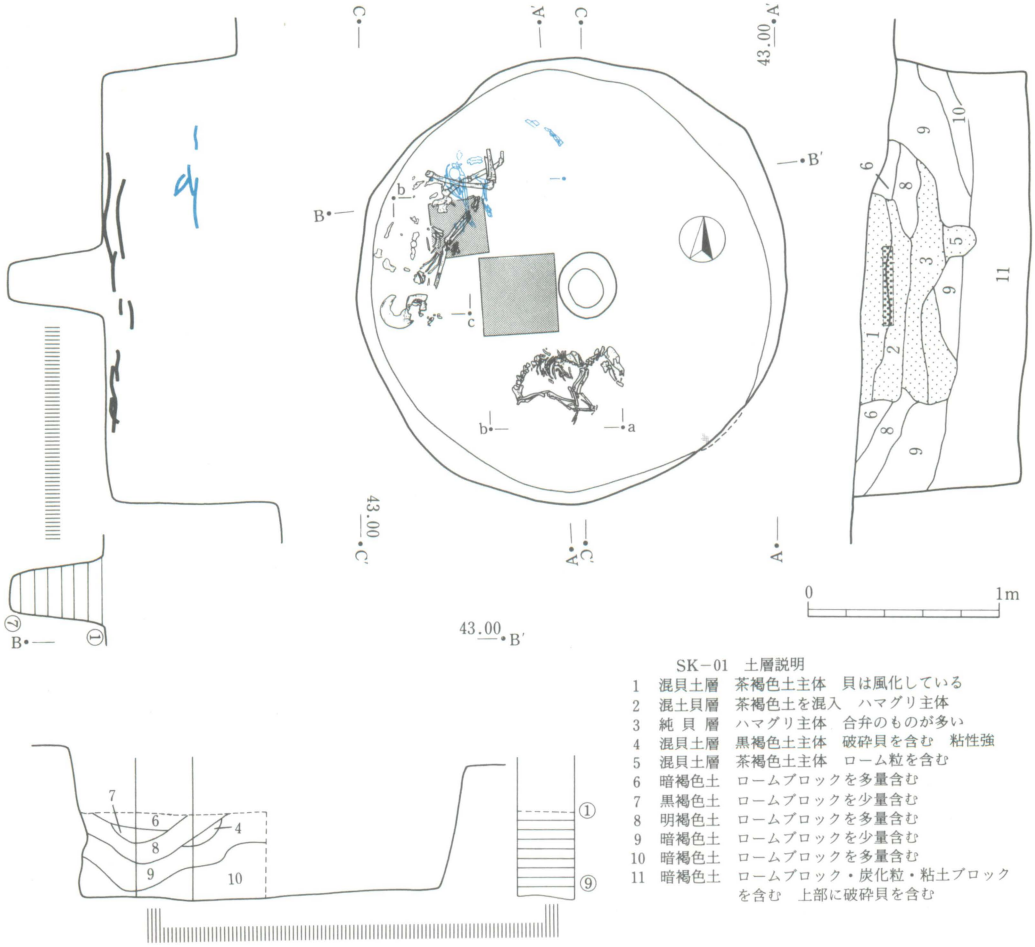

第７図　９Ｔ（1：100）

# III 検 出 遺 構

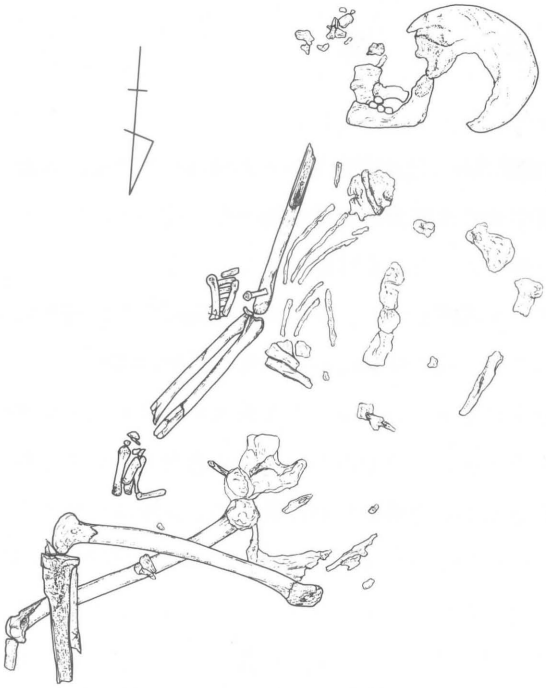
## 1．SK－01

7T北端付近で検出したもので、平面形は径2.3mのほぼ円形で深さ約80cm、壁はほぼ垂直であるが一部で袋状に掘り込まれている。底面中央には径30cm、深さ70cm程の柱穴状のピットがあり、いわゆる小竪穴と呼ばれる貯蔵穴に一般的にみられる形態である。

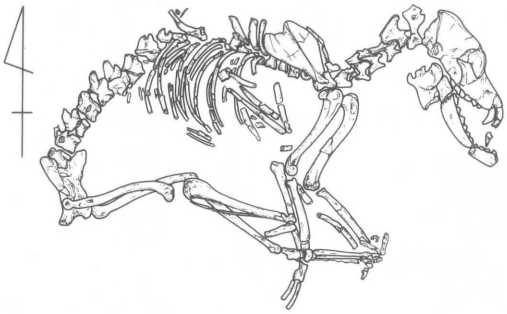
検出した段階で既に中心部に貝層を持つことを確認したが、東側半分を掘削して土層断面を観察したところ、貝層中には間層が入り込んでおり貝の投棄はある程度の断絶期間をもって2回以上に及ぶことが判明した。また、覆土下半にはロームブロックを混入する茶褐色土が堆積しており、この部分は短期間に人為的要因により埋没したと思われる。貝層周辺の土層は典型的なレンズ状堆積を示しており、自然堆積であることを窺わせる。貝層サンプルは一括サンプルを1カット、覆土の柱状サンプルを9カット、ピット内の覆土を柱状に7カット採取したが、その分析結果については別章に譲る。




第8図 SK－01



第９図　SK－01出土成人骨 (1：10)



第10図　SK－01出土イヌ骨 (1：10)

当土壙には埋葬人骨とともに多量の獣骨が含まれていた。西壁付近のほぼ床面直上には成人骨が埋葬されていた。頭を南に向けた右側臥屈葬の姿勢をとり、貝層部分の下にあった右上半身や下半身については保存状況がよく手の指骨等はほぼ完全に遺存していたが、そうでない左上半身や椎骨・肋骨等はほとんど原形をとどめていなかった。現地で実測・写真撮影の後に部位毎に取り上げ、頭骸骨等脆弱な部分については水洗以前に薬品を用いて強化した。人骨については東京慈恵会医科大学第１解剖学教室の加藤征氏に鑑定をお願いし、当資料が男性であることが判明しているが、詳細については付章を参照されたい。

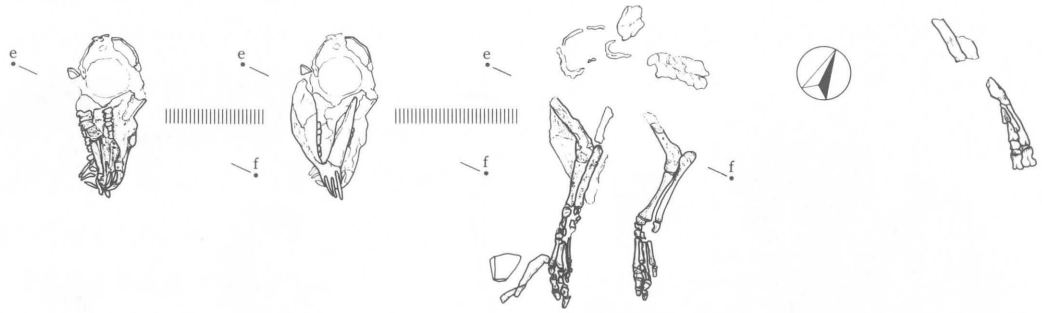
北壁付近のほぼ床面直上からはイヌ骨がほぼ完全の状態を保って出土した。頭を東に向けた側臥位で埋葬されており、身体を弓状に曲げ、前足と後足の先端が重なるような姿勢で出土している。人骨とは全く同レベルで出土しており、埋葬時期の近似性が窺える。合葬の可能性もある。先述の覆土堆積状況からも同様の推定が可能である。大変遺存状況がよく、今後の資料活用のためにそのままの状態で取り上げるよう指導があったため、発泡ウレタンによる取り上げを試みたが残念ながら失敗に終わり復元困難な状態になってしまった。この方法は骨の取り上げには必らずしも適しておらず、今後の検討を要する。

人骨脚部の上方、床面から70cmほど浮いたところからはイノシシの幼獣骨が出土した。椎骨や肋骨等の胸郭は残っていなかったが、頭骸骨・前肢骨２本・後肢骨１本が整然と出土しており、埋葬と考えざるを得ない。残存部分の遺存状況は大変良好であった。ここで改めて土層断面を観察してみると、イノシシ骨の出土した付近は掘り込みが存在するようにも見受けられ、土壙に埋葬された可能性もある。

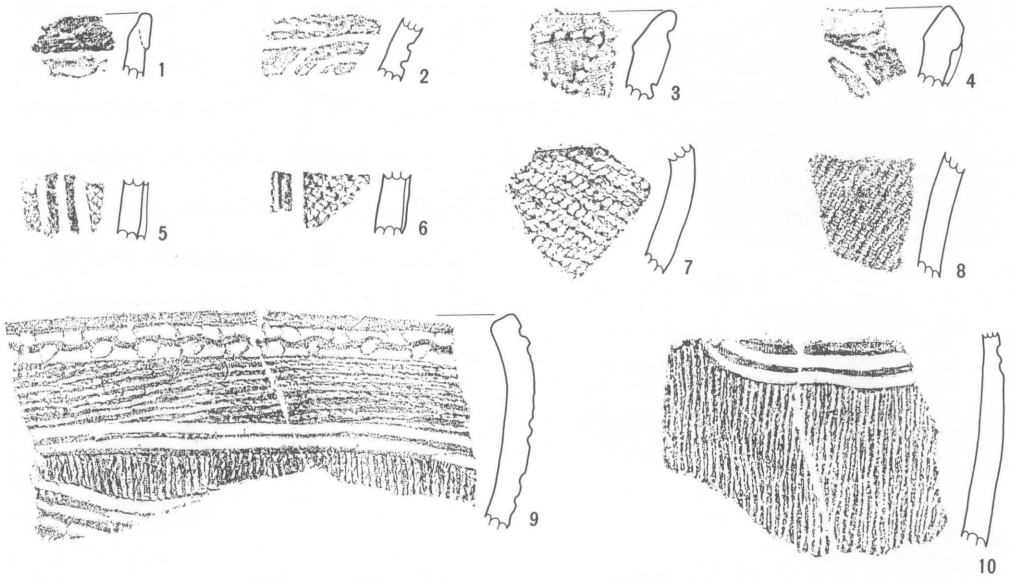
その他覆土中からも貝層付近を中心に多量の獣骨が出土しているが、特に柱穴状ピット内で

まとまってみられた。調査時の所見ではそのほとんどはイノシシの幼獣骨と思われ、特に埋葬されたような状態は示していないが、ほぼ1体分に相当する量が出土している。

覆土中に包含されていた遺物は土器が48点、石器は9点と決して多いとはいえない。土器は中期初頭から加曽利E式前半期までのものを中心とするが、第12図9に示した連弧文の土器が床面直上から出土しており、概ね加曽利EII式期とみて間違いないと思われる。




第11図　SK－01出土イノシシ幼獣骨 (1：10)




第12図　SK－01出土土器拓影図

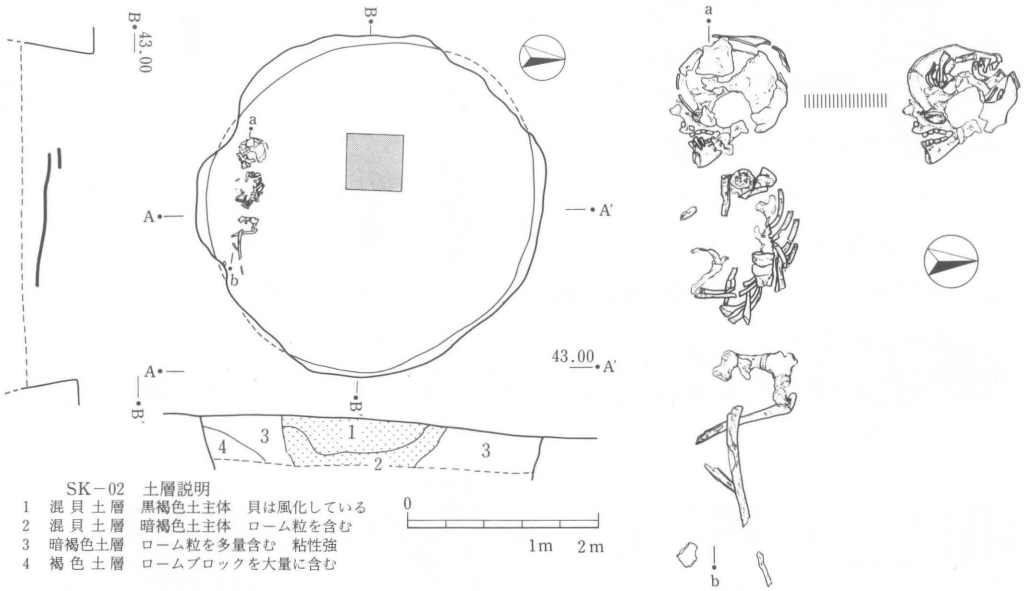
## 2．SK－02

SK-01の南に隣接して、径1.8mの覆土中に貝層を持つ土壙を検出した。SK-01と同時に調査を開始し、西側半分を掘り下げたところ検出面より約20cmで幼児人骨が出土した。この段階で土層断面図を作製し、ボーリングを試みたところさらに50cm以上掘り込まれているようであったが、SK-01の進捗状況と調査期間を鑑み人骨の取り上げ終了後調査を中止した。

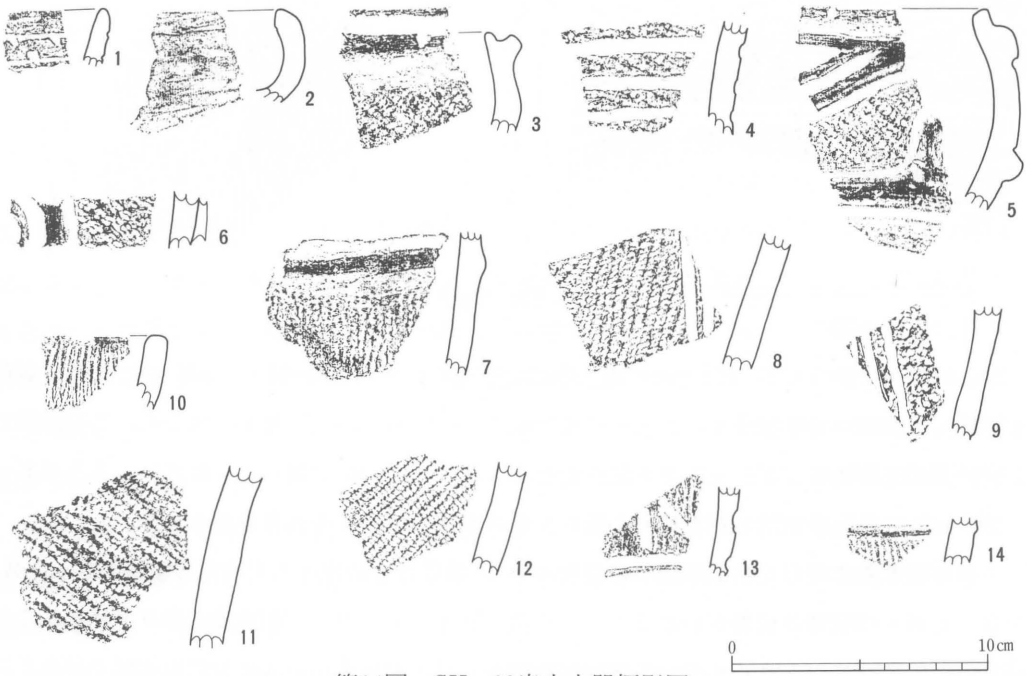
人骨は頭を西に向けた右側臥屈葬の姿勢をとり、頭骸骨と肋骨は大変遺存状態がよかったが、椎骨や寛骨・四肢骨は姿勢がわかるという程度の状態であった。左側頭葉を取り上げたところ頭骸骨の中に頸椎が入り込んでいる状況が観察された。加藤氏によると自然の状態では考えら

れないとのことで、なにか特別な要因によるものと考えざるをえない。鑑定の結果4～6才の幼児であることが判明している。なお貝層付近からは多量の獣骨が出土しているが、詳細については付章を参照されたい。

土器は五領ケ台式期から加曽利E式前半期までのものを中心に総数108点が含まれていたが、覆土上層で調査を中止しているため時期を決定することができない。




第13図　SK－02及び出土人骨 (1：100・1：40)




第14図　SK－02出土土器拓影図

# Ⅳ 出 土 遺 物

## 1．土　器

現地で得られた出土土器は、総数5979点にのぼる。これでも発掘調査及び整理作業の時間的問題上、表土中の遺物や微細な遺物の全てを取り上げきれず、取り上げても水洗できなかったものや破片数のカウントができなかったものもあり、目安程度の数であることを断わっておく。

**①沈線文系土器**（第12図１）

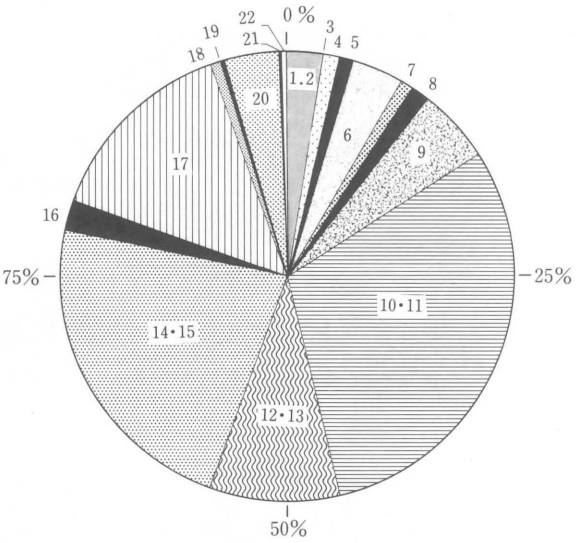
７Ｔ表土中より口縁部破片が１点出土した。器面はかなり摩滅しているが、３条の横位の沈線が確認できる。田戸下層式と思われる。

**②条痕文系土器**（第12図２～11）

総数156点が出土しているが、ほとんど５Ｔ・７Ｔの表土中及びSK-01、SK-02の覆土中に含まれていたものである。いずれも表裏にアナダラ属貝殻復縁条痕文が施され、微隆起線による幾何学文様の区画、竹管や貝殻復縁押捺文の充塡、竹管の刺突等、鵜ケ島台式の特徴が窺える。

**③前期末～中期初頭の土器**（第12図12～23）

結節文を持つ土器を一括した。概して横位施

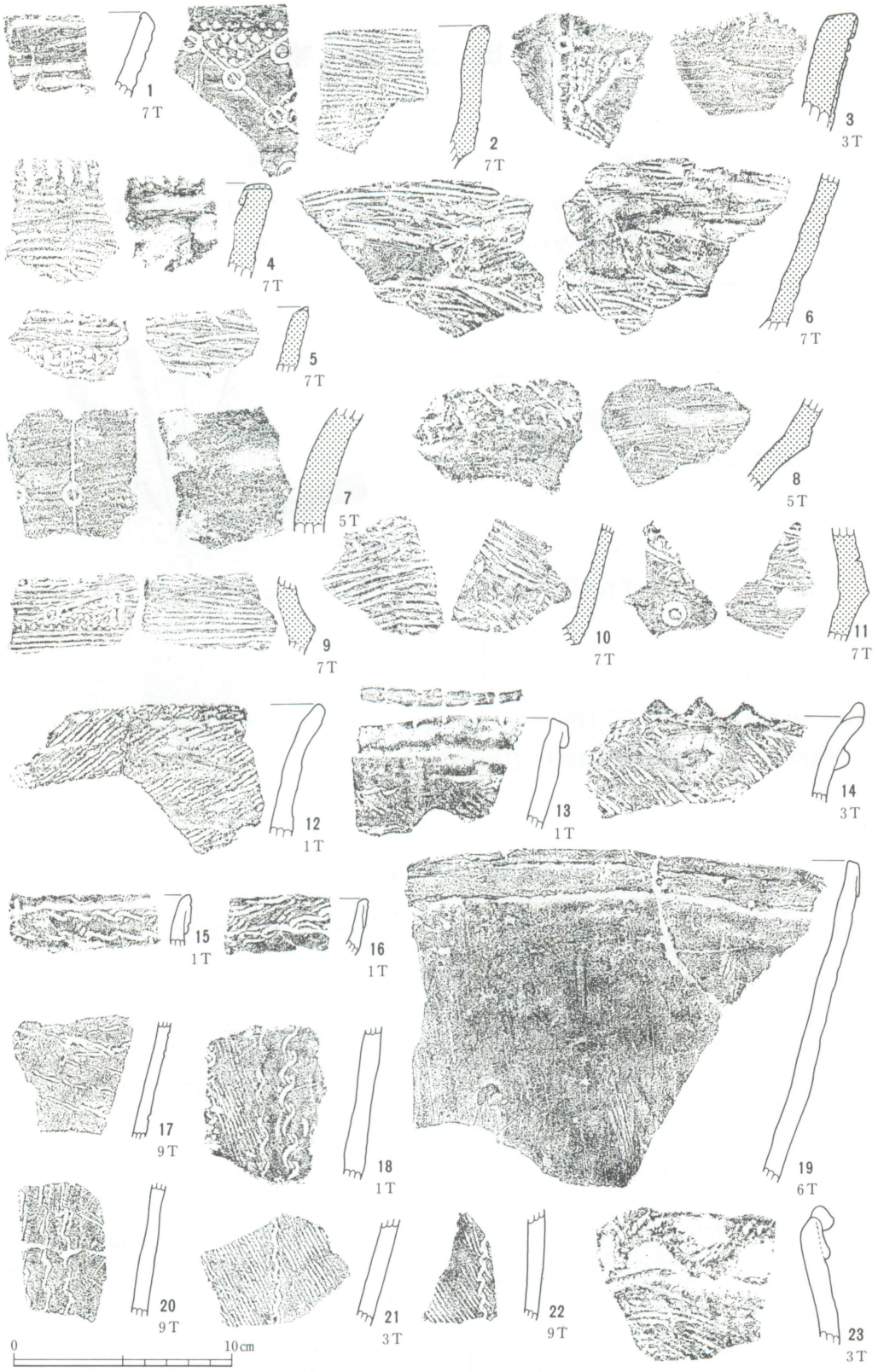



第15図　出土土器数量比（N＝5,979）

第２表　出土土器組成表

| 分類＼出土位置 | | 1T | 2T | 3T | 5T | 6T | 7T | 8T | 9T | SK-01 | SK-02 | 表採 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 沈線文 | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 2 | 条痕文 | 2 | 3 | 6 | 46 | 4 | 61 | 1 | 4 | 5 | 12 | 12 | 156 |
| 3 | 諸磯 | | | | | | | | | 1 | | | 1 |
| 4 | 前期末～中期初頭縄文 | 42 | 4 | 6（大木２） | 1 | 1 | 2 | | 15（大木３） | | | | 71 |
| 5 | 五領ヶ台 | 10 | 5 | 13 | 2 | 6 | 4 | | 18 | 1 | 1 | 1 | 61 |
| 6 | 阿玉台・勝坂 | 9（勝１） | 41（勝２） | 72（勝１） | 24 | 4 | 21（勝１） | 5 | 17 | 6 | 9（勝１） | 11 | 219 |
| 7 | 中峠口縁 | | 12 | 21 | 6 | 3 | 7（赤１） | 2 | | | | | 51 |
| 8 | 加ＥＩ口縁 | 1 | 12 | 36（赤１） | 8 | 2 | 7 | 4 | 1 | | 4 | 2 | 77 |
| 9 | 中峠Ｅ Ｉ胴部 | 4 | 52 | 92 | 75 | 16 | 35 | 14 | 9 | 3 | 13（赤１） | 5 | 318 |
| 10 | 加ＥII・III口縁（連弧文、重弧文） | 10 | 76（連１） | 296（連７、重15） | 8 | 5 | 7（連３） | 15 | 2（重２） | 1（連１） | | | 420 |
| 11 | 〃　胴部（　〃　） | 54 | 252（連９、重13） | 899（連30、重32） | 44（連３、重１） | 9 | 63（連13、重２） | 40 | 5 | 10（連３） | 8（連２） | 6 | 1390 |
| 12 | 加ＥIII・IV口縁 | 35 | 20 | 183 | 4 | 1 | | 4 | 1 | | | 1 | 249 |
| 13 | 〃　胴部 | 50 | 31 | 193 | 9 | | 1 | 13 | | | | 2 | 299 |
| 14 | 加Ｅ縄文口縁 | 2 | 2 | 16 | | 2 | 4 | 1 | | | 1 | | 28 |
| 15 | 〃　胴部 | 176 | 131 | 671 | 115 | 12 | 87 | 60 | 30 | 12 | 31 | 4 | 1329 |
| 16 | 加Ｅ条線 | 2 | 22 | 84 | 4 | 1 | 7 | 6 | | 1 | | 1 | 128 |
| 17 | 加Ｅ無文 | 88（赤１） | 95 | 288 | 88 | 29 | 80 | 44 | 76 | 8 | 25（赤１） | 13 | 834 |
| 18 | 浅鉢 | 4 | 18（赤２） | 21（赤４） | | 2 | 2（赤１） | 2（赤１） | | | | | 49 |
| 19 | 微隆起文 | | 1 | 9 | | | | | | | | | 10 |
| 20 | 底部 | | 37 | 159 | 14 | 6 | 18（赤１） | 11 | 5 | | 4 | 2 | 256 |
| 21 | 称名寺 | | | 2 | | | | | | | | | 2 |
| 22 | 加Ｂ | 11 | 2 | 11 | 3 | | 1 | 2 | | | | | 30 |
| 合　計 | | 500 | 816 | 3078 | 451 | 103 | 408 | 224 | 183 | 48 | 108 | 60 | 5979 |

※（　）内は、内数を示す。（赤）は赤彩の認められたもの。（大木）は大木式系土器。
加ＥII・IIIはキャリパー形、加ＥIII・IVは横位連鋸弧線文、渦巻文土器を示標とする。




第16図　出土土器拓影図 (1)

文のものが前期末、縦位施文のものが中期初頭に編年されている。後者は下小野式と呼ばれることがある。A地点貝層の上端部に設定した1T・6Tを中心に総数71点が出土しており、その他の地点ではほとんど見られなかった。西村氏の調査ではかなり出土しているが、付近の8T・9Tでもほとんど出土していない。

口縁は平縁で、口唇に縄文原体を押捺したもの（13）や突起を貼付けたもの（14）が存在する他、ほとんどの個体に折り返し口縁がみられる。文様は縄文地文に横位（13，15，16，17）ないしは縦位（18，20，21，22）の結節文を配したものを基本とするが、結節文の見られないもの（12，14）や器面全体を粗く調整しただけの無文のもの（19）等も存在する。

なお、18は縦位に2単位の結節文を施して間を磨消したもので、五領ケ台Ⅰ式の胴部文様帯と思われるが、口縁部の状況が明らかでないため当類に含めておく。また、23は折り返し口縁に縄文を有する蛇行隆線を重ねたもので、東北地方前期末の大木5式である。

**④五領ケ台式土器**（第13図24～34）

ほとんどが1Tからの出土であるが、A地点斜面下の2T・3Tでも若干出土している。

口縁部文様帯には沈線によって文様を描いた後に細条線を充塡したもの(24，25)、細い竹管の刺突により文様を描出するもの(26)、2～3本の沈線で横位に区画した後に格子目状に細条線を充塡したもの（27，28）等がみられる。なお、27と28は同一個体である。胴部では、30に交互刺突による連続「コ」の字状文＋平行沈線文＋連続刺突文という五領ケ台式の典型的な文様がみられる。29，31，32も同様の文様構成を持つと思われ、32には五領ケ台式の特徴である三角形陰刻文もみられる。34も同系統のものと思われるが、上面に刻み目を持つ隆帯に付随して3条の沈線が配されている。やや新しい様相を示しているのであろうか。

なお、33は浅鉢である。胴部が「く」の字状に内折し、文様帯は内傾する口縁部に集約されれる。文様としては沈線による渦巻状の文様と縦位の平行沈線が看取され、後者は口縁部文様帯を区画するものと思われる。口縁部文様帯には赤彩が施されている。

**⑤阿玉台式土器**（第13図35～55）

C・D地点貝層及びA地点貝層の北寄りにやや多く散布していた。これまでの調査の成果からみると阿玉台式を主体とする貝層は確実に存在するが、今回の調査では確認できなかった。

阿玉台式土器については、先述のとおり西村正衛氏の一連の研究によってかなり明確に型式細分がなされている。ここではそれにしたがってまとめてみたい。なお、阿玉台式と併行して西関東から中部高地に分布する勝坂式の特徴を持つ土器も少量出土している。

**阿玉台直前型式**（35～37）　西村氏が白井雷貝塚の成果をもとに五領ケ台式と阿玉台式の中間型式として設定したものである。ここでは一応阿玉台式の範疇に含めておく。

35は波状口縁の口縁部破片で、口唇には爪形文状の刻目がみられる。欠落していて確証はないが、波頂部の外面に貼付文、内面に陰刻文のみられる土器と思われる。36・37では、いずれ

も口縁直下に連孤状の結節沈線が認められる。あきらかに阿玉台直前型式に比定できる資料ではないが、連孤状の結節沈線が「Y」字状の懸垂文と類似するモチーフと認定して当型式に含めることとした。この他には明確に阿玉台直前型式と認定できるものはなかった。

**阿玉台Ⅰ式**（38～43）　西村氏の編年ではa種・b種の2型式に細分されているが、今回得られた資料は小破片ばかりで文様の全貌を知り得ないものが多いため、ここでは文様を描出する結節沈線及び隆帯に付随する結節沈線が1条であるものを一括して取り扱うこととした。

39や41は1条の結節沈線で区画した内部を同様の結節沈線による文様で充塡しており、明かに阿玉台Ⅰb式と認定できるものもある。42では、阿玉台式の特徴である隆帯による口縁部区画文が認められる。また43は胴部の輪積痕を爪形状の指頭圧痕によって押え、円形の突起を貼り付けた後にそこから隆帯による懸垂文を2本垂下させている。こうした指頭圧痕文や懸垂文は阿玉台Ⅰ式に一般的にみられるものである。

**阿玉台Ⅱ式**（44～48）　文様要素としての結節沈線が2条乃至は複数条のものを一括した。2条の結節沈線で区画するもの（44）、隆帯に付随して2条の沈線を施すもの（46～48）が見られる。48は「X」字状の懸垂文であろうか。全体に、前段階と比較して断面カマボコ状のしっかりした隆帯になるようである。

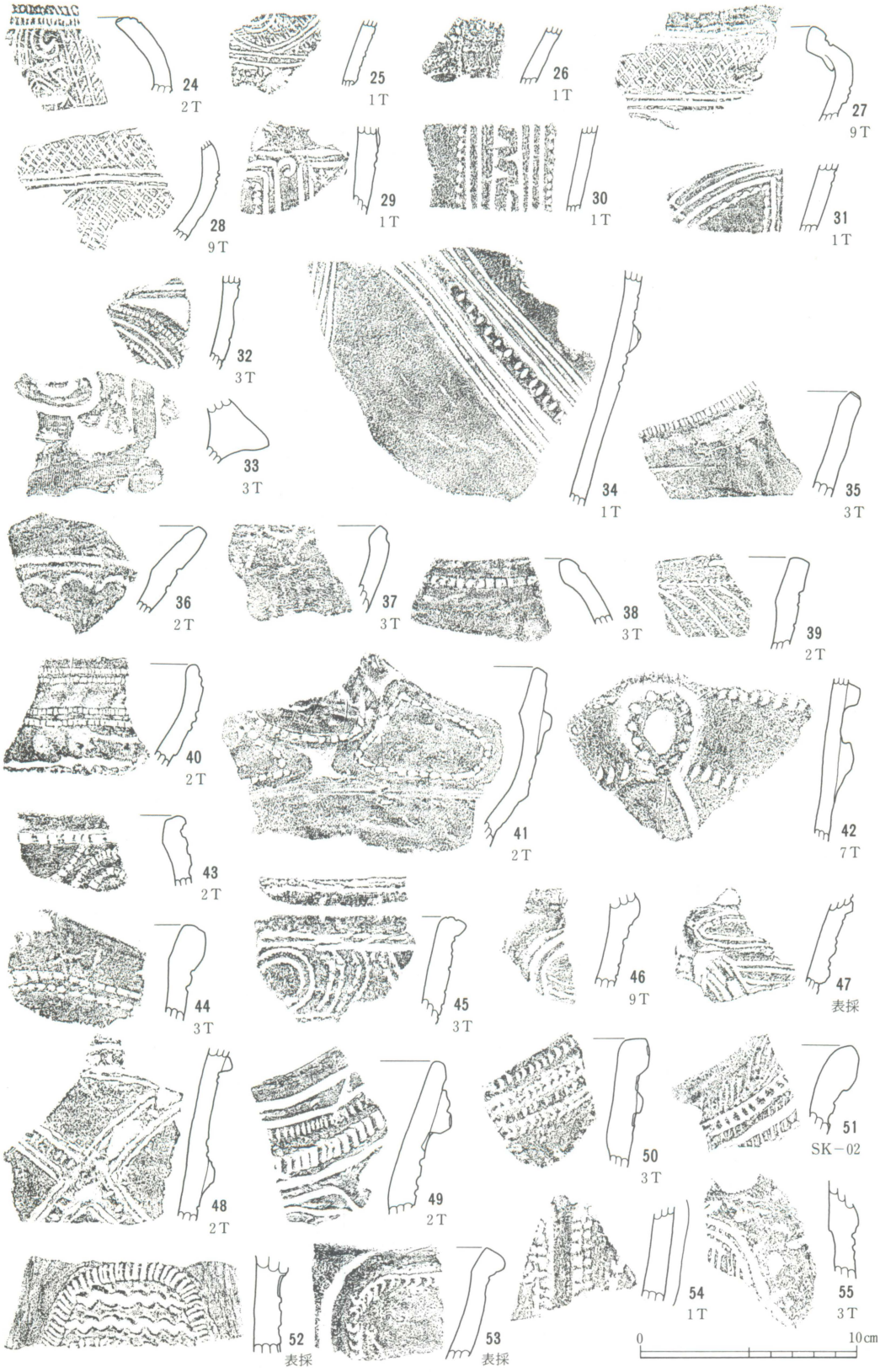
45は44と同類と考えられるが、区画内に充塡された文様からみると阿玉台Ⅰb式まで遡る可能性がある。なお、この個体では口唇部にも2条の平行結節沈線文が配されている。

**阿玉台Ⅲ式**（49～54）　結節沈線が幅広の爪形文や角押文に取って代わるものを一括した。阿玉台式の中では最も多く出土している。爪形文及び角押文はかなり深くはっきりと施文されており、その影響で断面カマボコ状の隆帯が角張ってくるようである。49～51はかなり高低差のある波状口縁と思われ、波頂部には52のような大形偏平把手が付されたのだろう。

**阿玉台Ⅳ式**（55）　結節沈線，爪形文，角押文等が簡略化され沈線に置き代ったものであるが、僅かに1点の資料があるに過ぎない。把手部分の破片で器面はかなり摩滅しているが、52にみられた爪形文が2条の平行沈線に置き代った状況が看取される。また、阿玉台Ⅳ式の特徴として縄文施文が挙げられるが、沈線の内側にみられる条線も同様の要素と考えられる。

**⑥中峠式土器**（第15図56～61）

口縁部文様帯に爪形文や連続「コ」の字状文等の看取されるものを一括した。56には爪形文が、58には連続「コ」の字状文が、57にはその両者が配されている。56では波状口縁の波長部に3単位の突起を貼付け、横位の口縁部文様帯を縦に区画する効果をもたせている。61では口縁部文様帯に渦巻文を配して区画しており、文様帯内部は集合沈線を充塡している。59・60は若干様相の異なる土器である。59は口縁直下に無文帯をおき、その下端を沈線によるコンパス状文で区画している。同様のものは中峠式に伴って普遍的に出土する。また60は縄文を地文として口縁部に波状の隆帯を廻らせたものである。これは61・62のような加曽利ＥⅠ式の口縁部




第17図　出土土器拓影図 (2)

文様帯と非常に近似しているが、横位に区画しようとする意識が全くみられないため、その祖形と判断して当類に含めることとした。

**⑦加曽利Ｅ式**（第16～22図62～131）

今回の調査で最も多く出土し、実に全体の85％を占めている。さらに、そのほとんどはＡ地点貝層斜面下に設定した２Ｔ・３Ｔの包含層及び混土貝層より出土している。以下加曽利ＥⅠ～ＥⅣの４細別型式に分類してまとめてみたい。周知のとおり加曽利Ｅ式の文様要素は複雑多岐にわたっており、その細分については研究者によって意見の分かれるところである。そこで、今回は各項にその分類基準を記し、基準に沿うものを一群として取り扱うこととした。そのため、筆者自信従来の細別型式に合致しないと考えるものも多少含まれてしまったが、それらについてはその都度解説したい。

**加曽利ＥⅠ式**（第14図，62～87）　キャリパー形土器の出現、または口縁部文様帯の明確な区画効果の出現をもって加曽利ＥⅠ式の成立とする。文様要素では口縁部文様帯に集合沈線文や刺突文がみられること、把手を持つものが存在すること、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に明確な無文帯を持つこと、胴部文様帯は沈線によって懸垂文または幾何学文様を描き磨消懸垂文がみられないこと等が挙げられようか。細く丁寧に調整された２乃至数条の隆帯で文様を描出するものも当類の特徴といえる。

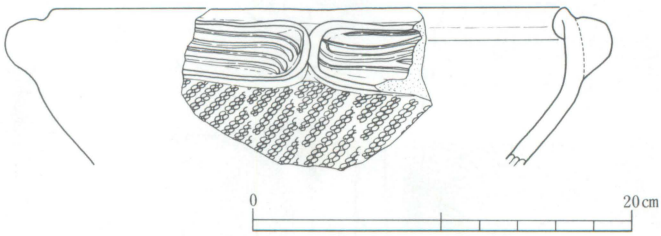
口縁部文様帯の上下を隆帯で区画した後に62は波状、63～65はクランク状の隆帯を配している。64には口縁部に把手がみられ、65では口唇部にも渦巻文を中心とした沈線文様が施されている。64及び66～70には集合沈線が、71・83では刺突文の充塡がみられる。83の口縁部区画は阿玉台式や勝坂式の古い段階にみられる重三角区画文と呼ばれているもので、加曽利ＥⅠ式期に稀ながら復活するものである。71と同様の波状口縁を示す72・73も当類に含めたが、73はその文様からＥⅢ式まで下るものかもしれない。74～75は口縁部文様帯の下位に無文帯のみられるものである。75～78にみられる隆帯は加曽利ＥⅠ式に特徴的な形態である。

胴部に目を移してみると、81・87のように３条の沈線で懸垂文を施すもの、その変形と思われる隆帯を用いた80や84のようなもの、85・86のように沈線で幾何学文様を描くもの、等がみられる。80や84は沈線が縄文帯の上位で連結していると考えるとＥⅢ式かとも考えられる。また、86は中峠式によくみられるモチーフである。

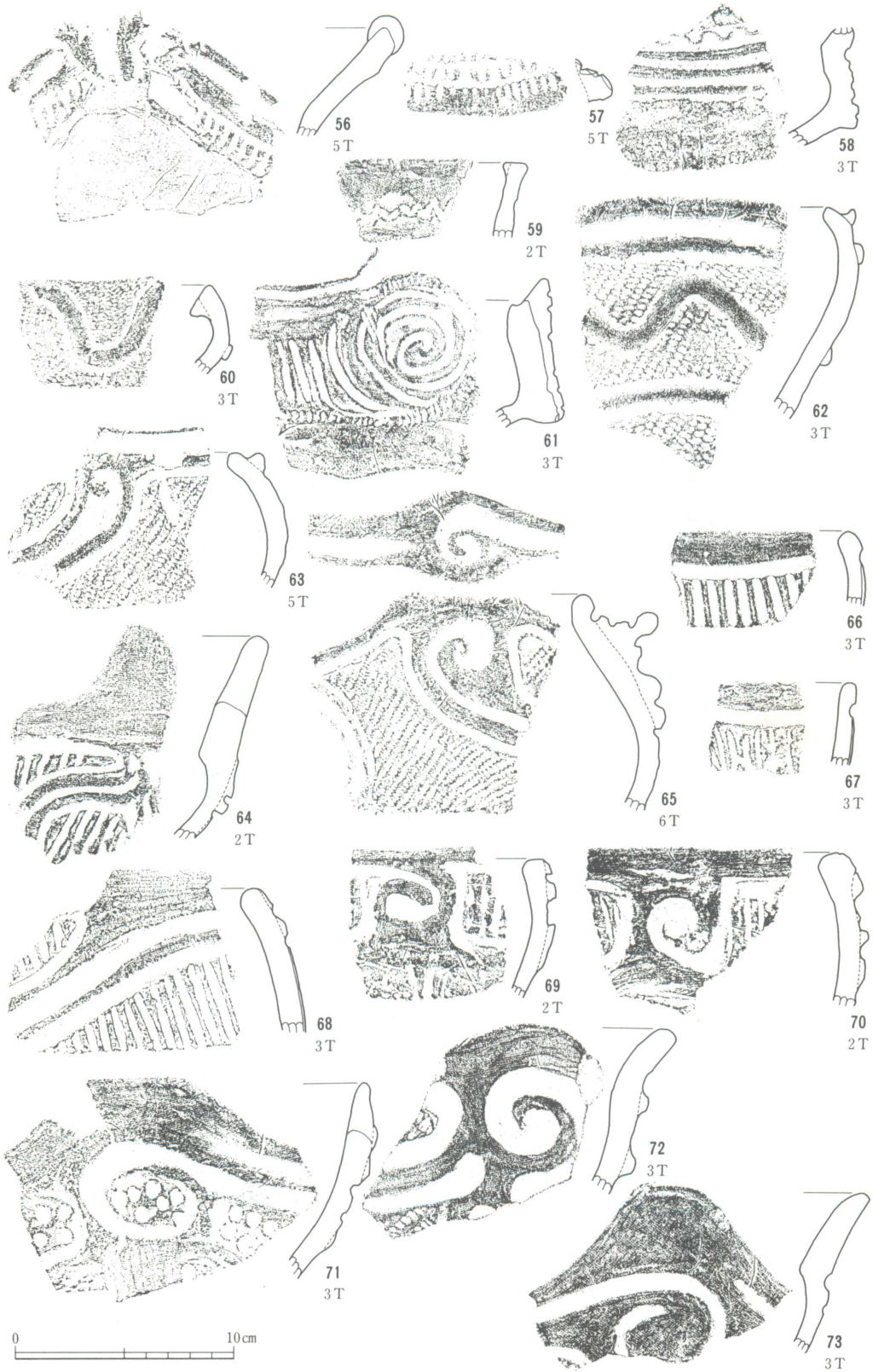
**加曽利ＥⅡ式**

（第17図，88～93）

口縁部文様帯と胴部文様帯が隆帯や沈線によって明確に画され、かつ胴部に磨消懸垂




第18図　出土土器実測図（1）




第19図　出土土器拓影図 (3)

第20図　出土土器拓影図 (4)

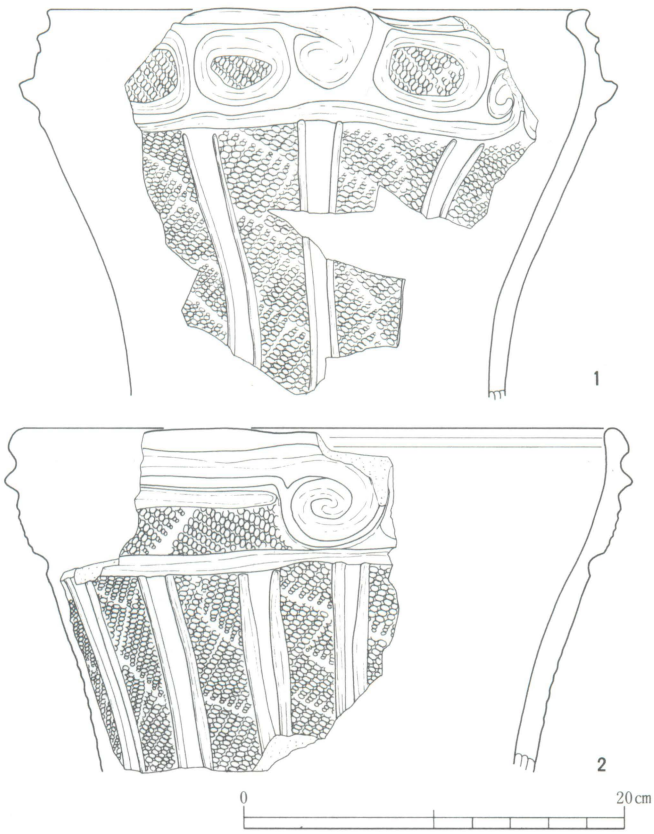
文がみられるものを一括した。いわゆるキャリパー形土器の典型的なものである。88にやや口縁部文様帯と胴部文様帯の癒着傾向がみられる。

**連弧文土器**（94～99）　一般的に加曽利ＥⅠ式終末からＥⅢ式初頭に共伴する連弧文を有する土器を一括した。94～96は同一個体で、94からみるとかなり胴の張る器形を示すものと思われる。口縁部内面には稜を廻らせ、口縁外面と胴のくびれ部には交互刺突文を配して文様帯を区画している。連弧文は口縁部にはみられず、胴部以下のみに配されたようである。

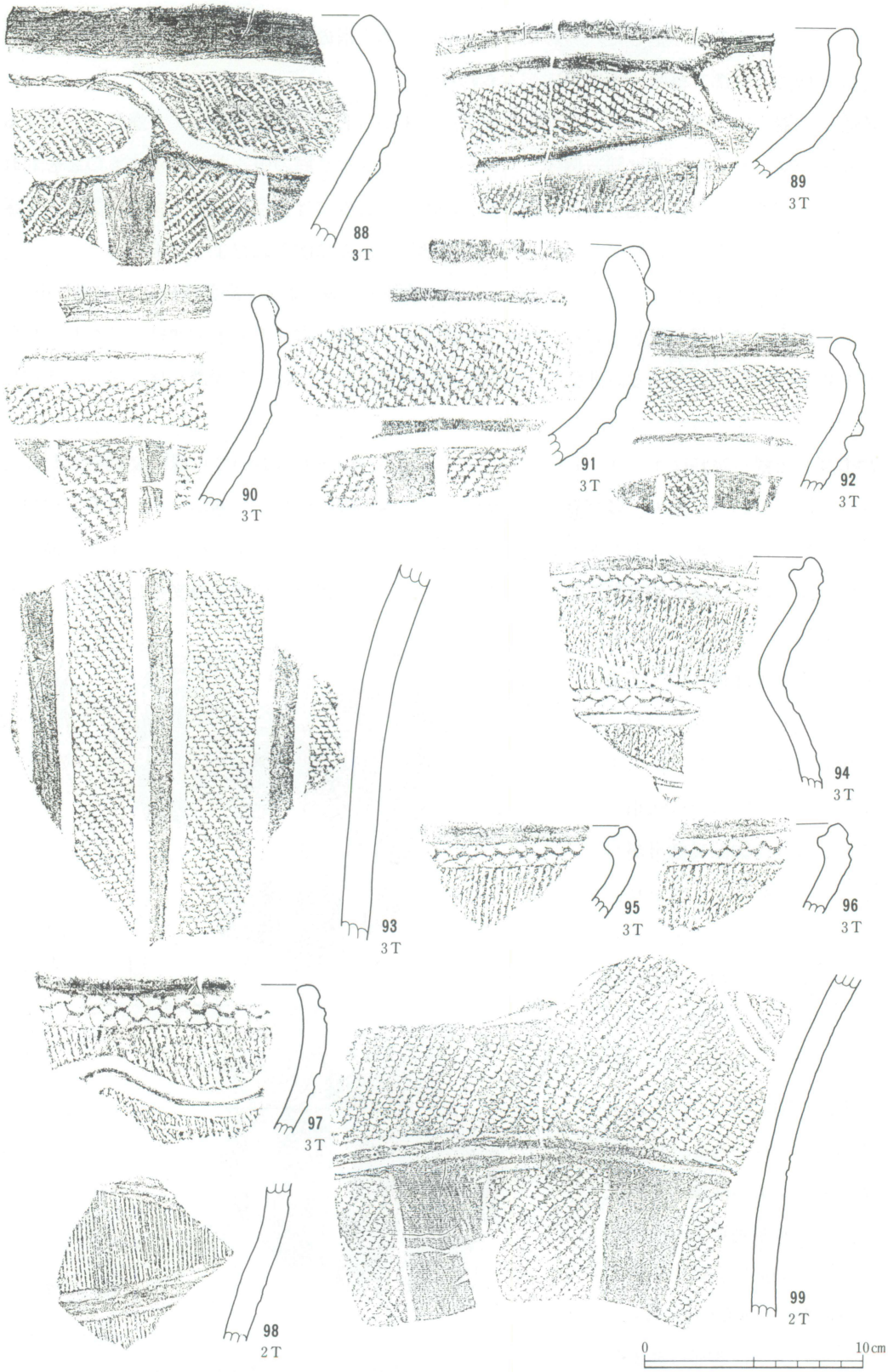
地文は撚糸文を基本とするが、99は縄文地文に連弧文がみられる。胴部中位には沈線が廻り、以下には磨消縄文帯を配している。懸垂文を構成する沈線は縄文帯の上で連結しており、加曽利ＥⅢ式的な様相が窺える。連弧文土器から横位連繋弧線文土器への変遷を検討するうえで良好な資料となるかもしれない。

**加曽利ＥⅢ式**（第19図１～４，100～114）　キャリパー形土器において口縁部文様帯と胴部文様帯の癒着が顕著なもの、胴部懸垂文を構成する沈線が縄文帯の上で連結したり磨消部が縄文部より幅広になる等してあたかも縄文部が懸垂文のようになるものを一括した。また、横位連繋弧線文土器の出現も加曽利ＥⅢ式の画期といえるが、弧線文が口縁部無文帯に連結しないもの、口縁部が欠損しているものについては沈線によって文様を描くものを当類とした。

100～104はキャリパー形土器で、それぞれ上記の様相が窺える。104は胴部文様帯がパネル文の充塡によっており、加曽利ＥⅠ式の項で示した80や84の土器が当類に含まれるとしたらこれと同類ということになろう。105はキャリパー形土器の変形したもので、当時期に多くみられる。口縁部文様帯は１条の沈線とそれに付随する連続刺突文のみに省略され、胴部は条線文を地文に磨消懸垂文が配されている。また３のように器形は典型的なキャリパー形を呈するもの



第21図　出土土器実測図（2）




第22図　出土土器拓影図 (5)

の、器面全体に縄文を施すのみで、単位文の全くみられないものも存在する。

4及び106～112は横位連繋弧線文土器である。沈線によって口縁部無文帯を作出し、それに接続せずに横位の弧線文が廻るものを基本とする。110のように口縁部無文帯を画する沈線が爪形文に置き換わったもの、108や112のように無文帯を持たないもの等も存在するが、いずれも沈線によって弧線文を描いている点で共通する。なお、4及び122はその文様から後期初頭称名寺式まで下るものかもしれない。また、1・113・114は弧線文はみられないものの沈線によって口縁部無文帯を作出している点で共通するので、当類に含めることとした。

2は土師器の甕のような器形を呈する特殊な土器である。口縁部は無文、頸部に交互刺突文、胴部に縄文という文様構成からEⅢ式に属するものと考えてよかろう。

**曽利式土器**（115～121）　曽利式土器は長野県富士見町曽利遺跡出土の資料を標識とする縄文時代中期後葉の土器で、加曽利E式と同時期に中部高地を中心に分布している。従来5細分されており、加曽利E式との対比研究もなされているが、筆者の勉強不足のためその詳細に触れることが出来ない。千葉県では加曽利E式に伴ってかなりの出土例が知られている。

**大木式系統の土器**（122）　122に示したものはキャリパー形土器の胴部破片で、隆帯で区画したパネル文を規則的に配して器面を充塡したものである。加曽利EⅢ式に比定されるものであるが、その施文手法は東北地方南部に分布する大木8b式の影響を色濃く受けたものである。

**加曽利EⅣ式**（第19図5，123～131）　キャリパー形土器の系統が姿を消し、横位連繋弧線文土器が主体を占める。横位連繋弧線文土器は、口縁部無文帯の区画や弧線文が微隆起線によって表現されるようになり、さらに前者と後者が接続して弧線文の横位連繋効果が薄れる。また、EⅢ式にみられた口縁部無文帯のみで弧線文がみられない土器も区画が隆帯によったり特に区画しなくなったりするほか、胴部の地文が条線のものが多くなる。

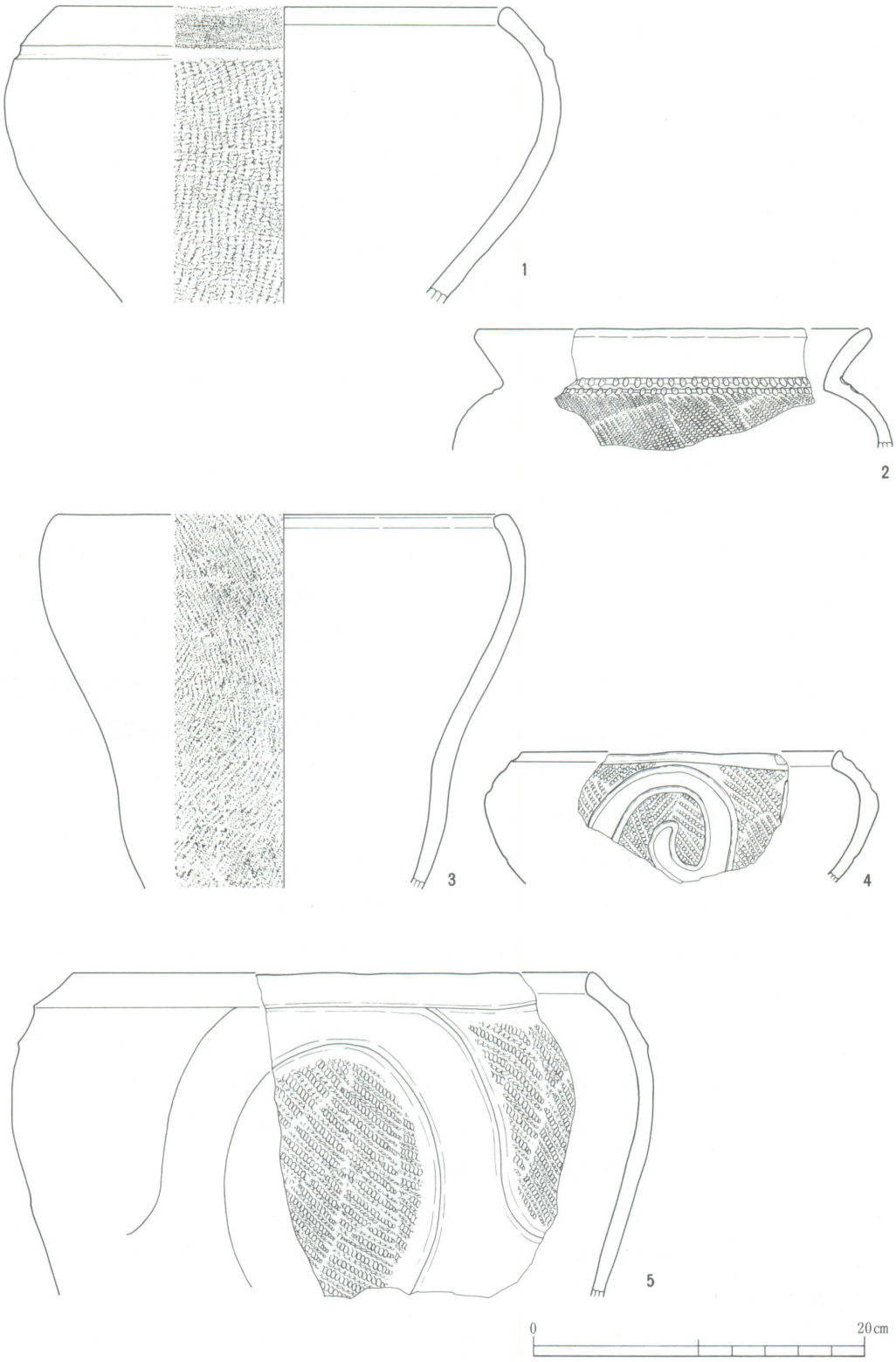
5及び123～125は加曽利EⅣ式期に最も一般的な横位連繋弧線文土器である。いずれも微隆起線によって文様が描かれており、口縁部無文帯を作出する微隆起線と弧線文とが連結している。5では弧線文の波頂部が円文を抱くような文様構成をとる。口縁部は内湾するものが多いようである。126は口縁部が欠損しているが、弧線文が微隆起線によることからEⅣ式であろう。

127・128・130・131は口縁部無文帯＋胴部文様帯構成をとる土器で、128・130のように微隆起線で区画するものと、127・131のように特に区画しないものが存在する。胴部はいずれも条線文が施されており、特に130では横位の条線文がみられる。

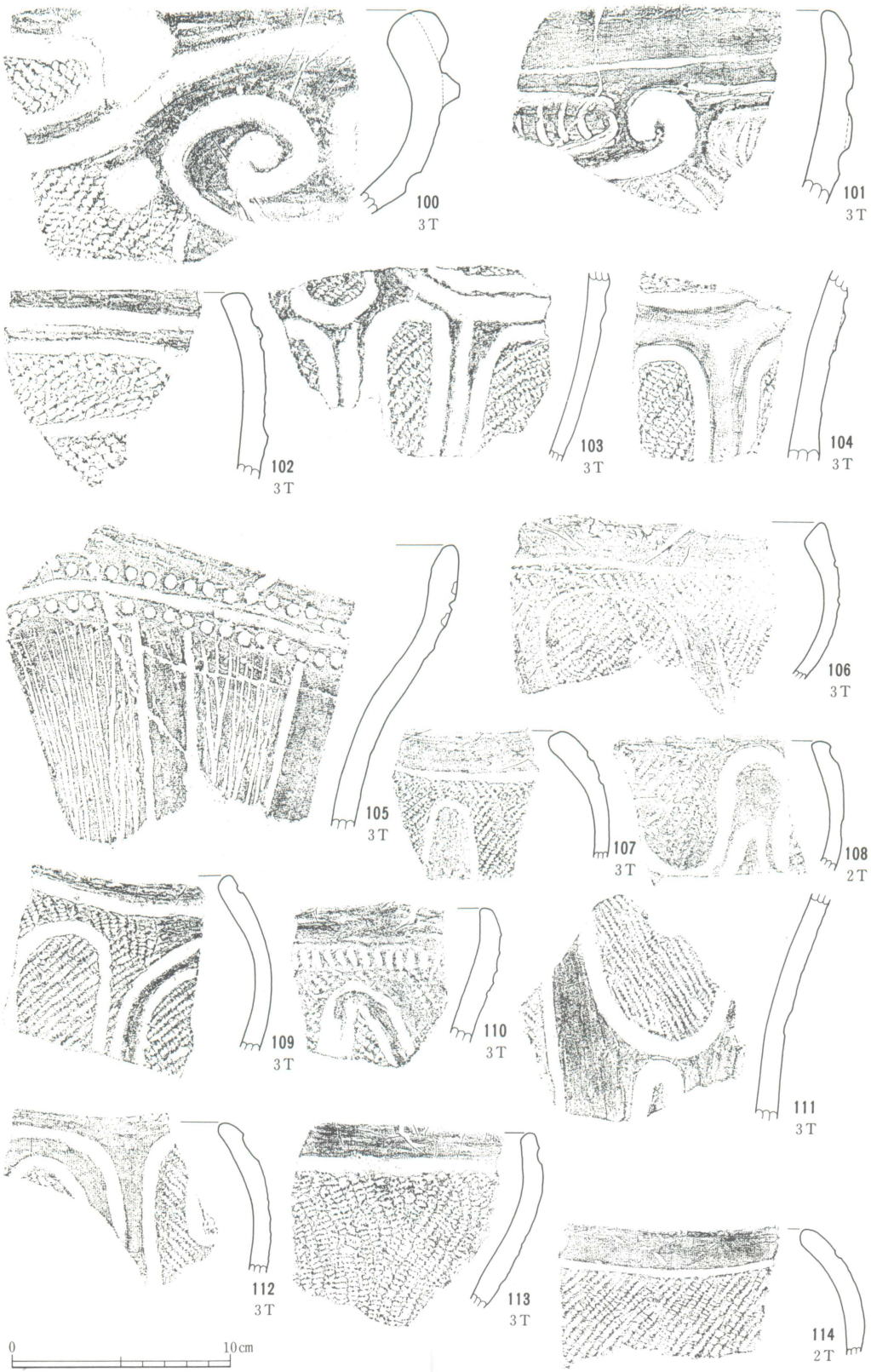
129は口縁に椀状の把手を持ち、隆帯による文様が器面を飾るようである。やや古い様相を持つものと思われるが、筆者の不勉強のため形式認定が出来なかったので最後に付しておく。

**⑧後期の土器**（132～138）

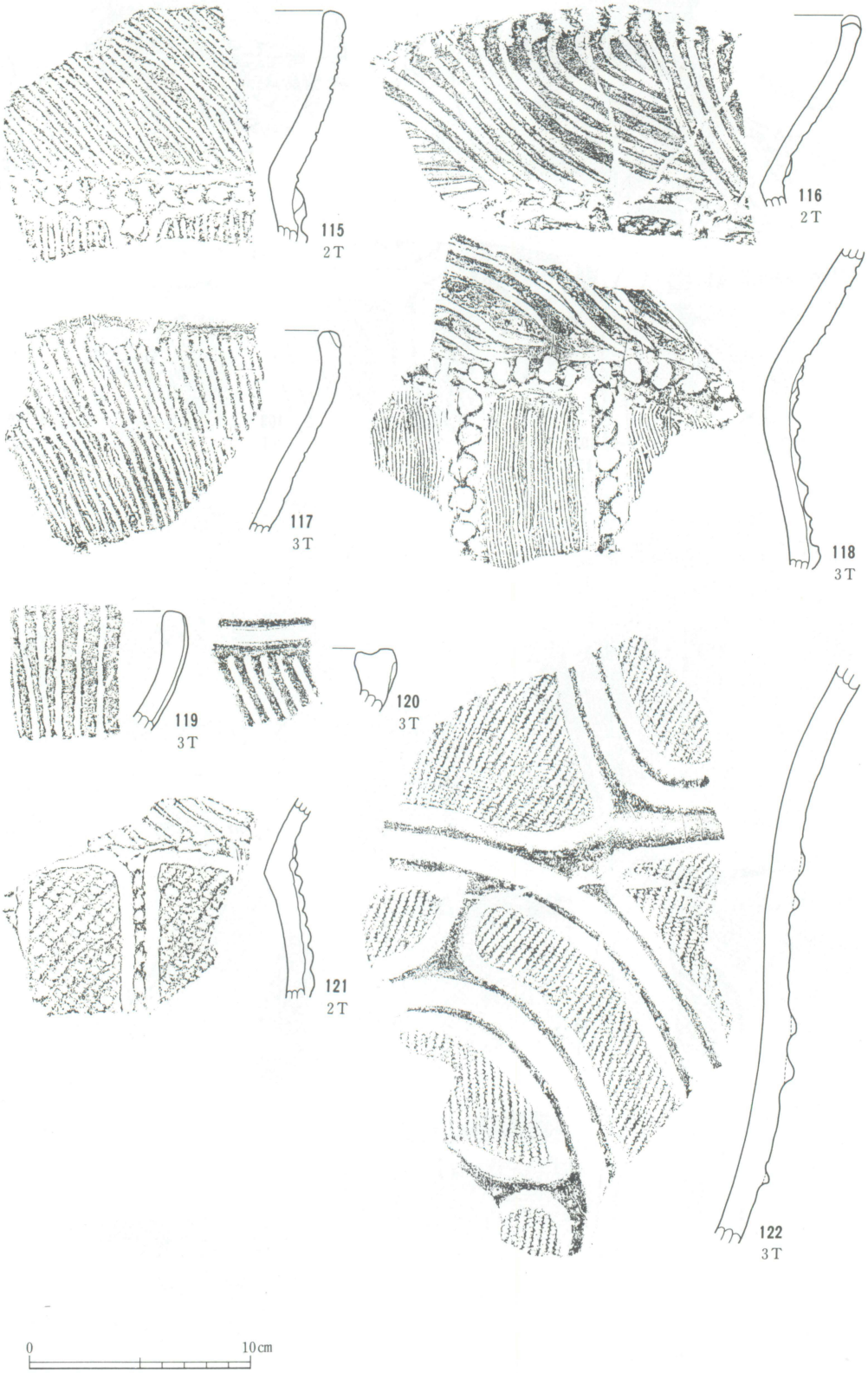
今回の調査では僅かながら後期の土器が出土している。132～134は称名寺式、136～138は加曽利B式にそれぞれ比定されるものである。堀之内式は出土しなかった。



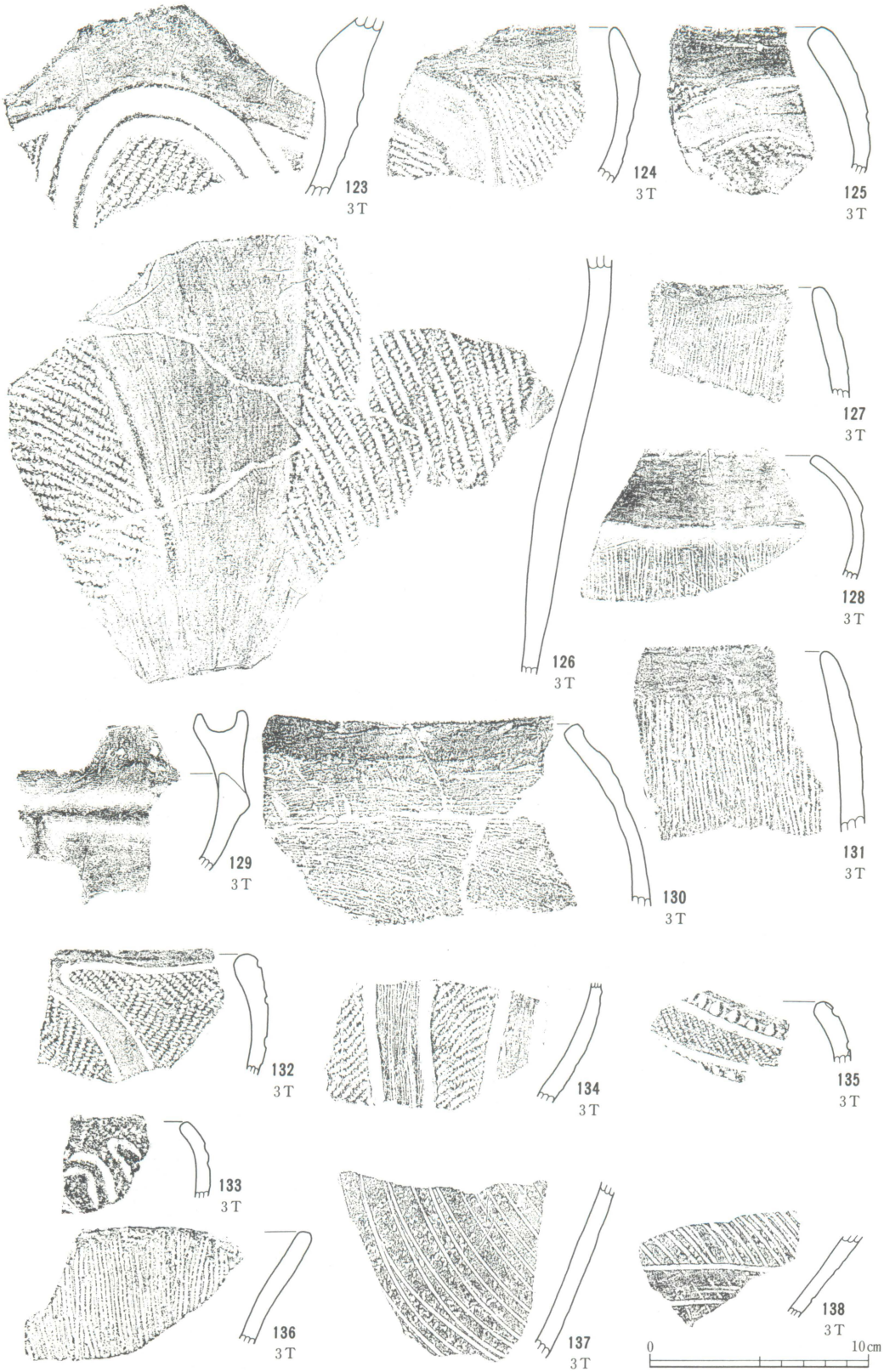

第23図　出土土器実測図 (3)




第24図　出土土器拓影図 (6)



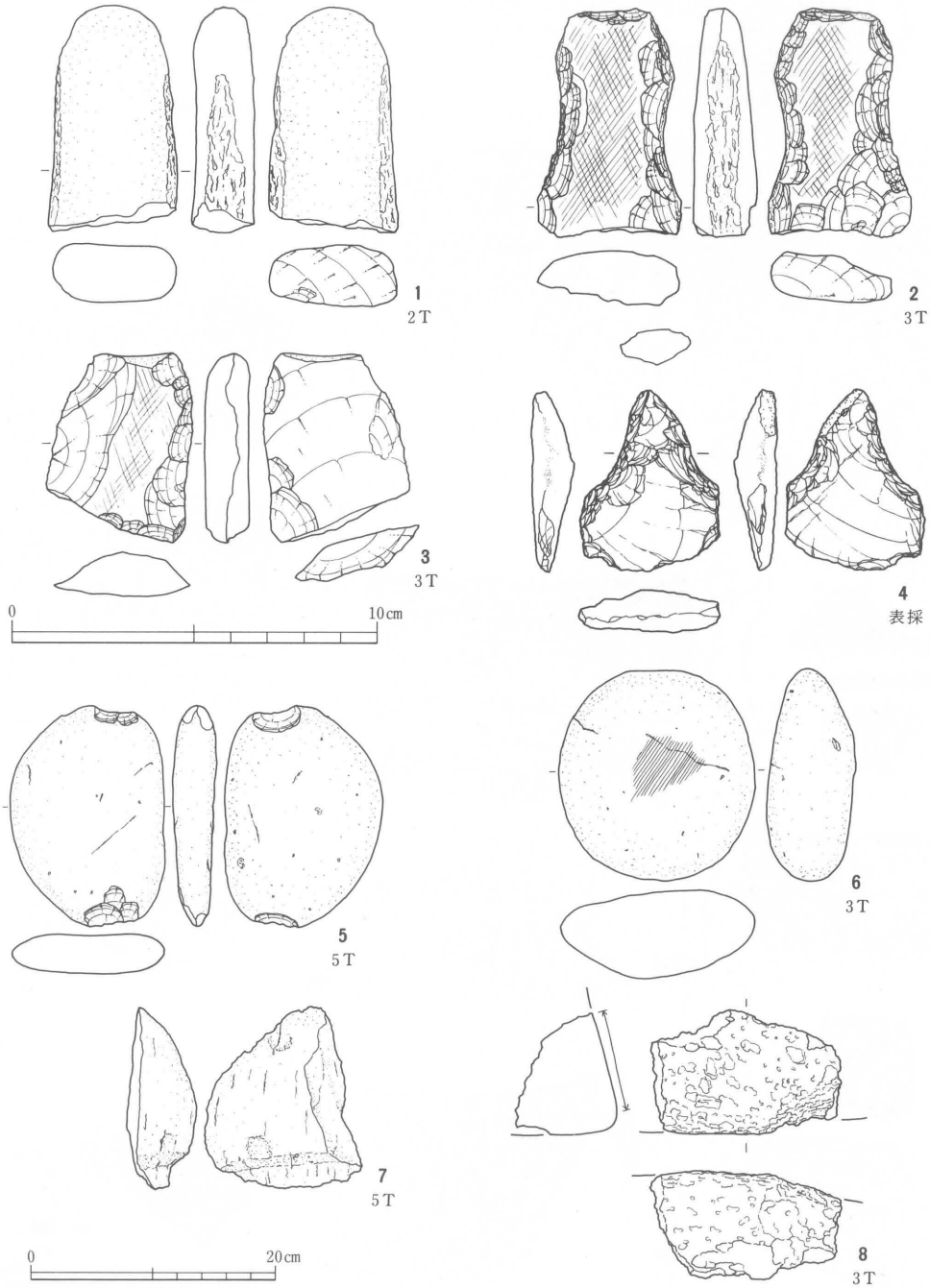

第25図　出土土器拓影図 (7)



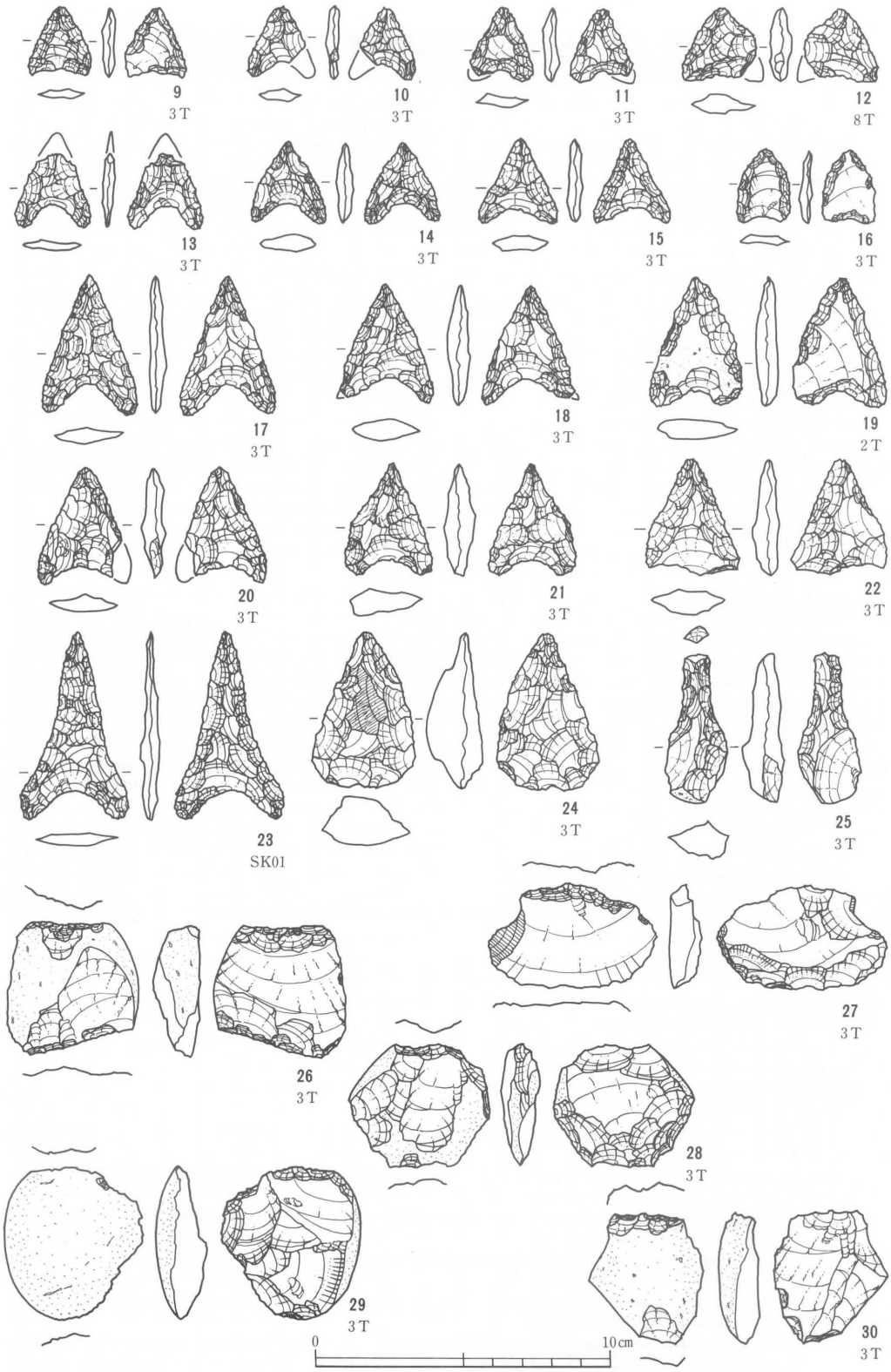

第26図　出土土器拓影図 (8)

## 2．石　　器

今回の調査では砕片とも呼べるような小剝片まで含めると総数483点が出土している。特に斜面下方の２Ｔ・３Ｔで検出したの加曽利Ｅ式期の包含層から多く出土しており、３Ｔでは僅か20㎡の調査区から272点と、大量の石器を得ることができた。




第27図　出土石器（1）


9
3T
10
3T
11
3T
12
8T
13
3T
14
3T
15
3T
16
3T
17
3T
18
3T
19
2T
20
3T
21
3T
22
3T
23
SK01
24
3T
25
3T
26
3T
27
3T
28
3T
29
3T
30
3T
0
10cm

第28図　出土石器 (2)

## 第3表　出土石器組成表

| 位置 | 器　種 | 安山 | 凝灰 | 凝頁 | 火凝 | 頁岩 | 珪頁 | 砂岩 | 硬砂 | 黒曜 | チャ | 石英 | メノ | 粘板 | 閃緑 | 流紋 | 泥岩 | 片岩 | 片理 | 軽石 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1T | 剝　片 | | | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | 2 |
| | R剝片 | | 1 | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | 3 |
| | 敲　石 | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 礫 | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 焼　礫 | | 1 | 1 | 1 | | | 1 | 1 | | | | | | 1 | | | | | | 6 |
| | 計 | 1 | 3 | 2 | 2 | 1 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 16 |
| 2T | 剝　片 | | 3 | | | 1 | 1 | 7 | 4 | 3 | 6 | 1 | 1 | | | | | | | | 27 |
| | U剝片 | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 |
| | R剝片 | 1 | | | | | 1 | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | 4 |
| | 石　鏃 | 1 | | | | | | | 2 | | 1 | | | | | | | | | | 4 |
| | 掻削器 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 石　斧 | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 2 |
| | 磨　石 | | | 1 | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 敲　石 | 1 | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 焼　礫 | 1 | 5 | | 1 | 1 | | 2 | 1 | | 1 | | | | | | | | 1 | | 13 |
| | 破　礫 | 4 | 2 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 7 |
| | 軽　石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | 計 | 8 | 10 | 2 | 3 | 3 | 3 | 10 | 9 | 3 | 9 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 66 |
| 3T | 剝　片 | 47 | 2 | | | 4 | 6 | 20 | 29 | 16 | 34 | 2 | | | | 4 | | | | | 164 |
| | U剝片 | | | | | | | | 1 | 2 | | | | | | | | | | | 3 |
| | R剝片 | 8 | | | | 1 | 1 | 1 | 4 | 1 | 3 | 1 | | 1 | | 1 | 1 | 2 | | | 25 |
| | 石　鏃 | 3 | 1 | | | | 1 | 2 | 7 | 1 | 9 | 1 | | | | 2 | | | | | 27 |
| | 石　錐 | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 楔　形 | 1 | | | | | | | 3 | | | | | | | 1 | | | | | 5 |
| | 掻削器 | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | 4 |
| | 石　棒 | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 石　斧 | | | 1 | | | | | 2 | | | | | | | | | | | | 3 |
| | 磨　石 | 2 | | | | 1 | | 3 | | | | | | | 1 | | | | | | 7 |
| | 敲　石 | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 焼　礫 | | 1 | | 4 | | | 2 | 1 | | 4 | | | | | | | 1 | | | 13 |
| | 破　礫 | | | | 2 | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 3 |
| | 軽　石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 13 | 13 |
| | 計 | 62 | 5 | 1 | 7 | 7 | 8 | 29 | 50 | 20 | 51 | 5 | 0 | 1 | 1 | 8 | 1 | 3 | 0 | 13 | 272 |
| 5T | 剝　片 | | | 1 | | | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | 3 |
| | R剝片 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 石　錘 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 磨　石 | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 焼　礫 | 1 | 1 | | 1 | | | | | | 2 | | | | | | | | | | 5 |
| | 破　礫 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 礫　器 | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 石　皿 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 計 | 3 | 3 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 15 |
| 6T | 剝　片 | | | | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | 2 |
| | 焼　礫 | | 1 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 計 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| 7T | 剝　片 | | | | | | | | | 2 | | | | | | | | | | | 2 |
| | U剝片 | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | 1 |
| | R剝片 | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | 2 |
| | 磨　石 | 1 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 焼　礫 | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | | | | 3 |
| | 計 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 3 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 |
| 8T | 剝　片 | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | 2 |
| | 石　鏃 | | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 礫 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 焼　礫 | 1 | 1 | | | 2 | | | | | | | | | | | | | | | 4 |
| | 砥　石 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 計 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 10 |
| 9T | 敲　石 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 焼　礫 | | | | | | 1 | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | 3 |
| | 計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |

| 位置 | 器　種 | 安山 | 凝灰 | 凝頁 | 火凝 | 頁岩 | 珪頁 | 砂岩 | 硬砂 | 黒曜 | チャ | 石英 | メノ | 粘板 | 閃緑 | 流紋 | 泥岩 | 片岩 | 片理 | 軽石 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SK01 | 剝　片 | | | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 3 |
| | 石　鏃 | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| | 礫 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 焼　礫 | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 破　礫 | | | | | | | 1 | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 軽　石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 2 | 2 |
| | 計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 9 |
| SK02 | 剝　片 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | | | 3 |
| | 焼　礫 | | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | | | | | | 2 |
| | 軽　石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 | 1 |
| | 計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 6 |
| 表採 | 剝　片 | 1 | | | | 4 | | | 6 | 9 | 14 | 6 | | 3 | | 1 | | | | | 44 |
| | U剝片 | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | | 2 |
| | R剝片 | | 1 | | | 3 | | | | 2 | 6 | 2 | | | | | | | | | 14 |
| | 石　鏃 | | | | | 2 | | | | 1 | 6 | | | | | | | | | | 9 |
| | 石　斧 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | | 1 |
| | 石　匙 | 1 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 1 |
| | 計 | 2 | 1 | 0 | 0 | 9 | 0 | 0 | 6 | 13 | 27 | 8 | 0 | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 71 |
| | 総　計 | 78 | 26 | 8 | 13 | 27 | 15 | 46 | 67 | 44 | 95 | 17 | 2 | 7 | 5 | 10 | 1 | 4 | 1 | 17 | 483 |

出土石器組成表凡例

凝頁＝凝灰質頁岩　火凝＝火山礫凝灰岩　珪頁＝珪質頁岩　チャ＝チャート　メノ＝メノウ

第４表　出土石器属性表

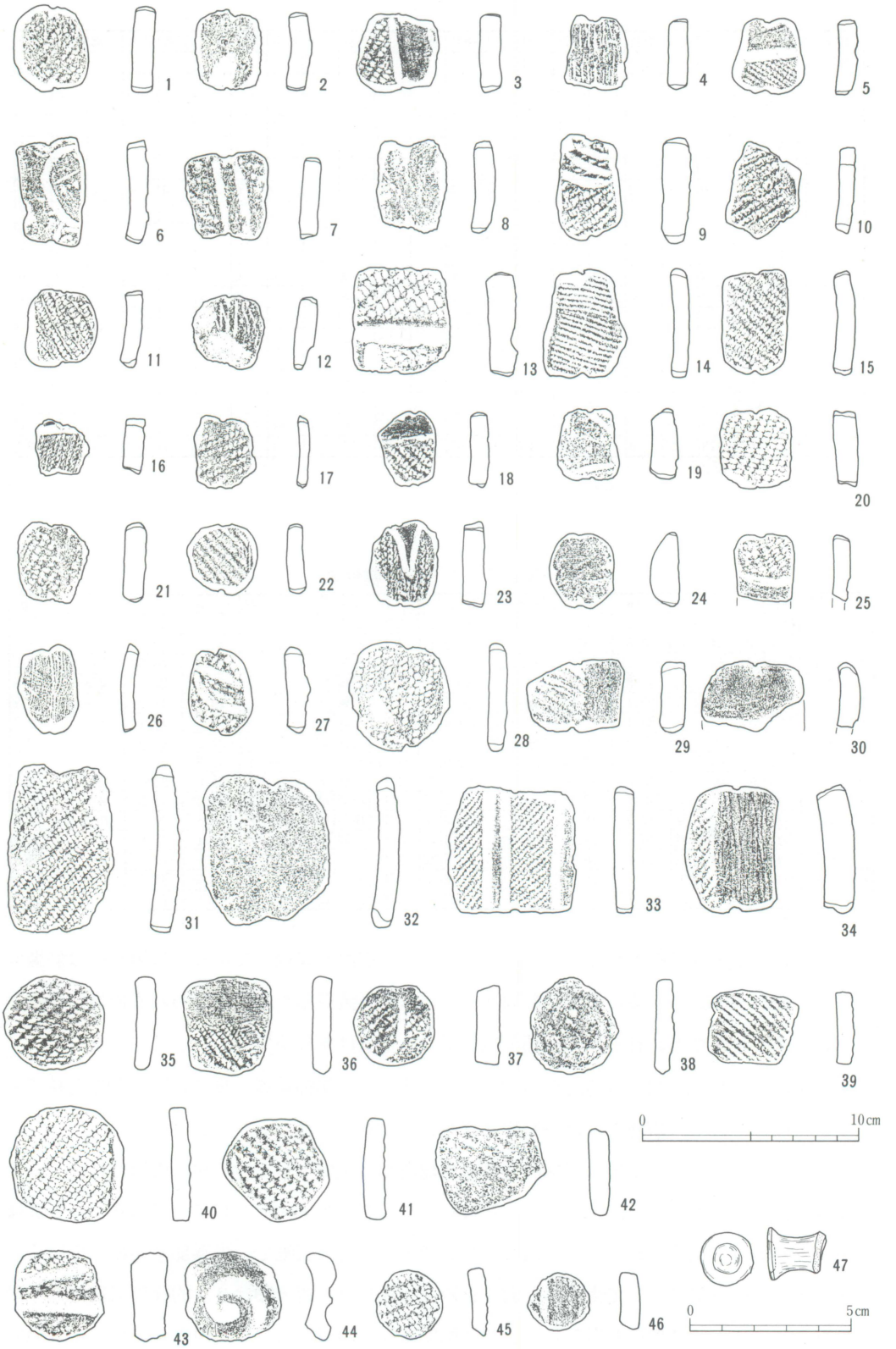
| No. | 位置 | 器種 | 石　材 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | No. | 位置 | 器種 | 石　材 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 2 T | 敲石 | 凝灰質頁岩 | (62.3) | 35.1 | 17.0 | 62.5 | 16 | 3 T | 石鏃 | チャート | 16.2 | 11.9 | 2.9 | 0.7 |
| 2 | 3 T | 打斧 | 凝灰質頁岩 | (61.8) | 38.7 | 17.7 | 54.7 | 17 | 3 T | 石鏃 | 安山岩 | 31.2 | 21.3 | 4.3 | 2.0 |
| 3 | 3 T | 打斧 | 硬砂岩 | (50.7) | 38.9 | 11.2 | 30.9 | 18 | 3 T | 石鏃 | チャート | 26.4 | 20.8 | 5.4 | 1.9 |
| 4 | 表採 | 石匙 | 安山岩 | 49.8 | 37.6 | 11.0 | 19.8 | 19 | 2 T | 石鏃 | 安山岩 | 29.1 | 20.7 | 4.8 | 2.8 |
| 5 | 5 T | 石錘 | 凝灰質頁岩 | 90.1 | 62.9 | 18.0 | 167.7 | 20 | 3 T | 石鏃 | チャート | 26.3 | (18.2) | 5.2 | 1.8 |
| 6 | 3 T | 磨石 | 砂岩 | 85.4 | 78.8 | 37.0 | 338.4 | 21 | 3 T | 石鏃 | チャート | 25.4 | 19.4 | 6.8 | 2.8 |
| 7 | 5 T | 石皿 | 安山岩 | (77.6) | (39.4) | (56.4) | 129.1 | 22 | 3 T | 石鏃 | 硬砂岩 | 26.2 | 20.9 | 5.7 | 2.5 |
| 8 | 3 T | 石棒 | 火山礫凝灰岩 | (61.7) | (73.7) | (27.8) | 120.9 | 23 | SK01 | 石鏃 | チャート | 42.3 | 24.2 | 4.4 | 2.3 |
| 9 | 3 T | 石鏃 | 硬砂岩 | 15.5 | 13.9 | 3.2 | 0.7 | 24 | 3 T | 石鏃 | チャート | 35.0 | 23.0 | 12.6 | 7.6 |
| 10 | 3 T | 石鏃 | チャート | 15.7 | (12.1) | 3.1 | 0.4 | 25 | 3 T | 石錐 | 硬砂岩 | (33.9) | 13.5 | 8.9 | 3.3 |
| 11 | 3 T | 石鏃 | 石英 | 15.9 | 14.4 | 3.5 | 0.8 | 26 | 3 T | 楔形 | 硬砂岩 | 29.1 | 29.5 | 10.3 | 10.0 |
| 12 | 8 T | 石鏃 | 珪質頁岩 | 16.4 | (17.2) | 5.6 | 1.3 | 27 | 3 T | R剝 | 珪質頁岩 | 24.1 | 38.6 | 7.4 | 6.9 |
| 13 | 3 T | 石鏃 | 硬砂岩 | (16.4) | 16.8 | 3.1 | 0.6 | 28 | 3 T | 掻削 | 珪質頁岩 | 30.8 | 30.2 | 9.1 | 8.8 |
| 14 | 3 T | 石鏃 | チャート | 18.0 | 16.9 | 3.7 | 0.8 | 29 | 3 T | R剝 | チャート | 34.5 | 31.2 | 11.2 | 11.9 |
| 15 | 3 T | 石鏃 | 砂岩 | 18.8 | 17.5 | 3.9 | 0.8 | 30 | 3 T | 楔形 | 硬砂岩 | 29.1 | 24.1 | 9.0 | 6.3 |

1は敲石、2・3は打製石斧であるが、いずれも先端部を欠損している。打製石斧は剝離面を擦って稜をつぶしている。1・2の両サイドには柄に装着した痕跡と思われる擦痕が見受けられる。4は石匙と思われるが、一部欠損しており全貌は明らかでない。

5は石錘である。今回周辺遺跡を踏査したところ、木内明神貝塚、良文貝塚、神生遺跡でも石錘を表採しており、当地方では一般的に存在したのかもしれない。

9～24は石鏃である。石鏃は表採品も含めて総数43点が出土しているが、内31点は2・3Tの加曽利E式包含層からの出土である。石材をみてみるとチャートが17点と最も多く、これは従来から当地方で指摘されてきた。24は未製品である。25は石錐で、先端部を欠損している。

26～30は両極剝離によって得られた剝片石器を一括した。27・29は2次的な加工痕の残る剝片であるが、26・30は楔形石器として、28は削器あるいは掻器として使用されている。両極剝離の手法は当地方の特に加曽利E式後半期に多くみられる。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
0
10cm
0
5cm

第29図　出土土製品

### 3．土製品（第29図）

今回の調査では多数の土器に混じて土器片錘、土製円板等の土製品も出土している。図示したのは土器片錘34点、土製円板12点であるが、その後土器の分類作業中にも数点確認しており、総数はかなり多くなると思われる。使用されている土器は加曽利ＥⅠ～Ⅱ式のものが多く、阿玉台式や加曽利ＥⅢ・Ⅳ式が僅かにみられ、そのほかの型式は全くみられない。

土器片錘については形態や大きさはまちまちであるが、10で一端に２本の刻みがみられる点を除いてはすべて両端に１本づつの刻みを施したものである。土製円板は35や38では周囲を打ち欠いただけであるが、その多くの周囲は摩滅しており37などは光沢を持つほどであった。

48は耳栓である。鼓状の形態を呈し、最大径1.7cm、幅約2.0cmと小形であった。焼成は大変良好で、色調は土師器のような暗赤橙色を呈する。

### 4．骨角器

過去の調査成果では、貝刃・貝輪・骨鏃・垂飾品等の骨角器が多数検出されているが、今回調査中に確認したのはフグの角骨に穿孔した垂飾品１点に過ぎない。これはSK-02出土の幼児骨の頭骸付近から出土したものである。

この他にも貝サンプルや獣骨として取り上げたものの中に含まれている可能性は強いが、先述の垂飾品も含めてサンプルの分析や獣骨の同定に時間を要したためここでは図示することができなかった。改めて報告の機会を持ちたいと思う。

### 5．動物遺存体

今回の調査では多量の軟体動物及び脊椎動物の遺存体を得ることができた。脊椎動物の同定については千葉県立中央博物館　小宮　孟氏に依頼した。その成果については付章２を参照されたい。ここでは軟体動物の同定結果についてまとめておきたい。なお、同定は当センター　技師　出口雅人によるものである。

(1)　同定結果

同定結果を第７表に示した。これには、貝サンプルから検出されたものの他に、調査期間中に表採した資料も含んでいる。貝類の内容は貝層の地点毎に異なった傾向が観察されたが、今回は全体を一括した報告としたい。

同定された貝類は、腹足綱17種、二枚貝綱16種である。今回新たに同定されたものは、ニシキアマオブネガイ、アマオブネガイ、イシマキガイ、カゴメガイ、キクザルガイ、ズングリアゲマキガイ、ヤマトシジミがある。当貝塚はハマグリをはじめ、湾奥砂質底群集（松島義章1982）の貝類が主体となり構成されている。このような傾向は、周辺の同時期の貝塚と共通している。

## 第5表　動物依存体種名一覧

| | | |
|---|---|---|
| 軟体動物 | MOLLUSCA | |
| 腹足綱 | GASTROPODA | |
| | イボキサゴ | *I'mbonium (Suchium) moniliferum* |
| | ダンベイキサゴ | *Umbonium (Suchium) giganteum* |
| | スガイ | *Lunella coronata coreensis* |
| | ニシキアマオブネガイ | *Nerita (Theliostrla) albicilla* |
| | アマオブネガイ | *Nerita (Amphinerita) polita* |
| | イシマキガイ | *Clithon retropictus* |
| | ヒロクチカノコガイ | *Dostia violacea* |
| | ヘナタリ属 | *Cerithdea spp.* |
| | ウミニナ属 | *Batillaria spp.* |
| | ツメタガイ | *Glossaulax didyma* |
| | ホンヤツメタガイ | *Glossaulax hosoyai* |
| | アカニシ | *Rapana venosa* |
| | カゴメガイ | *Bedeva birileffi* |
| | イボニシ | *Thais (Reishia) clavigera* |
| | アラムシロガイ | *Reticunassa festira* |
| | バイ | *Balylonia japonica* |
| | 有肺亜綱種不明（陸産微小貝） | |
| 二枚貝綱 | BIVALVIA | |
| | サルボウガイ | *Scapharca subcrenata* |
| | ハイガイ | *Tegillarca granosa* |
| | ベンケイガイ | *Glycymeris albolineata* |
| | ナミマガシワガイ | *Anomia chinensis Philippi* |
| | マガキ | *Crassostrea gigas* |
| | キクザルガイ | *Chama gaponica* |
| | シオフキガイ | *Mactra quadrangularis* |
| | ズングリアゲマキガイ | *Azorinus abbreviatus* |
| | マテガイ | *Solen strictus* |
| | ヤマトシジミ | *Corbicula japonica Prime* |
| | カガミガイ | *Phacosoma japonicum* |
| | アサリ | *Ruditapes philippinarum* |
| | ハマグリ | *Meretrix lusoria* |
| | チョウセンハマグリ | *Meretrix lamarckii* |
| | オキシジミ | *Cyclina sinensis* |
| | オオノガイ | *Mya arenaria conogai* |
| 脊椎動物 | VERTEBRATA | |
| 硬骨魚綱 | OSTEICHTHYES | |
| | マダイ | *Pagrus major* |
| | クロダイ | *Acanthopagrus spp.* |
| | トラフグ | *Takifugu sp.* |
| 哺乳綱 | MAMMALIA | |
| | イルカ類 | *Delphinidae or phocaenidae* |
| | イヌ | *Canis familialis* |
| | イノシシ | *Sus leucomustax* |
| | ニホンジカ | (*Cervus nippon*) |

(2) 貝サンプルの分析

第6表のように、7箇所で貝サンプルを採取したが、ここでは1T・3T・6T・SK-01-I・SK-02の5つの分析結果を示すにとどまった。分析の方法は、基本的には前年度の誉田高田貝塚の報告に従った。ただし、二枚貝綱の集計は、殻頂部を保存する資料を左右別に行い、多い方を記載した。

第6表　貝サンプル一覧

| | 採取位置 | 採取方 | 採取量 | 時期 |
|---|---|---|---|---|
| 1T | 4層 | 貝層一括(部分) | 30×80×不定<br>1カット | |
| 3T | 6層上面から厚さ10cm | 層一括(部分) | 30×30×10cm<br>1カット | |
| 6T | 4層上面から厚さ10cm | 層一括(部分) | 30×30×5cm<br>1カット | |
| SK-01-I | 貝の多い部分(任意) | 層に関係なく一括採取 | 50×50×5cm<br>1カット | |
| SK-01-C | 覆土中層～下層 | 厚さ5cmで柱状に連続採取 | 30×30×5cm<br>9カット | |
| SK-01-P | 床面中央のピット内 | 厚さ約10cm毎にピット内全量採取 | 30×30×約10<br>7カット | |
| SK-02 | 2層上面近くから厚さ5cm | 層一括(部分) | 30×30×5cm<br>1カット | |

**貝の組成比率**　第7表のように、各サンプルでハマグリの個体数が40～50%を占め、最も多い。また、貝類群集別では、湾奥砂質底群集が71.5%、湾奥干潟群集が23.2%で、両者で90%以上に及ぶ。

一方、汽水性種は全体で5.4%程度であるが、SK-01-Iでヤマトシジミが17%を占めている他は、いずれも1%未満である。

**貝類の大きさ**　貝サンプルから検出されたハマグリ、マガキ、シオフキ、ヤマトシジミ、カガミガイ、アサリ、オキシジミの7種の計測可能な資料の殻長を計測した。いずれも資料数が少なく、安定した統計値とはいいがたいが、若干の傾向を述べたい。

表を見ると、ハマグリは20.0～62.5㎜までの個体を採取しており、30～40㎜に集中がある。また、マガキは12.5～42.5㎜まで分布し、20～27.5㎜のごく小さいものが主体であった。以前から、当貝塚を構成している貝類は周辺の貝塚に比べて、小さいと指摘されているが(西村1984)、現時点では比較できるデータが少ないこともあり、くわしい検討は今後に委ねたい。

## 第７表　貝類同定結果

| | 1　T | | | | 3　T | | | | 6　T | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 個体数 | (%) | 重量g | (%) | 個体数 | (%) | 重量g | (%) | 個体数 | (%) | 重量g | (%) |
| イボキサゴ | | 0.0 | | 0.0 | 5 | 2.9 | 2.1 | 0.2 | | 0.0 | | 0.0 |
| スガイ | 1 | 0.5 | 0.2 | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 |
| アマオブネガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.5 | 0.0 |
| イシマキガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 0.3 | 0.3 | 0.0 |
| ヘナタリガイ | 2 | 1.0 | 1.0 | 0.1 | | 0.0 | | 0.0 | 6 | 0.8 | 2.8 | 0.1 |
| ウミニナ属 | 5 | 2.4 | 1.9 | 0.2 | 5 | 2.9 | 3.0 | 0.3 | 52 | 7.2 | 25.9 | 0.6 |
| ツメタガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.1 | 0.0 |
| アカニシ | 1 | 0.5 | 3.3 | 0.3 | 2 | 1.1 | 11.4 | 1.1 | | 0.0 | | 0.0 |
| ヒメヨウラクガイの一種 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.4 | 0.0 |
| アラムシロ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 0.3 | 0.4 | 0.0 |
| ハイガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 |
| マガキ | 34 | 16.3 | 65.9 | 5.4 | 4 | 2.3 | 9.9 | 1.0 | 100 | 13.9 | 251.0 | 5.5 |
| シオフキガイ | 38 | 18.2 | 294.6 | 24.3 | 27 | 15.5 | 196.8 | 19.0 | 160 | 22.2 | 1102.3 | 24.1 |
| ヤマトシジミ | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.6 | 1.4 | 0.1 | | 0.0 | | 0.0 |
| カガミガイ | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.6 | 11.6 | 1.1 | 4 | 0.6 | 94.4 | 2.1 |
| アサリ | 22 | 10.5 | 92.0 | 7.6 | 18 | 10.3 | 47.4 | 4.6 | 98 | 13.6 | 316.0 | 6.9 |
| ハマグリ | 76 | 36.4 | 587.9 | 48.6 | 85 | 48.9 | 597.0 | 57.8 | 265 | 36.8 | 2636.8 | 57.6 |
| オキシジミ | 1 | 0.5 | 12.9 | 1.1 | 23 | 13.2 | 138.6 | 13.4 | 3 | 0.4 | 30.3 | 0.7 |
| マテガイ | 1 | 0.5 | 0.1 | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 |
| オオノガイ | 28 | 13.4 | 150.5 | 12.4 | 2 | 1.1 | 14.2 | 1.4 | 24 | 3.3 | 112.5 | 2.5 |
| 二枚貝綱種不明 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.6 | 0.3 | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.7 | 0.0 |
| 合　計 | 209 | 100.0 | 1210.3 | 100.0 | 174 | 100.0 | 1033.7 | 100.0 | 720 | 100.0 | 4574.4 | 100.0 |

| | SK-01-1 | | | | SK-02 | | | | 合　計 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 個体数 | (%) | 重量g | (%) | 個体数 | (%) | 重量g | (%) | 個体数 | (%) | 重量g | (%) |
| イボキサゴ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 5 | 0.3 | 2.1 | 0.0 |
| スガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.2 | 0.0 |
| アマオブネガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.5 | 0.0 |
| イシマキガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 0.1 | 0.3 | 0.0 |
| ヘナタリガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 8 | 0.4 | 3.8 | 0.0 |
| ウミニナ属 | | 0.0 | | 0.0 | 7 | 3.6 | 2.0 | 0.3 | 69 | 3.8 | 32.8 | 0.3 |
| ツメタガイ | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.5 | 5.0 | 0.7 | 2 | 0.1 | 5.1 | 0.1 |
| アカニシ | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.5 | 13.7 | 1.9 | 4 | 0.2 | 28.4 | 0.3 |
| ヒメヨウラクガイの一種 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.4 | 0.0 |
| アラムシロ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 0.1 | 0.4 | 0.0 |
| ハイガイ | | 0.0 | | 0.0 | 3 | 1.6 | 11.3 | 1.6 | 3 | 0.2 | 11.3 | 0.1 |
| マガキ | 6 | 1.2 | 10.3 | 0.5 | 62 | 32.3 | 114.8 | 16.1 | 206 | 11.4 | 451.9 | 4.6 |
| シオフキガイ | 35 | 6.8 | 199.6 | 9.0 | 14 | 7.3 | 81.8 | 11.5 | 274 | 15.1 | 1875.1 | 19.2 |
| ヤマトシジミ | 88 | 17.1 | 62.3 | 2.8 | | 0.0 | | 0.0 | 89 | 4.9 | 63.7 | 0.7 |
| カガミガイ | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 1.0 | 12.8 | 1.8 | 7 | 0.4 | 118.8 | 1.2 |
| アサリ | 20 | 3.9 | 30.0 | 1.4 | 13 | 6.8 | 42.6 | 6.0 | 171 | 9.4 | 528.0 | 5.4 |
| ハマグリ | 247 | 48.0 | 1243.2 | 56.1 | 77 | 40.1 | 383.6 | 53.7 | 750 | 41.4 | 5448.5 | 55.9 |
| オキシジミ | 104 | 20.2 | 599.0 | 27.0 | 10 | 5.2 | 42.4 | 5.9 | 141 | 7.8 | 823.2 | 8.4 |
| マテガイ | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.1 | 0.1 | 0.0 |
| オオノガイ | 14 | 2.7 | 70.5 | 3.2 | 2 | 1.0 | 4.3 | 0.6 | 70 | 3.9 | 352.0 | 3.6 |
| 二枚貝綱種不明 | 1 | 0.2 | 0.1 | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 3 | 0.2 | 1.1 | 0.0 |
| 合　計 | 515 | 100.0 | 2215.0 | 100.0 | 192 | 100.0 | 714.3 | 100.0 | 1810 | 100.0 | 9747.7 | 100.0 |

## 第８表　貝類計測値分布（１）

### A／マガキ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1　T (%) | | 3　T (%) | | 6　T (%) | | 合　計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12.5-15.0 | | #DIV/0! | 1 | 3.0 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 2.4 | 3 | 2.3 |
| 15.0-17.5 | | #DIV/0! | 4 | 12.1 | | 0.0 | | 0.0 | 7 | 8.4 | 11 | 8.3 |
| 17.5-20.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 33.3 | 9 | 10.8 | 10 | 7.6 |
| 20.0-22.5 | | #DIV/0! | 5 | 15.2 | 2 | 15.4 | 2 | 66.7 | 20 | 24.1 | 29 | 22.0 |
| 22.5-25.0 | | #DIV/0! | 8 | 24.2 | 2 | 15.4 | | 0.0 | 19 | 22.9 | 29 | 22.0 |
| 25.0-27.5 | | #DIV/0! | 8 | 24.2 | 3 | 23.1 | | 0.0 | 13 | 15.7 | 24 | 18.2 |
| 27.5-30.0 | | #DIV/0! | 1 | 3.0 | 2 | 15.4 | | 0.0 | 6 | 7.2 | 9 | 6.8 |
| 30.0-32.5 | | #DIV/0! | 5 | 15.2 | 1 | 7.7 | | 0.0 | 4 | 4.8 | 10 | 7.6 |
| 32.5-35.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 2 | 15.4 | | 0.0 | 2 | 2.4 | 4 | 3.0 |
| 35.0-37.5 | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 37.5-40.0 | | #DIV/0! | 1 | 3.0 | 1 | 7.7 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 1.5 |
| 40.0-42.5 | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | | 1 | | 1.2 | 1 | 0.8 |
| 合計 | 0 | #DIV/0! | 33 | 100.0 | 13 | 100.0 | 3 | 100.0 | 83 | 100.0 | 132 | 100.0 |
| | 試料数 | 0 | 試料数 | 33 | 試料数 | 13 | 試料数 | 3 | 試料数 | 83 | 試料数 | 132 |
| | 平　均 | #DIV/0! | 平　均 | 24.51 | 平　均 | 27.98 | 平　均 | 20.42 | 平　均 | 23.30 | 平　均 | 24.00 |
| | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 5.36 | 標準偏差 | 5.24 | 標準偏差 | 1.44 | 標準偏差 | 4.80 | 標準偏差 | 5.12 |

### B／シオフキ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1　T (%) | | 3　T (%) | | 6　T (%) | | 合　計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 22.5-25.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 2.0 | 1 | 1.4 |
| 25.0-27.5 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 2.0 | 1 | 1.4 |
| 27.5-30.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 3 | 6.0 | 3 | 4.2 |
| 30.0-32.5 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 2.0 | 1 | 1.4 |
| 32.5-35.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | 3 | 17.6 | | #DIV/0! | 7 | 14.0 | 10 | 14.1 |
| 35.0-37.5 | 1 | 25.0 | | #DIV/0! | 3 | 17.6 | | #DIV/0! | 6 | 12.0 | 10 | 14.1 |
| 37.5-40.0 | 1 | 25.0 | | #DIV/0! | 3 | 17.6 | | #DIV/0! | 11 | 22.0 | 15 | 21.1 |
| 40.0-42.5 | | 0.0 | | #DIV/0! | 5 | 29.4 | | #DIV/0! | 12 | 24.0 | 17 | 23.9 |
| 42.5-45.0 | 2 | 50.0 | | #DIV/0! | 2 | 11.8 | | #DIV/0! | 6 | 12.0 | 10 | 14.1 |
| 45.0-47.5 | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 5.9 | | #DIV/0! | 1 | 2.0 | 2 | 2.8 |
| 47.5-50.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 2.0 | 1 | 1.4 |
| 合計 | 4 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 17 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 50 | 100.0 | 71 | 100.0 |
| | 試料数 | 4 | 試料数 | 0 | 試料数 | 17 | 試料数 | 0 | 試料数 | 50 | 試料数 | 71 |
| | 平　均 | 40.63 | 平　均 | #DIV/0! | 平　均 | 39.19 | 平　均 | #DIV/0! | 平　均 | 38.00 | 平　均 | 38.43 |
| | 標準偏差 | 3.75 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 3.77 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 5.16 | 標準偏差 | 4.80 |

# 第9表　貝類計測値分布(2)

## C／カガミガイ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1 T (%) | | 3 T (%) | | 6 T (%) | | 合 計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45.0-47.5 | | #DIV/0! | 1 | 100.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | 1 | 33.3 |
| 47.5-50.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 50.0-52.5 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | 1 | 50.0 | 1 | 33.3 |
| 52.5-55.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 55.0-57.5 | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | 1 | 50.0 | 1 | 33.3 |
| 合計 | 0 | #DIV/0! | 1 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 0 | #DIV/0! | 2 | 100.0 | 3 | 100.0 |
| | 試料数 | 0 | 試料数 | 1 | 試料数 | 0 | 試料数 | 0 | 試料数 | 2 | 試料数 | 3 |
| | 平均 | #DIV/0! | 平均 | 46.25 | 平均 | #DIV/0! | 平均 | #DIV/0! | 平均 | 53.75 | 平均 | 51.25 |
| | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 0.00 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 3.54 | 標準偏差 | 5.00 |

## D／ヤマトシジミ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1 T (%) | | 3 T (%) | | 6 T (%) | | 合 計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 10.0-12.5 | 1 | 2.3 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 2.3 |
| 12.5-15.0 | 4 | 9.3 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 4 | 9.1 |
| 15.0-17.5 | 11 | 25.6 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 11 | 25.0 |
| 17.5-20.0 | 14 | 32.6 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | 1 | 100.0 | | #DIV/0! | 15 | 34.1 |
| 20.0-22.5 | 6 | 14.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 6 | 13.6 |
| 22.5-25.0 | 2 | 4.7 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 2 | 4.5 |
| 25.0-27.5 | 4 | 9.3 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 4 | 9.1 |
| 27.5-30.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 0 | 0.0 |
| 30.0-32.5 | 1 | 2.3 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 2.3 |
| 合計 | 43 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 0 | #DIV/0! | 1 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 44 | 100.0 |
| | 試料数 | 43 | 試料数 | 0 | 試料数 | 0 | 試料数 | 1 | 試料数 | 0 | 試料数 | 44 |
| | 平均 | 19.04 | 平均 | #DIV/0! | 平均 | #DIV/0! | 平均 | 18.75 | 平均 | #DIV/0! | 平均 | 19.03 |
| | 標準偏差 | 4.05 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 0.00 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 4.01 |

## E／アサリ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1 T (%) | | 3 T (%) | | 6 T (%) | | 合 計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5.0-7.5 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 20.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 1 | 3.2 |
| 7.5-10.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 10.0-12.5 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 12.5-15.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 15.0-17.5 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 17.5-20.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 20.0-22.5 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 22.5-25.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 25.0-27.5 | 1 | 50.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | 3 | 13.6 | 4 | 12.9 |
| 27.5-30.0 | 1 | 50.0 | | 0.0 | 2 | 40.0 | | #DIV/0! | 3 | 13.6 | 6 | 19.4 |
| 30.0-32.5 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | 5 | 22.7 | 5 | 16.1 |
| 32.5-35.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 20.0 | | #DIV/0! | 5 | 22.7 | 6 | 19.4 |
| 35.0-37.5 | | 0.0 | 1 | 50.0 | 1 | 20.0 | | #DIV/0! | 3 | 13.6 | 5 | 16.1 |
| 37.5-40.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | 2 | 9.1 | 2 | 6.5 |
| 40.0-42.5 | | 0.0 | 1 | 50.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | 1 | 4.5 | 2 | 6.5 |
| 合計 | 2 | 100.0 | 2 | 100.0 | 5 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 22 | 100.0 | 31 | 100.0 |
| | 試料数 | 2 | 試料数 | 2 | 試料数 | 5 | 試料数 | 0 | 試料数 | 22 | 試料数 | 31 |
| | 平均 | 27.50 | 平均 | 38.75 | 平均 | 26.75 | 平均 | #DIV/0! | 平均 | 32.61 | 平均 | 31.73 |
| | 標準偏差 | 1.77 | 標準偏差 | 3.54 | 標準偏差 | 11.91 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 4.21 | 標準偏差 | 6.40 |

## F／ハマグリ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1 T (%) | | 3 T (%) | | 6 T (%) | | 合 計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20.0-22.5 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 10.0 | | 0.0 | 1 | 0.3 |
| 22.5-25.0 | 13 | 10.7 | | 0.0 | 1 | 2.9 | 1 | 10.0 | | 0.0 | 15 | 4.5 |
| 25.0-27.5 | 10 | 8.2 | | 0.0 | 1 | 2.9 | | 0.0 | 3 | 2.0 | 14 | 4.2 |
| 27.5-30.0 | 15 | 12.3 | 1 | 6.7 | 1 | 2.9 | 2 | 20.0 | 8 | 5.2 | 27 | 8.1 |
| 30.0-32.5 | 21 | 17.2 | 3 | 20.0 | 4 | 11.8 | 2 | 20.0 | 13 | 8.5 | 43 | 12.9 |
| 32.5-35.0 | 19 | 15.6 | 4 | 26.7 | 7 | 20.6 | 1 | 10.0 | 26 | 17.0 | 57 | 17.1 |
| 35.0-37.5 | 13 | 10.7 | 3 | 20.0 | 6 | 17.6 | | 0.0 | 26 | 17.0 | 48 | 14.4 |
| 37.5-40.0 | 9 | 7.4 | 1 | 6.7 | 5 | 14.7 | 3 | 30.0 | 25 | 16.3 | 43 | 12.9 |
| 40.0-42.5 | 4 | 3.3 | 2 | 13.3 | 4 | 11.8 | | 0.0 | 10 | 6.5 | 20 | 6.0 |
| 42.5-45.0 | 6 | 4.9 | | 0.0 | 3 | 8.8 | | 0.0 | 13 | 8.5 | 22 | 6.6 |
| 45.0-47.5 | 4 | 3.3 | 1 | 6.7 | 1 | 2.9 | | 0.0 | 6 | 3.9 | 12 | 3.6 |
| 47.5-50.0 | 2 | 1.6 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 12 | 7.8 | 14 | 4.2 |
| 50.0-52.5 | 2 | 1.6 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 4 | 2.6 | 6 | 1.8 |
| 52.5-55.0 | 2 | 1.6 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 4 | 2.6 | 6 | 1.8 |
| 55.0-57.5 | 1 | 0.8 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 0.7 | 2 | 0.6 |
| 57.5-60.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 1.3 | 2 | 0.6 |
| 60.0-62.5 | 1 | 0.8 | | 0.0 | 1 | 2.9 | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 0.6 |
| 合計 | 122 | 100.0 | 15 | 100.0 | 34 | 100.0 | 10 | 100.0 | 153 | 100.0 | 334 | 100.0 |
| | 試料数 | 122 | 試料数 | 15 | 試料数 | 34 | 試料数 | 10 | 試料数 | 153 | 試料数 | 334 |
| | 平均 | 34.08 | 平均 | 35.58 | 平均 | 36.91 | 平均 | 31.50 | 平均 | 38.83 | 平均 | 36.53 |
| | 標準偏差 | 7.73 | 標準偏差 | 4.67 | 標準偏差 | 6.67 | 標準偏差 | 6.17 | 標準偏差 | 6.96 | 標準偏差 | 7.46 |

## G／オキシジミ

| 殻長 (mm) | SK-001-I (%) | | SK-002 (%) | | 1 T (%) | | 3 T (%) | | 6 T (%) | | 合 計 (%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 20.0-22.5 | 2 | 3.7 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 3.2 |
| 22.5-25.0 | | 0.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | 0 | 0.0 |
| 25.0-27.5 | 1 | 1.9 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | 1 | 1.6 |
| 27.5-30.0 | 3 | 5.6 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | 3 | 4.8 |
| 30.0-32.5 | 19 | 35.2 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | 1 | 16.7 | 20 | 32.3 |
| 32.5-35.0 | 16 | 29.6 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | 1 | 16.7 | 17 | 27.4 |
| 35.0-37.5 | 7 | 13.0 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | 1 | 50.0 | 3 | 50.0 | 11 | 17.7 |
| 37.5-40.0 | 4 | 7.4 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | 1 | 50.0 | 1 | 16.7 | 6 | 9.7 |
| 40.0-42.5 | 2 | 3.7 | | #DIV/0! | | #DIV/0! | | 0.0 | | 0.0 | 2 | 3.2 |
| 合計 | 54 | 100.0 | 0 | #DIV/0! | 0 | #DIV/0! | 2 | 100.0 | 6 | 100.0 | 62 | 100.0 |
| | 試料数 | 54 | 試料数 | 0 | 試料数 | 0 | 試料数 | 2 | 試料数 | 6 | 試料数 | 62 |
| | 平均 | 32.96 | 平均 | #DIV/0! | 平均 | #DIV/0! | 平均 | 37.50 | 平均 | 35.42 | 平均 | 33.35 |
| | 標準偏差 | 3.85 | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | #DIV/0! | 標準偏差 | 1.77 | 標準偏差 | 2.58 | 標準偏差 | 3.82 |

# 付章1　白井大宮台貝塚人骨

東京慈恵医科大学　加　藤　　征

## 1．成人骨（SK-01）

**頭骨**　前頭骨鱗部のグラベラ部が残存し、ここには前頭骨縫合が遺存していた。その他左右頭頂骨前部、左右頭頂骨後部と後頭骨のラムダ線が残存しているが、頭頂骨中央部は破損欠落していたので連続したものではない。

右側頭骨の錐体部・岩様部があり側頭骨は破損欠落している。

下顎骨の右側半が残存しており、オトガイ孔部の下顎高は38.2㎜でかなり高い値である。歯は犬歯、第1小臼歯から第2大臼歯までが残存している。歯槽に丁植しているので近遠心径は計測不能であるが頰舌径は第1大臼歯11.1㎜、第2大臼歯10.8㎜で比較的大きい。第2小臼歯は強度の齲歯で歯冠部はなく2根となって残っており、歯根部の歯槽は退縮して強度の歯根膜炎があったことが伺われる。縄文人の臼歯における齲歯率は3～7％（酒井・池田　1981）からみればこの縄文人骨に齲歯が存することがあっても不自然ではない。下顎の左第1、第2および第3大臼歯が残存していたが咬耗が強く、咬合面は水平になっており、象牙質の露出はあまりなくBrocaの1ないし2度である。歯のサイズは近遠心径では第1大臼歯11.9㎜、第2大臼歯11.3㎜、第3大臼歯は11.9㎜である。現代関東人よりやや大きい。これら頭骨の所見からは20～30才の男性ではないかと推測される。

**胸郭**　椎骨、肋骨、胸骨等は小骨片で識別できるものはない。

**上肢骨**　上肢骨は右側においてやや残りが良い。右上腕骨は下端から19cmが残っていたが、破骨して復元するも中央径は不明である。肘頭窩は2段に変形していた。

右橈骨は近位端から20.1cmが残存していた。全長を推定すると約22.5cm位と思われる。体横径14.9㎜、体矢状径10.6㎜である。縄文時代人骨データと比較すると早・前期人の男性の横径は14.1㎜、女性は13.8㎜、中・後・晩期人の男性16.5㎜、女性14.5㎜であり、矢状径は早・前期人の男性11.4㎜、女性9.9㎜、中・後・晩期人の男性12.7㎜、女性10.8㎜であり、本橈骨は長さは長いが太さは細くかなりきゃしゃである。推定身長は男性とすれば159.5cm、女性とすれば156.4cm位と思われる。

右尺骨は滑車切痕下部で折れているが、骨幹部21.2cmが残っている。左は小骨片で識別不能である。

手根骨は舟状骨、月状骨、有頭骨、大菱形骨がほぼ完全な形で残っており、三角骨の一部が残っている。

中手骨は比較的保存がよく右は全5本、左は3本が残っている。右第1中手骨は45㎜の最大長

（現代関東人男性平均43.7㎜、女性40.1㎜）、体中央厚7.3㎜（現代関東人男性8.4㎜、女性7.5㎜）、体中央幅11.1㎜（現代関東人男性11.6㎜、女性10.6㎜）である。長さは現代関東人男性よりかなり長いが横径と厚径は小さく、現代関東人より細くきゃしゃな中手骨である。左第３中手骨の全長は62.0㎜（現代関東人男性62.4㎜、女性58.3㎜）、中央横径6.8㎜（現代関東人男性7.9㎜、女性6.5㎜）、体中央厚径9.0㎜（現代関東人男性9.4㎜、女性8.2㎜）の大きさをもった中手骨である。

基節骨は４本あり、ほぼ完全な左母指基節骨は29.0㎜（現代関東人男性30.0㎜、女性28.0㎜）、底横径13.4㎜（現代関東人男性13.0㎜、女性11.5㎜）、底厚径9.4㎜（現代関東人男性9.5㎜、女性8.7㎜）である。左第３基節骨全長44.0㎜（現代関東人男性43.6㎜、女性41.6㎜）、体中央横径9.4㎜（現代関東人男性9.6㎜、女性8.1㎜）、体中央厚径6.4㎜（現代関東人男性7.1㎜、女性6.2㎜）の大きさであるが女性とするには長すぎるようであり男性基節骨と思われる。

中節骨は３本で最も保存のよいのは左第３中節骨で全長27.0㎜（現代関東人男性27.1㎜、女性25.7㎜）、底横径12.2㎜（現代関東人男性11.2㎜、女性10.3㎜）、底厚径8.4㎜（現代関東人男性7.6㎜、女性7.2㎜）の大きさで長さは現代関東人男性とほぼ同じであるが、底横径・厚径とも現代関東人より大きく底部は頑丈な中節骨である。

**下肢骨**　左右寛骨は保存状態が悪く形態は不明である。

左大腿骨は内側顆を含めた下部23.8cmが残存し、右は上下の両端部は破損し骨幹部27.7cmが比較的良く保存されていた。体横径左24.0㎜、右23.9㎜（縄文時代前・早期人男性23.6㎜、女性22.5㎜、中・後・晩期人男性25.9㎜、女性23.8㎜）、体矢状径左26.6㎜、右27.4㎜（縄文時代早・前期人男性28.3㎜、女性22.3㎜、中・後・晩期人男性30.1㎜、女性26.2㎜）、内顆最大長55.7㎜（縄文時代早・前期人男性57.3㎜、女性52.5㎜、中・後・晩期人男性58.8㎜、女性54.0㎜）の諸径であるが、女性平均値よりは大きな値であるが男性の平均値よりはやや小さな値といえる。

残存部分から大腿骨最大長は37～38cm位と推定できるが縄文時代早前期人男性40.6cm、女性38.2cm、中・後・晩期人の男性41.7cm、女性39.3cm等のデータと比較すると縄文時代人としてはかなり小さい大腿骨といえる。

小片（1981）は縄文時代早・前期人は「きゃしゃ」、中・後・晩期人は「がんじょう」であると結論している。大腿骨は非常に小さく女性と見誤る程であるが、下顎、歯牙、上肢骨、中手骨等々の大きさからは男性と推測され、橈骨からみた推定身長は159.5cm、大腿骨からみた推定身長は150.8ないし152.7cm位で、きゃしゃな縄文人が推測される。

### ２．小児骨（SK-02）

**頭骨**　小児骨は頭部では前頭骨右半、左・右頭頂骨、右側頭骨一部、後頭骨鱗部及び底部、そ

の他小骨片の脳頭蓋が残存しているが復元は不能で大きさは判らない。

顔面頭蓋は右上顎骨の一部と下顎の右側半が残存し、歯牙は乳歯の右上顎第１・第２乳臼歯と下顎の右全乳歯及び左乳中・側切歯及び乳犬歯が残存している。

乳歯がほぼ完全にはえ揃っており、６才臼歯といわれる第１大臼歯の歯冠が形成されている状態等から５才前後の小児と推定される。

**その他の骨**　肋骨片が比較的多く残っており、厚さは3.4㎜～4.8㎜位であり上下径は8.0㎜～9.0㎜である。

椎骨片もよく残っており、椎体と椎弓部が分離しており部位による識別は困難である。四肢骨は保存が極めて悪く、最もよいもので右大腿骨近位端で7.6cmの長さが保存されていたが、他はいずれも小骨片となっており識別をするのに充分ではない。

第10表　白井大宮台貝塚遺跡人骨観察結果

**ＳＫ-01成人骨**

| | No. | 観察結果 |
|---|---|---|
| 頭　骨 | 149 | 前頭骨グラベラ部　前頭縫合一部残 |
| | 150 | 前頭骨片 |
| | 153 | 頭骨片　場所不明 |
| | 155 | 左右頭頂骨グラベラ部　ラムダ部の左右頭頂骨及び後頭骨　右側頭骨　錐・岩様部 |
| | 151 | 上顎骨の一部 |
| | 154 | 下顎骨右前半　下顎隆起著明　副オトガイなし　右下顎歯4，5，7，8残<br>右第１大臼歯は強度のカリエス　左下顎歯6，7，8残 |
| | 136 | 強い咬耗 |
| 上肢骨 | 147 | 上腕骨片３×５㎜　粉状５～６個 |
| | 135 | 右上腕骨　19cm残　肘頭窩は２段窩 |
| | 114 | 長骨　上腕骨または橈骨の骨片10数点あり |
| | 115 | 右橈骨　20.1cm残　体中央横径14.9㎜　体中央矢状径10.6㎜　全長22.5cm位か |
| | 116 | 右尺骨　21.2cm残　全長24cm位か |
| | 138 | 尺骨片 |
| | 124 | 右舟状骨・月状骨・三角骨片・有頭骨・大菱形骨 |
| | 117 | 右第１中手骨　全長45㎜　体中央横径11.1㎜　体中央矢状径7.3㎜<br>底横径14.9㎜　底矢状径14.6㎜ |
| | 118 | 第２中手骨底体　頭破損　体中央横径7.1㎜　体中央矢状径8.8㎜　底横径15.3㎜　底矢状径17.2㎜ |
| | 119 | 右第３中手骨　底と体、頭部破損　体中央横径7.0㎜　体中央矢状径9.1㎜<br>底横径12.0㎜　底矢状径16.0㎜ |
| | 125 | 第４中手骨　底一部破損ほぼ完全　全長54㎜　体中央横径6.3㎜　体中央矢状径7.2㎜ |
| | 123 | 右中手骨 |
| | 126 | 左中手骨 |
| | 127 | 左第３中手骨　完全　全長62㎜　体中央横径6.8㎜　体中央矢状径9.0㎜<br>底横径9.7㎜　底矢状径15.2㎜　頭横径12.3㎜　頭矢状径13.5㎜ |
| | 128 | 第４中手骨 |
| | 130 | 左第３基節骨　ほぼ完全　全長44㎜　体中央横径9.4㎜　体中央矢状径6.4㎜ |
| | 133 | 基節骨 |
| | 132 | 母指基節骨　完全　全長29㎜　底横径13.4㎜　底矢状径9.4㎜ |
| | 129 | 指　基節骨頭体部　底部破損 |
| | 137 | 中節骨　近位1/2破損　頭幅8.9㎜ |
| | 134 | 第２中節骨？　全長27㎜　底横径12.2㎜　底矢状径8.4㎜ |
| | 131 | 中節骨　底部破損 |
| 下肢骨 | 113 | 右寛骨臼を一部含む皮質骨　基節骨１　左膝蓋骨１ |
| | 121 | 左寛骨小骨片 |
| | 109 | 左大腿骨　23.8cm残　体中央横径24.0㎜　体中央矢状径26.6㎜　内顆最大長55.7㎜<br>全長37～38cmか |
| | 112 | 右大腿骨　27.7cm残　体中央横径23.9㎜　体中央矢状径27.4㎜　全長37.1cm位か |
| | 120 | 脛骨片 |

110　左脛腓関節面を含めた近位端　18長片
111　腓骨

ＳＫ-02幼児骨

| | No. | 観察結果 |
|---|---|---|
| 頭　骨 | 14 | 右頭頂骨　前頭骨右半　左頭頂骨　頭頂骨の一部 |
| | 15 | 側頭骨錐体部 |
| | 16 | 側頭骨片 |
| | 47 | 右側頭骨片 |
| | 39 | 後頭骨底部 |
| | 20 | 後頭骨鱗部残 |
| | 37 | 扁平骨　頭骸の一部 |
| | 5 | 頭骸骨　部位不明 |
| | 4 | 扁平骨片 |
| | 46 | 上顎骨右側一部　第１乳臼歯　第２乳臼歯　未萠出の第１大臼歯および側切歯の歯冠６才前 |
| | 45 | 上顎右中切歯歯冠未萠出 |
| | 13 | 下顎左乳中切歯　下顎左乳切歯　右上顎側切歯歯冠未萠出 |
| | 9 | 下顎左乳側切歯 |
| | 48 | 下顎右側半　乳中切歯　乳側切歯　乳犬歯　第１・２乳臼歯<br>下顎左右中切歯・側切歯・右犬歯・第１大臼歯の歯冠 |
| 胸　郭 | 53 | 肋骨　第２肋骨か |
| | 62 | 左肋骨　厚さ4.4mm×61mm |
| | 58 | 右肋骨　厚さ3.8mm |
| | 63 | 右肋骨　厚さ4.1mm |
| | 69 | 右肋骨　厚さ3.4mm×55mm |
| | 60 | 肋骨？ |
| | 61 | 肋骨 |
| | 76 | 骨粉　肋骨の破片か？ |
| | 51 | 骨片にて不明 |
| | 7 | 肋骨　厚さ5mm |
| | 70 | 肋骨 |
| | 67 | 肋骨片 |
| | 57 | 肋骨　３骨片　厚さ3.6mm　上下径8.4mm |
| | 52 | 肋骨片　厚さ4mm |
| | 64 | 肋骨片 |
| | 33 | 頸椎？ |
| | 34 | 頸椎 |
| | 28 | 椎骨　胸椎か |
| | 56 | 骨片にて不明　ラベル記載から胸椎 |
| | 27 | 胸椎 |
| | 28 | 胸椎 |
| | 41 | 椎弓 |
| | 32 | 椎骨片 |
| | 38 | 椎骨 |
| | 8 | 椎骨片 |
| | 42 | 椎骨の椎弓 |
| | 75 | 椎骨片 |
| | 36 | 椎骨片 |
| | 77 | 椎骨 |
| 上肢骨 | 55 | 肩甲骨片 |
| | 40 | 右鎖骨外側端の可能性あり |
| | 29 | 長骨　上腕骨 |
| | 65 | 手の基節骨か？ |
| | 66 | 手の指骨　基節骨か？ |
| | 68 | 手の指骨　中節骨か？ |
| 下肢骨 | 24 | 左寛骨　腸骨下半　坐骨　恥骨片 |
| | 25 | 寛骨片 |
| | 26 | 右大腿骨近位端　75.8mmと32.8mm |
| | 23 | 大腿骨あるいは脛骨 |
| | 22 | 右大腿骨 |

# 付章2　脊椎動物遺存体

千葉県立中央博物館　小　宮　　孟

## 1．はじめに

今回の白井大宮台貝塚の調査で採集した脊椎動物資料のうち、これまでに同定可能になったものは第11表に示す哺乳類4種、魚類3種の合計7種である。いずれもかつて、西村（1984）が白井雷貝塚および白井通路貝塚から報告した動物種と重複する。なお、フグは穿孔された右下顎骨だけが同定された。

これらは9ヶ所に設定した1T～9Tまでの試掘トレンチと、2ヶ所の土壙(SK-01、SK-02)を発掘中に発見した資料である。また、これとは別に、各試掘トレンチとSK-01の堆積物から貝サンプルを採取している。現在、貝サンプルは水洗処理中であるので、水洗作業と分離物の精査が終了すれば、小形の脊椎動物を中心とする資料が新たに同定され、第11表のリストに追加される見込みである。

しかし、水洗分離物の同定作業が終了するには、なおもう少しの時間が必要である。したがって、今回の報告は、発掘中に発見した資料の出土傾向を中心とした略報にとどめ、計測結果や非計測的特徴、部位ごとの出土頻度などに関する報告は後日、稿を改めて行う予定である。

以下では、まとまった資料が得られた3TとSK-01、SK-02の順に脊椎動物の出土状況を述べ、最後に簡単なまとめを行う。

## 2．3T

脊椎動物の骨は、茶褐色土層と貝層から得られた。これまでに同定できた資料にかぎっていえば、今回調査した各地点の中では、このトレンチから得た資料が数量的に最も豊富である。この中には、イノシシ幼獣の右上腕骨遠位端と両端部を欠いた肢骨骨幹部、M1・M2の残植するイヌの右下顎骨片と下顎遊離歯（P4）などが含まれている。

イヌの下顎骨は、後述するSK-01出土の埋葬犬骨よりも若い個体のもので、残植する大臼歯にはほとんど摩耗がみられない。しかし、遊離歯は咬耗が強く、これとは別個体に由来するものと考えられる。

## 3．SK-01

埋葬された成人とイヌおよびイノシシ幼獣の骨が出土した。このうち埋葬されたイノシシの幼獣は土壙中層から出土したが、人骨と犬骨は土壙床面の直上から発見されており、この縄文人とイヌの埋葬時期は互いに接近していた可能性がある。

なお、この土壙からは上記のほかにも脊椎動物の骨が多量に出土している。これらは、平面的にはおおむね貝層が堆積する範囲の土壙中層付近に集中して堆積していたもようである。そ

の多くは、イノシシおよびシカの成獣～老獣の頭蓋骨と肢骨、脊椎骨であるが、いずれも打割されている。

また、これらに混じってイノシシの若齢個体に由来すると考えられる肢骨が少量確認された。このうちの少なくとも一点の左上腕骨は、上記の埋葬された幼猪の上腕骨よりも明らかに大きいが、遠位端は離脱している。したがって、この土壙内には埋葬された1個体の幼猪と、出土状態は確かめられなかったが、これよりはもう少し年齢のいった幼イノシシの骨が少なくも1体以上存在していたものと考えられる。

### 4．SK-02

かなり大形のイノシシの成獣下顎骨1点をはじめ多くの動物骨が採集された。詳細は、本文にゆずるが、この土壙の調査は埋葬されたヒトの幼児骨が出土した上層部まで発掘したところで終了しており、中層以下は未調査である。

この遺構で注目されることは、SK-01から出土した埋葬された幼猪とほぼ同年齢と思われるイノシシの上腕骨、下顎骨片、手根もしくは足根骨、中手もしくは中足骨、指骨などが出土していることと、SK-10の埋葬犬よりも少し小さいイヌの右上腕骨遠位端が出土していることである。

手根部や足根部など四肢の肢端部を構成する骨格は、一般に体幹部を構成する骨格よりも小さく、遺跡堆積物中にこれらの骨が散乱している場合は、細かい肢端部の骨を見つけ出すのはかなり困難である。この傾向は、体の大きさが成獣よりも相対的に小さい幼獣では、より顕著に現れると考えられる。したがって、この土壙からイノシシ幼獣の肢端部骨が比較的成績よく採集された理由の一つには、これらの骨が解剖学的に正しい位置を保ちながら狭い範囲にまとまって存在していた可能性が考えられる。

もし、そうだとすると、この土壙内にもSK-01と同じようにヒトとイヌ、イノシシ幼獣の骨が存在しており、埋葬の確認された幼児以外にもイノシシの幼獣が埋葬されていた可能性がある。

### 5．まとめ

脊椎動物骨の情報に関するかぎりでは、今回の確認調査で得た最大の成果は、埋葬された成人人骨とイヌの成獣そしてイノシシの幼獣が1つの土壙（SK-01）内から出土した事実である。

縄文人の埋葬地点付近もしくは縄文人を埋葬した同じ遺構内から埋葬された犬骨が出土することは、比較的早くから知られている（西本1983、山崎1985）。そのような点からすれば、今回の発見は新しい事例の追加にとどまるが、埋葬されたイノシシ幼獣がこれらと同じ遺構内から出土した事例は、本例以外にまだ類例がない。また、この土壙に隣接するSK-02も、SK-01と類似した性格を有している可能性がある。

このように、遺跡の比較的狭い範囲から埋葬状態の縄文時代の成人および幼児人骨、犬骨、幼猪骨がまとまって発見された例はきわめてまれで、筆者の知るかぎりでは宮城県田柄貝塚（宮城県教育委員会1986）が唯一の例である（小宮1992）。しかし、当遺跡の例は、時代的にも田柄

貝塚（縄文時代後晩期）の例を大幅に更新すること、またイノシシの幼獣の骨は上記２つの土壙内だけでなく、3Tからも発見されていることなど、多くの点で注目される。

**文　献**


小宮　孟　1992　千葉県木戸作貝塚出土の切断加工のあるイヌ下顎骨、千葉県立中央博物館研究報告２（１）（印刷中）

宮城県教育委員会　1986　『田柄貝塚　Ⅰ』675P.

西本豊弘　1983　「イヌ」　加藤晋平ほか編『縄文時代の研究　２』：161-170　雄山閣出版

西村正衛　1984　『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版会　：241-293

山崎京美　1985　縄文文化におけるイヌの埋葬について、国學院雑誌86(2):27-65


第11表
白井大宮台貝塚産出脊椎動物の調査地点別同定結果
（○印が同定されたことを示す）

| | 遺　構 | | |
|---|---|---|---|
| | SK-01 | SK-02 | 3 T |
| 哺乳類 | | | |
| イルカ類 | | | ○ |
| イ　ヌ | ○ | ○ | ○ |
| イノシシ | ○ | ○ | ○ |
| （幼猪） | ○ | ○ | ○ |
| シ　カ | ○ | ○ | ○ |
| 魚　類 | | | |
| クロダイ属 | | ○ | ○ |
| マダイ | | | ○ |
| トラフグ属 | | ○ | |

# Ⅴ まとめ

## 1．貝層範囲と各地点の呼称及び形成時期

序章でも述べたとおり、従来白井大宮台貝塚の各地点は小字名で呼ばれてきた。また「白井大宮台貝塚」の名称は1地点としても総称としても用いられてきた。さらに、実際には4方向の支谷に貝層の堆積が存在するにもかかわらず3地点分の名称しか存在していないし、実際の小字名とは合致しない地点がある。そこで今回北東斜面貝塚から反時計周りにA～D地点の名称を与えることを提唱したわけであるが、ここで旧来の名称と対比して整理してみたい。

A地点は字大宮台に所在し、旧来「白井大宮台貝塚」と呼称されてきたものである。B地点は字通路にあるがこれまで明確な呼称は与えられていない。西村氏はC地点を白井通路貝塚と報告しているが実際には字雷であり、D地点は白井雷貝塚としているが大字八本に所在する。

各地点の貝層の形成時期であるが、C・D地点については過去の成果や表面に散布する土器型式からみて五領ケ台式期（結節文の土器も含む）から阿玉台式期として間違いなかろうと思われる。A地点は、今回の調査で台地上面から五領ケ台式が、斜面下方からは加曽利E式が出土している。またA地点北部では阿玉台式が多く散布していたことは先にも述べた。これは、斜面に向かって投棄した貝が台地を拡大するように先へ先へと斜めに堆積したためと思われ、この事実は西村氏の報告でも指摘されている。A地点貝層は五領ケ台式期から加曽利E式終末まで連綿と投棄が繰り返されたもので、古いものは旧斜面付近、新しいものは台地先端堆積しているものと思われる。B地点についてはこれまであまり注目されず時期的な問題に触れられていないが、散布土器から判断すると阿玉台式から加曽利E式期の形成と思われる。

## 2．台地上の集落

台地上には当地方では珍しくかなりの平坦面が展開しており、ここには当然白井大宮台貝塚を形成した集落が存在したと考えられる。今回の調査ではその構造把握を目的とするトレンチ調査やボーリング探査を実施したが、残念ながら期待された成果を挙げることはできなかった。これは耕作による攪乱や削平等の人為的な要因によるところが大であると思われる。唯一判明したことは、7T周辺が墓域であった可能性が強いという点である。ここではSK-01・02をはじめ、ボーリング探査により貝層をもつ土壙状の落込みを数カ所確認した。また比較的攪乱の及んでいない台地北半では時期は確定できないもののかなりの住居跡状の落込みを確認した。集落構造の解明は今後の調査に期待したいと思う。

## 3．SK-01出土のヒトとイヌ及びイノシシの埋葬

今回の調査で検出したSK-01にはヒト・イヌ・イノシシの計3体が埋葬されていた。イヌ骨の

出土例は千葉県内の資料について小宮孟氏が集成されている[1]。それによると、出土遺跡数は54遺跡に及び、しばしばみられる埋葬例は確実でないものを含めて24例ある。時期的には中期以降になって発見例が急増し、埋葬例となると中期以降に限られるということである。ここではイヌの用途や狩猟方法にも言及されている。

全国レベルでみると、山崎京美氏がイヌの埋葬例を集成されている[2]。ここでは22遺跡が取り上げられており、埋葬形態や姿勢、副葬品等まで論究されている。千葉県内の遺跡は曽谷貝塚・高根木戸・加曽利貝塚・西広貝塚の4遺跡が扱われており、高根木戸例と加曽利貝塚例は人骨との合葬状態で出土している。人骨との伴出は一般的にみられることを指摘されており、また今回当文化財センター主任技師上守秀明より未報告資料ではあるが市川市向台貝塚にも類例があるとの教示があり、今後の検討を要する。

イノシシについては、シカと並んで貝塚で出土する獣骨の大半を占めている。しかしそれらのほとんどは食用に供された後の残骸であり、部位等はバラバラ、四肢骨に至っては骨髄を得るために折断されているのが一般的である。幼獣の出土自体類例が少ないわけであるが、さらに埋葬されているものとなるとほとんど類例が無いといっても過言ではない。成獣も含めた埋葬例をみても宮城県田柄貝塚が知られるのみである。田柄貝塚は縄文時代後期に形成されたもので、今回の資料は日本でも最古の出土例かも知れない。

なお、過去の調査成果では貝層中には獣骨類の包含量が少ないという指摘がされてきたが、2・3TやSK-01・02をみる限り一般的な貝塚と比較してもかなり膨大な量が出土した。

## 4．おわりに

今回の調査は秋の長雨にもたたられて大変厳しいものであったが、貝層範囲の確認と形成時期の把握、多量の出土遺物、人・イヌ・イノシシの埋葬遺構等大きな成果を得ることができた。当報告の内容はその一部に過ぎず、検討を重ねたうえで改めて報告する機会を持ちたいと思う。

反面多くの問題点も残された。最大の問題点は言うまでもなく集落構造についてであるが、表面的な知見しか得られなかったB地点貝層についてや、調査方法等今後の検討課題は莫大なものがある。

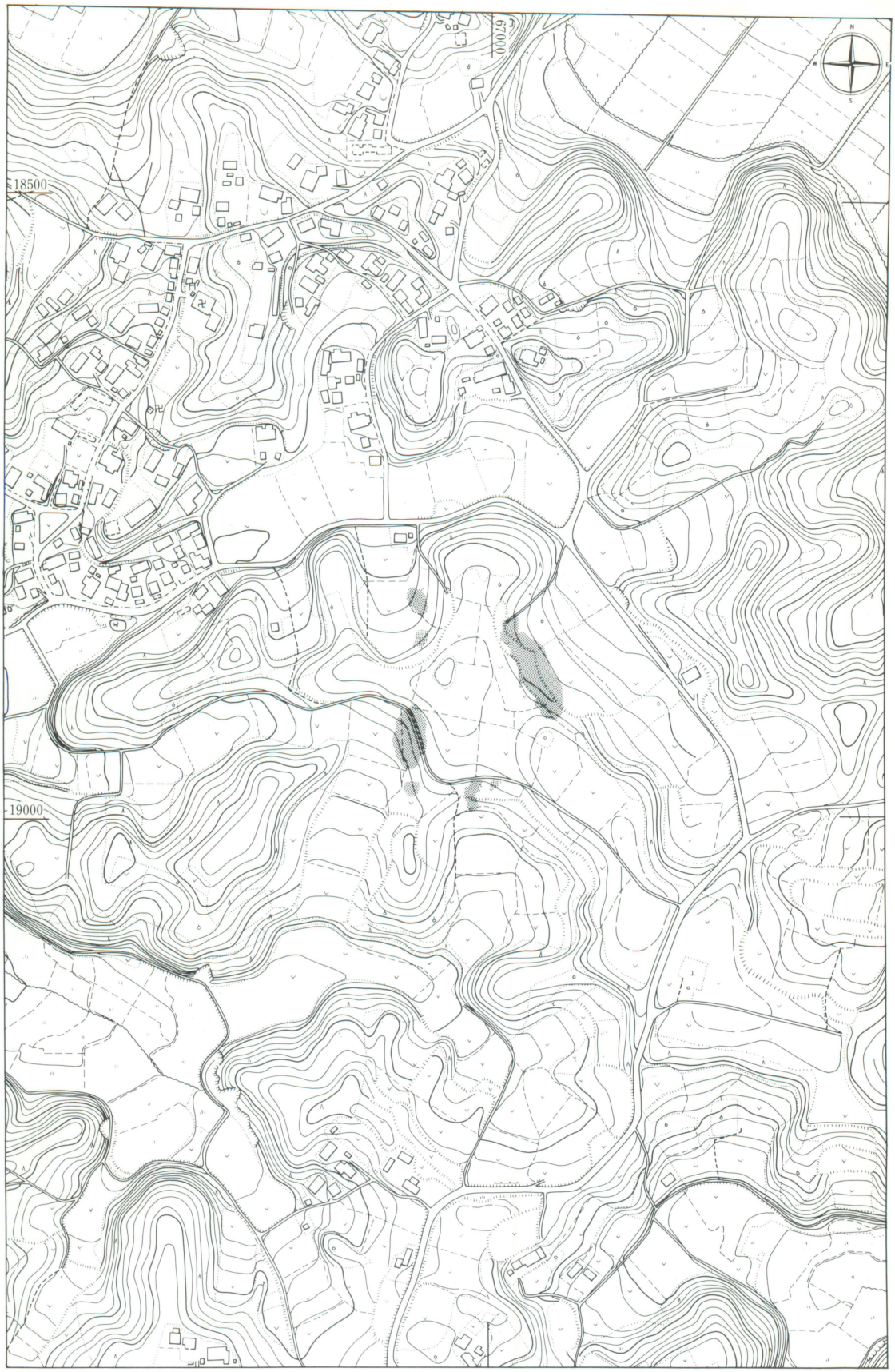
貝塚のみならず台地上の2基の古墳、今回の調査で検出した奈良・平安時代の住居跡や遺物、中世には砦が営まれたという記録等、白井大宮台が縄文時代からの痕跡が連綿と残された重要な遺跡であることは疑いの無いところであり、これまでにもまして慎重な取扱が要求される。

---

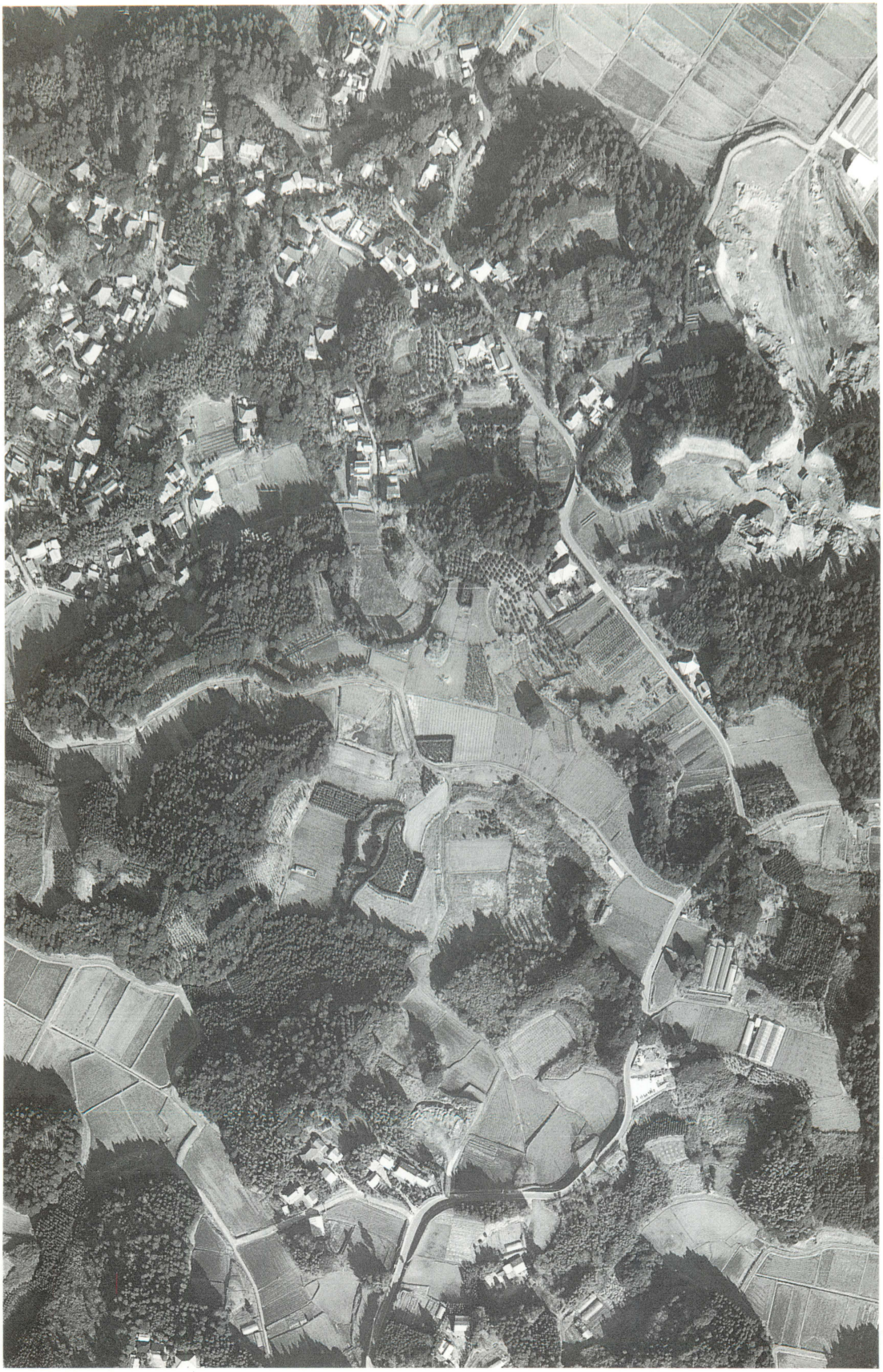
1　小宮　孟「千葉県における縄文初期のイヌ」『千葉県立中央博物館研究報告』－人文科学1－　1989

2　山崎京美「縄文文化におけるイヌの埋葬について」『國學院雑誌』86-2　1985

# 写　真　図　版

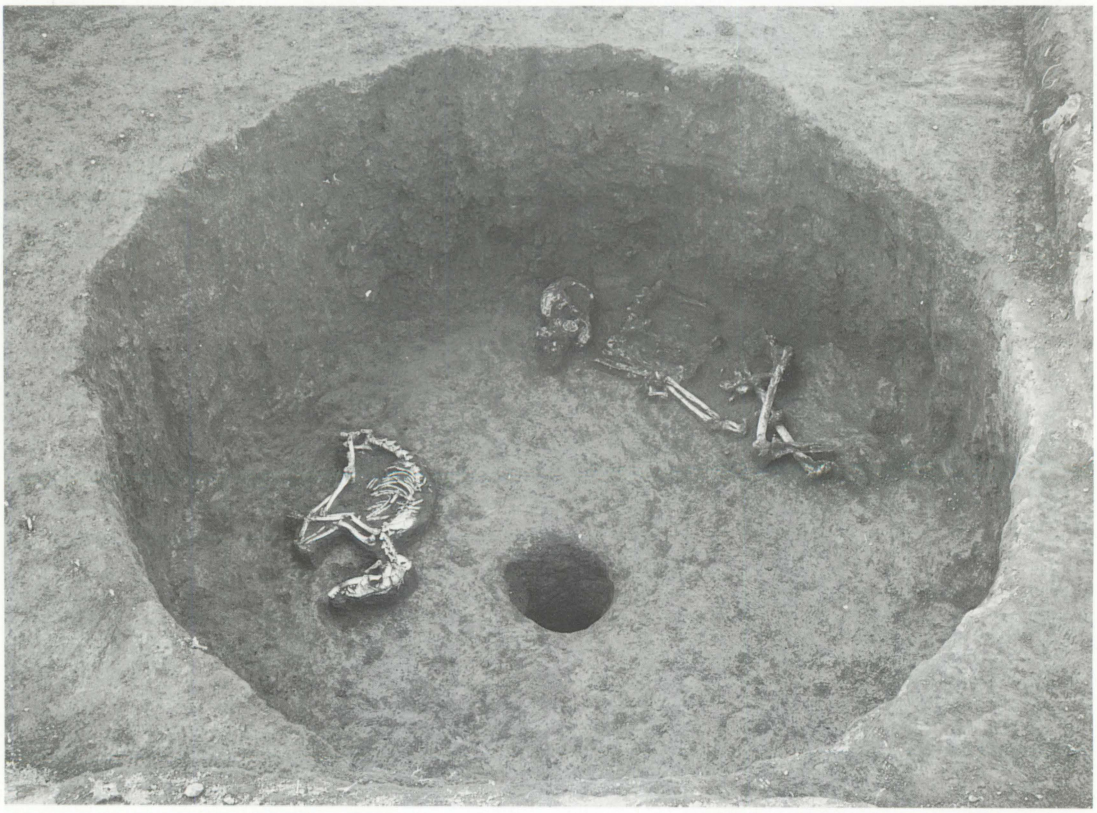



第30図　周辺の地形（1：5,000）



白井大宮台貝塚周辺航空写真（1：5,000）

1．遺跡遠景（八本貝塚付近より）



2．ＳＫ-01人骨・イヌ骨検出状況（東から）

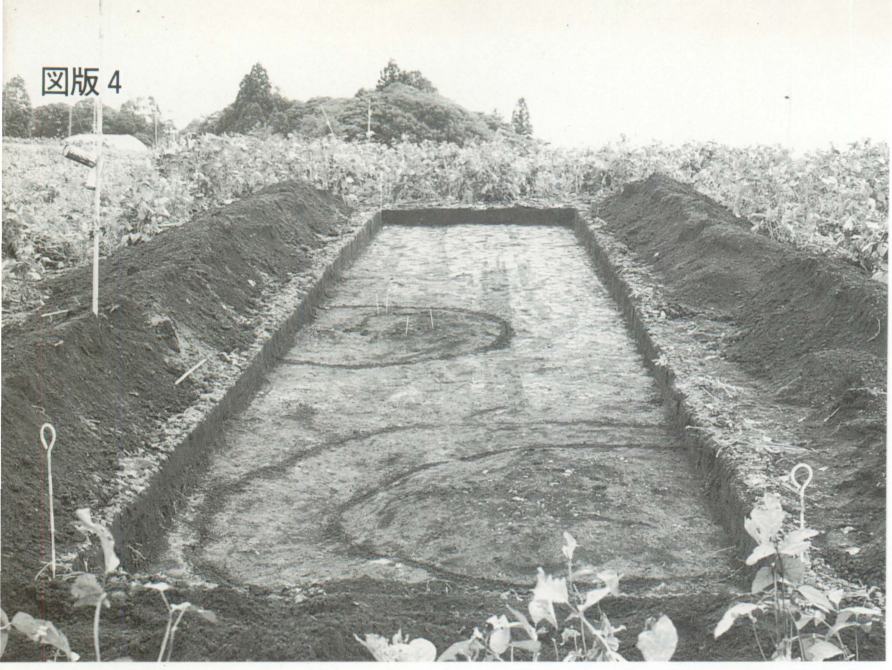
図版3

1．1T貝層検出状況（北から）

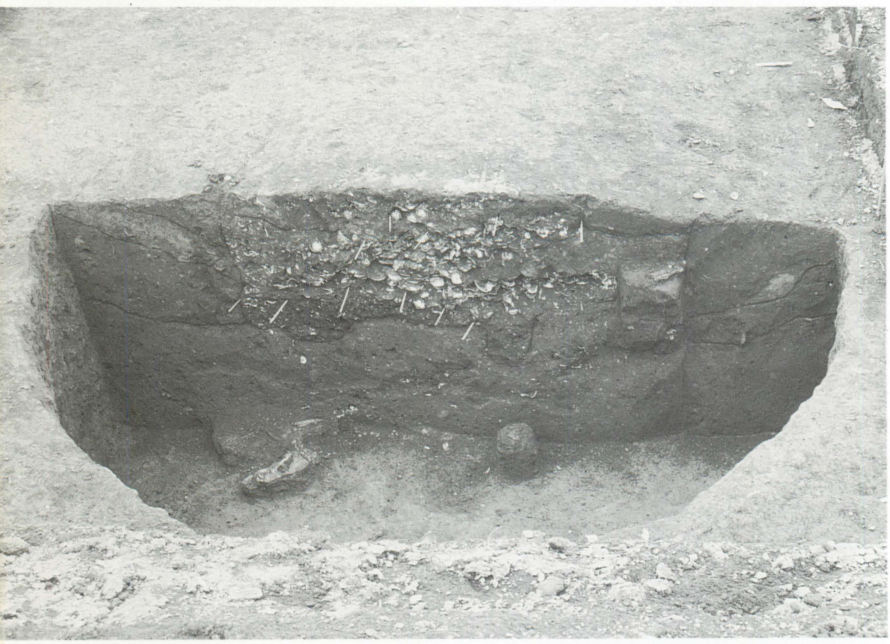
2．3T貝層断面（東から）

3．6T貝層断面（西から）

図版 4



7 T
1．ＳＫ-01･02検出状況（北から）



2．ＳＫ-01土層断面（東から）

3．ＳＫ-01イヌ骨・イノシシ骨
検出状況（北東から）

1．ＳＫ-01
イノシシ四肢骨近影（南東から）

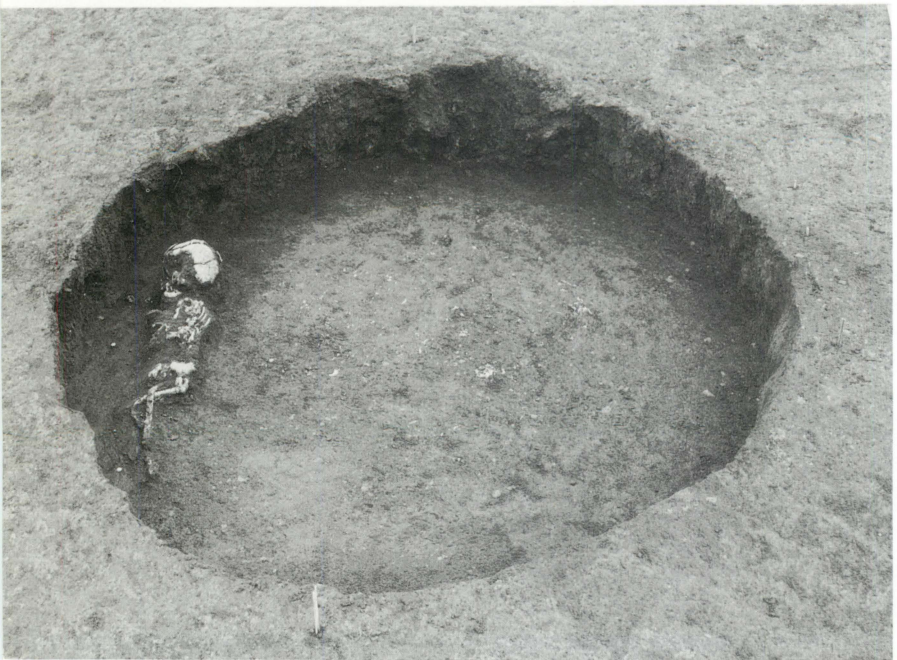
2．ＳＫ-01
イノシシ頭骨近影（南東から）

3．ＳＫ-01
イヌ骨近影（南から）

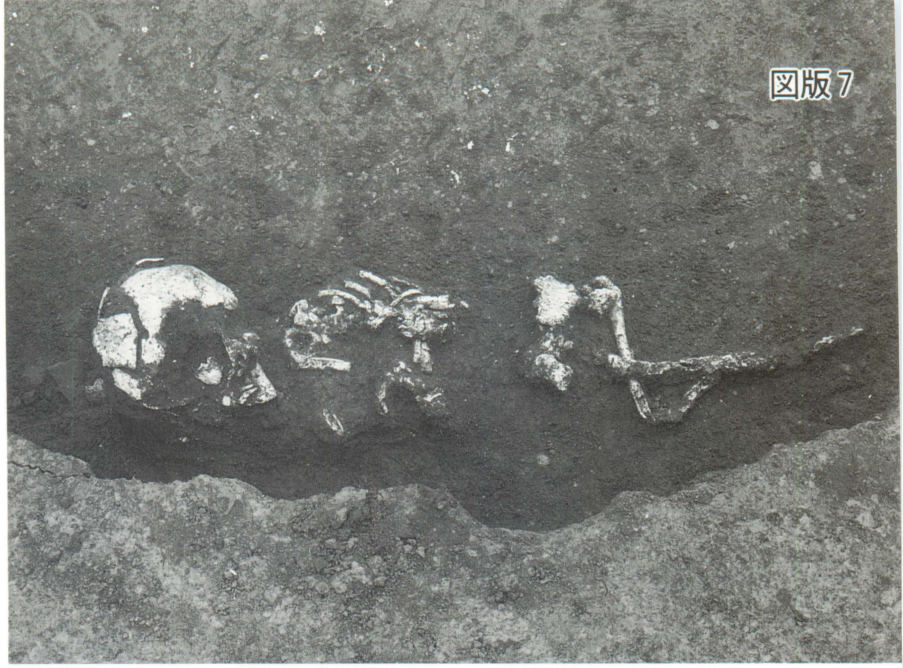
図版6

1．ＳＫ-01
人骨近影（東から）

2．ＳＫ-02
土層断面（北西から）



3．ＳＫ-02
人骨出土状況（東から）

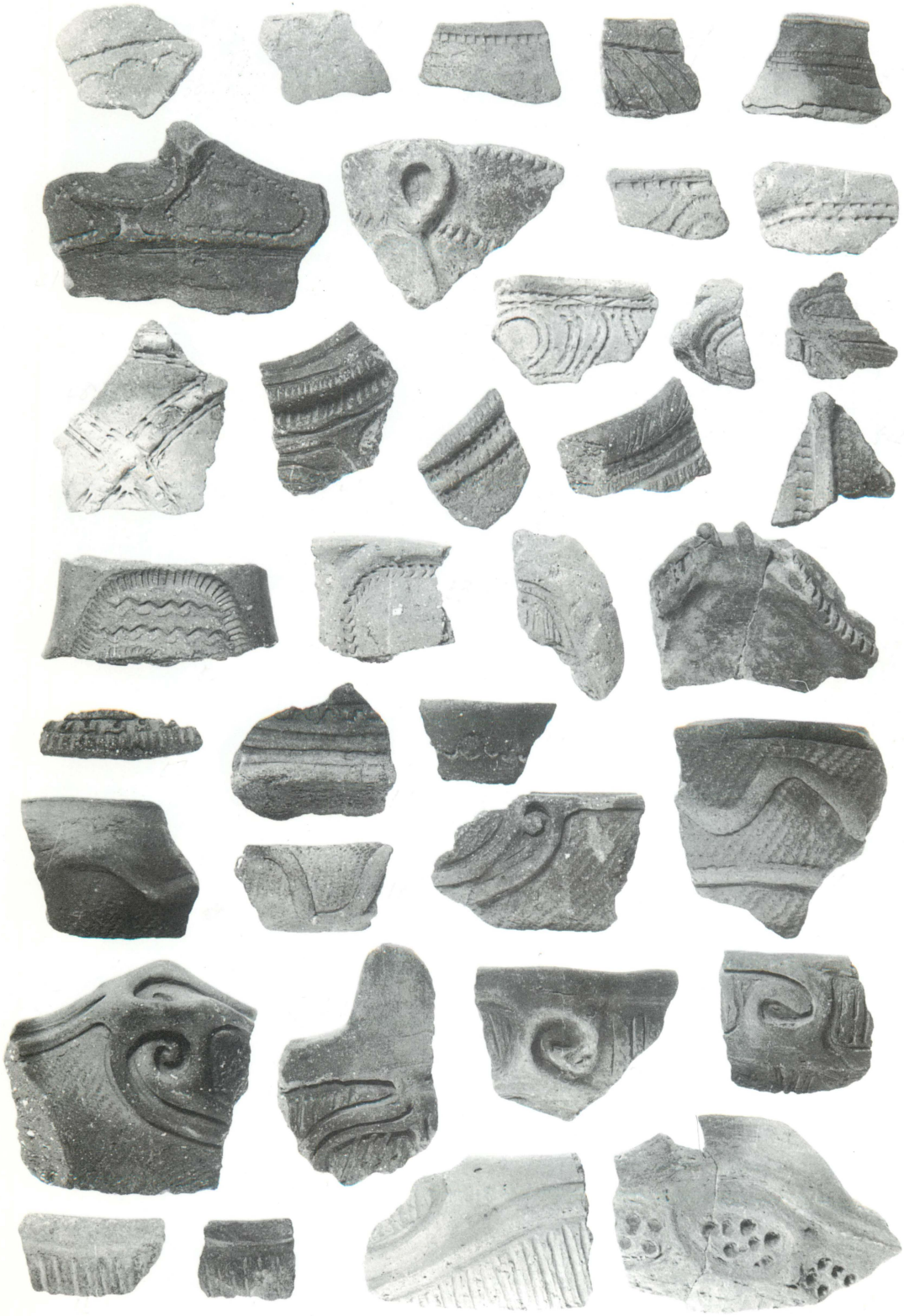


1．ＳＫ-02人骨近影(1)（南から）

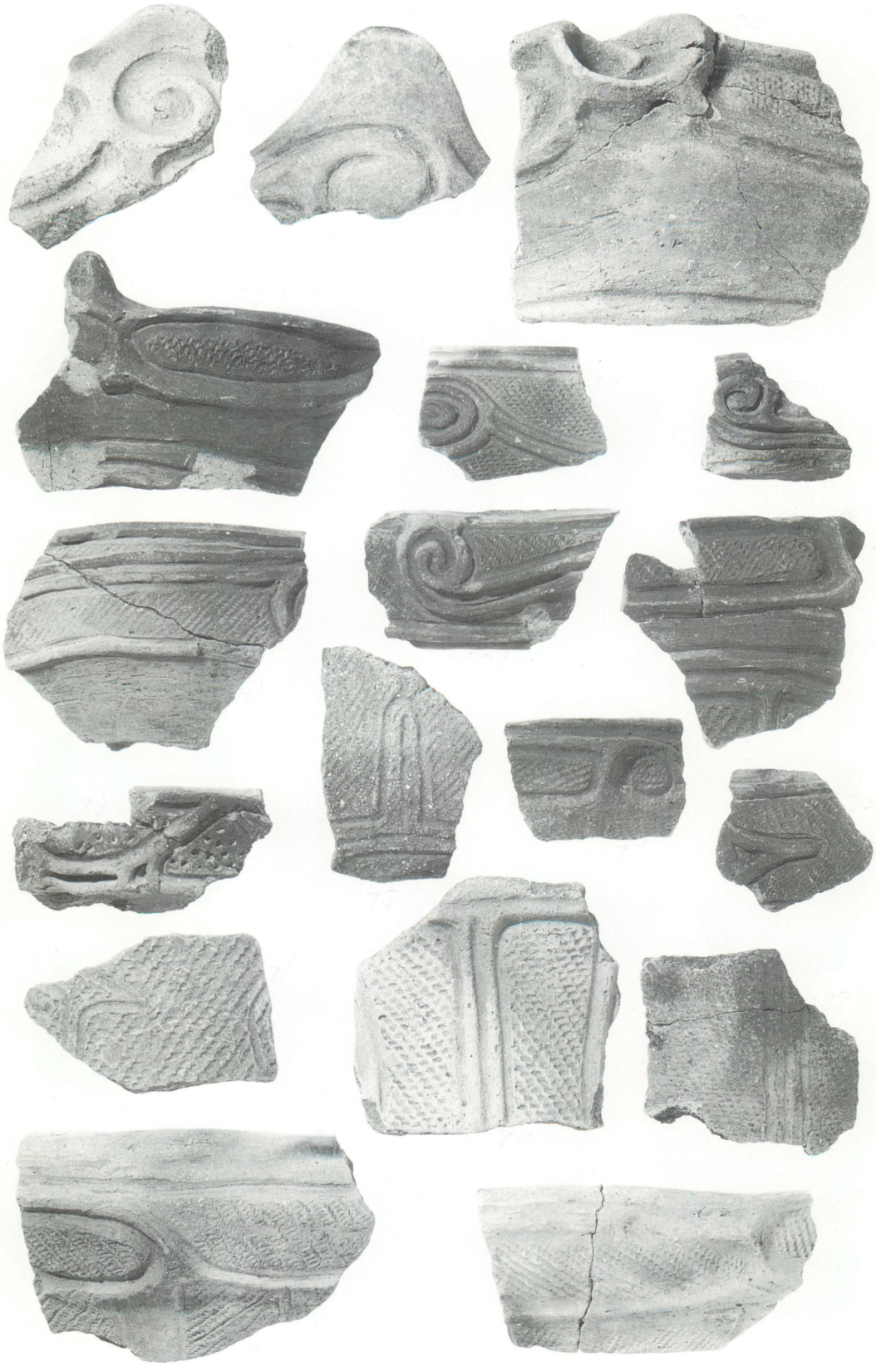
2．ＳＫ-02人骨近影(2)

3．９Ｔ貝層断面（東から）

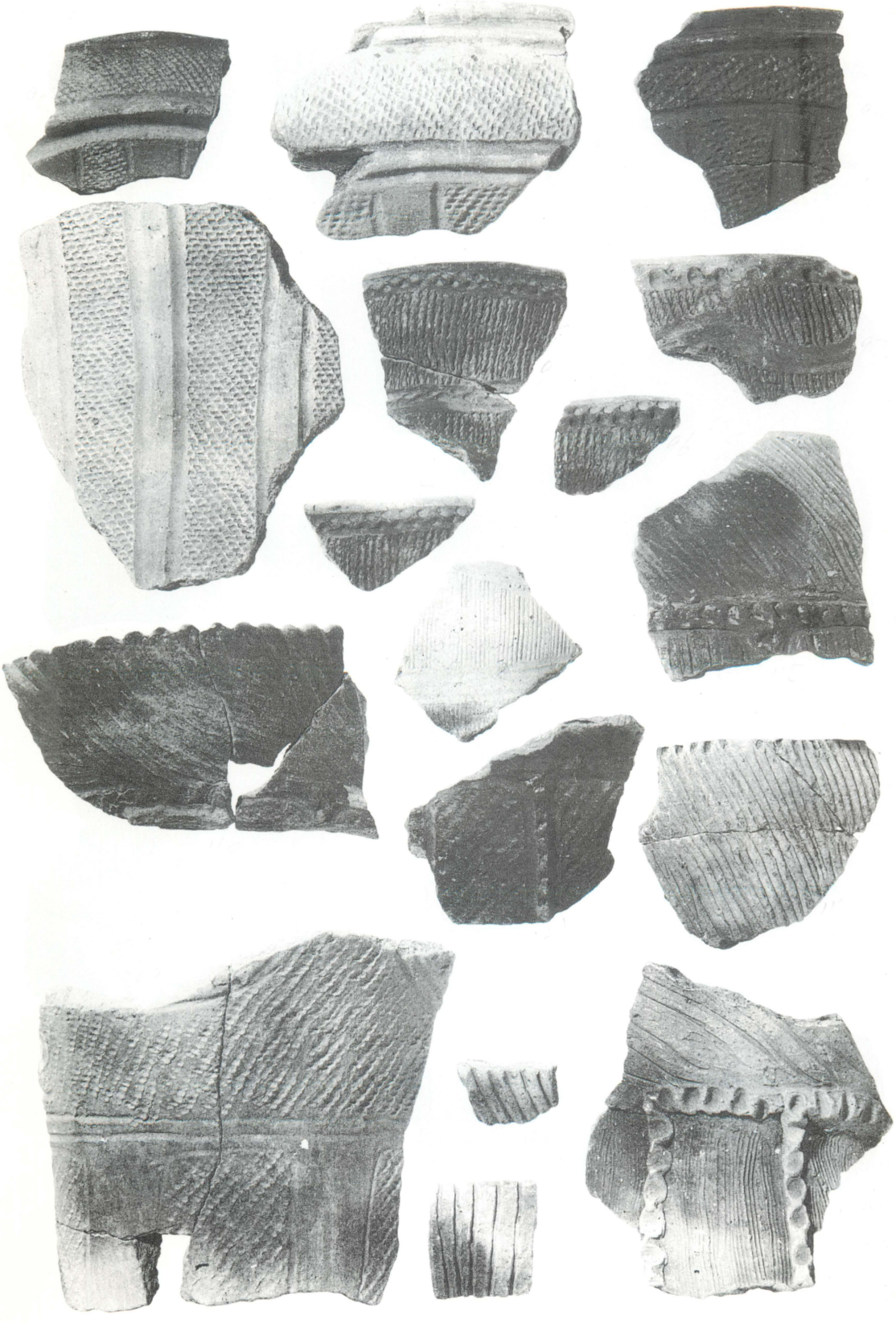
出土土器 (1)



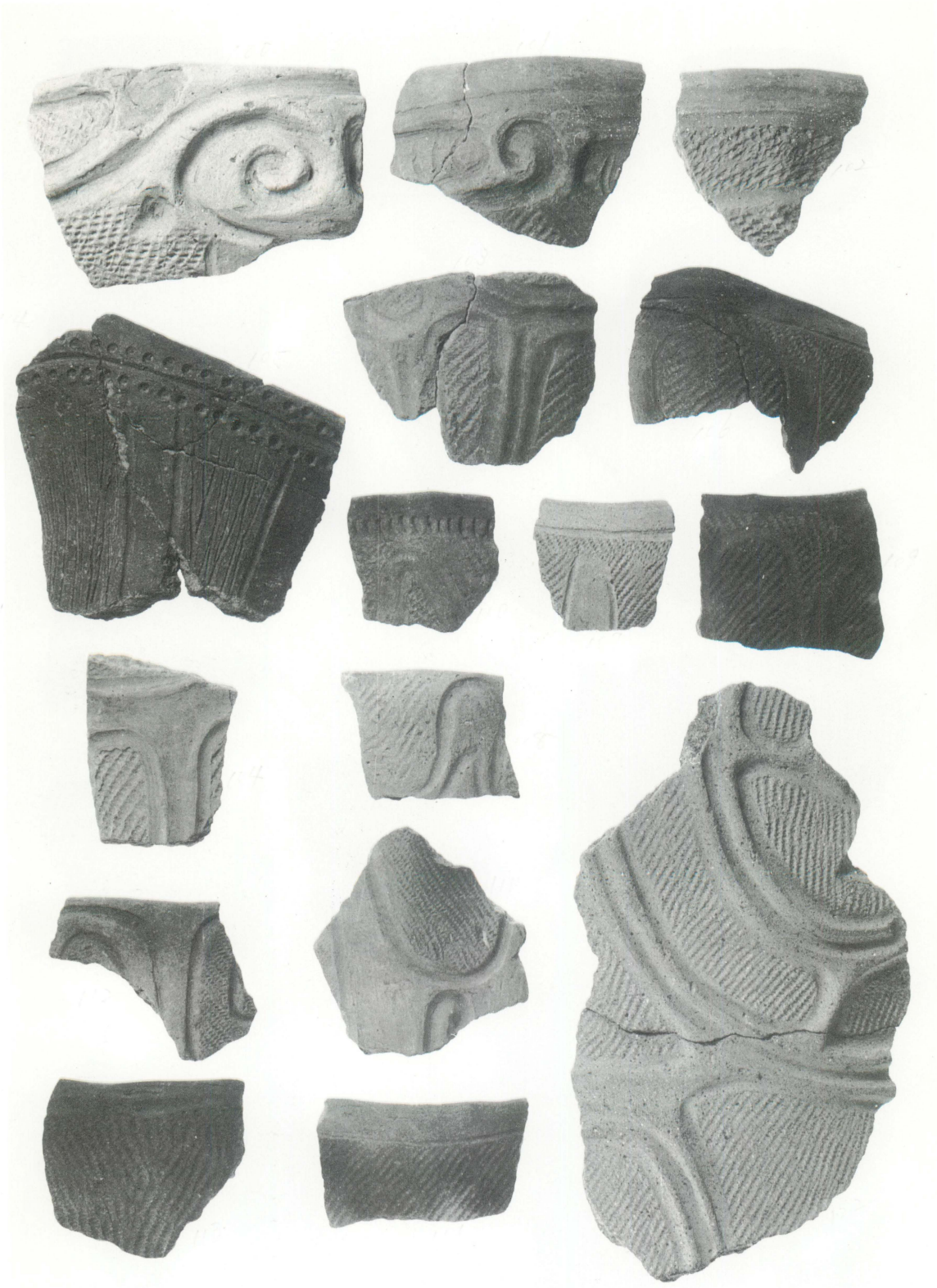
出土土器 (2)



出土土器 (3)



出土土器 (4)

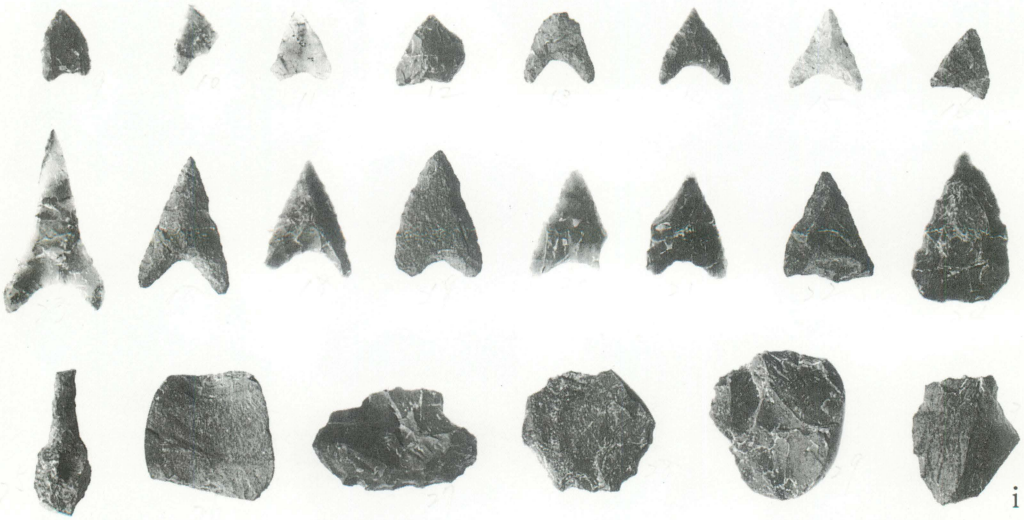


出土土器 (5)

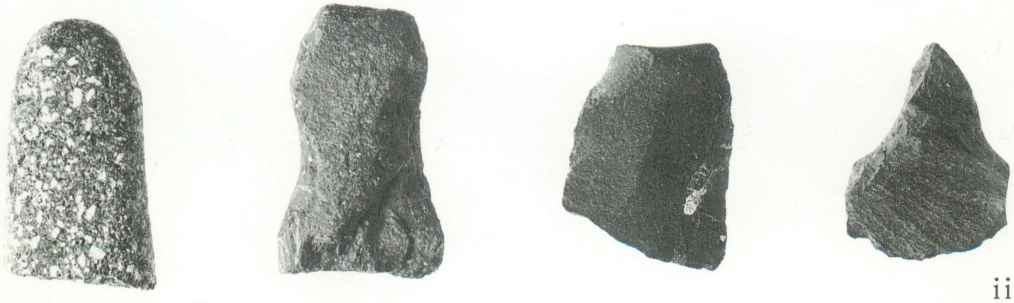
1．出土土器 (6)

2．SK-01出土土器

1．ＳＫ-02出土土器



i

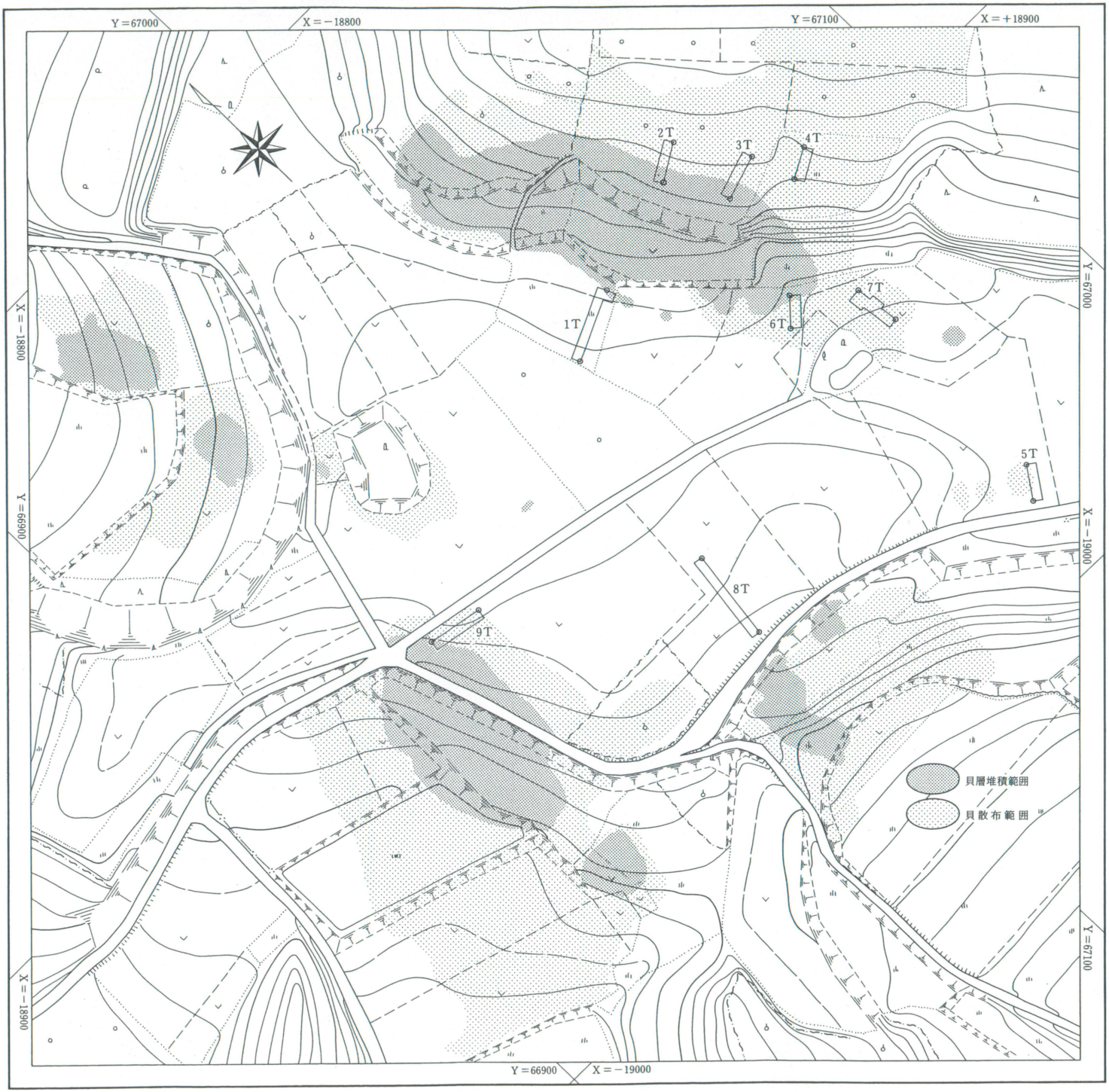


ii

iii

2．出土石器（i．石鏃・石錐等　ii．石斧・敲石・石匙　iii．その他）

第31図　白井大宮台貝塚地形測量図 (1：1,000)



千葉県文化財センター調査報告第220集
小見川白井大宮台貝塚確認調査報告書
―千葉県主要貝塚確認調査報告書第４集―

平成４年３月31日発行

発　　行　　財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地

印　　刷　　株式会社　弘　　文　　社
市川市市川南２－７－２

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て
増刷したものです。